
彼方の地から

竜胆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼方の地から

【Nコード】

N9915X

【作者名】

竜胆

【あらすじ】

飲み会の帰り、気がついたら知らない世界。【主】【妖精】【我が子よ】って……。誰か、いやお母さん、どういふことか説明してよ。戸惑いつつも、生来面倒臭がりで無表情・鉄壁マイペースな主人公が行く異世界探訪記。

1 「お前、誰？」

(・・・行ったか?) そつと溜息をついて肩の力を抜くと、トスン・・・と背を木に寄りかからせた。見渡す視界いっぱい平原。その奥に遠く見える街並。色とりどりの屋根。

(綺麗だなあ。)と、普段であつたならのんびり眺めるところだが…。

(どうしてこうなった?) 今度はさつきよりも大きなため息をついて空を仰いだ。

昨夜は友人の誕生日で、仲間が集まって祝いという名目の飲み会をしていた。5人で盛り上がり、主役が潰れたのを機に解散。残った友人と二人で主役を本人のアパートに運んだ後、タクシーで家の近くの公園前まで乗って帰ってきた。その頃はもう朝だった。

2

「今度、彼氏に会ってね。あんたの目で確かめてほしいの。」

高校からの友人・・・優佳はそう言って笑っていた。

「ああ、いいよ。でも厳しいよ、覚悟して。」

大切な友人を預ける相手なんだから・・・と意味を含ませれば、優佳は花のように笑った。綺麗だと思った。普段から可愛いとは思っていたけど、今は綺麗だと。いい恋をしてるんだと思えた。そういう相手なんだな、君を大切にしてくれているんだね。嬉しかった。

二人で公園のベンチでそんな話をして缶コーヒーを飲んだ後、学校

へ登校する小学生の列が見え始めたころ別れたのだ。公園から左が優佳。右に下って行くのが自分。

手を振って歩き出し、公園を出て右に下って横断歩道を渡る人波に少し遅れ……。

(あれ？ それからどうしたんだっけ？)

考えても何も思い出せない。まるで真っ白で、そこだけ切り取られたように記憶が……。

そんなに酔っていただろうか？確かにかなり飲んではいたが、もともと酒には強いと自負があったし、どうせ送って帰らないといけなின்றろうな、と思っていたから知らず知らずのうちにセーブもしていたはずだ。

考え込んでいるとさわさわと風が吹き抜け、肩より少し伸びた髪が首筋を撫でてゆくのがくすぐったかった。虫でも入ったかと襟と髪の間 hands を差し入れ、そのくすぐったい原因を掴みだした。

(……………)

見なかったことにしよう。

「あー、やっぱり酔ってたか？かなり。」

誰にいうでもなく、独り言。しかし……。

『ねえ、見えてますよね？』

（返すなよ。）

「夢、かな？これ。ってゆうか、大学始まつてる時間じゃ？」

腕時計は8時13分。優佳と別れた時間で止まっている。

「壊れたかな？あーあ・・爺様のお古だからなあ、これ。気に入ってたのに。」

ふるふると指を振って捕まえていたモノを軽く手放すと、さも残念そうに（いや本心から残念なんだけどね。気につてたのも本当だし。年代物の時計だからね。）時計を見てため息をついておいた。

『無視しないでいただきたいんですけど。斎木 詠星様。』

ひた、と視線を合わせる。そのモノと。

「お前、誰？」

ビリビリと身体が、いや実体がないのに身体がというと語弊があるけど、身体ごとその場の空気が痺れる様な気がした。

真っ黒な真っ直ぐな瞳がひたとこちらに向けられ、反らすことは許されない威圧感が迫ってきた。もともとうねっていた髪がざわめくように逆立っているような気がして、浮いているのに貼り付けられている感じがして動けない。

「もう一度聞くよ。お前、誰？」

さすが、あの方が呼んだ人間だと思わずにはおられなかったくらいだ。

この威圧感、迫力…人間版『主』か、もしくは親子。…まあ親子というのは絶対にあり得ないのだけれど。あの方は唯一無二、絶対の存在であり、永遠の理。

『私は、ウイン。』

聞かれたから答えたのだが、にっこりと笑った顔からは相変わらずの威圧感。

「聞き方が悪かったか？…こういう場合、名前を聞いていると思うのかい君、いやウイン。」

存外に察しが悪いね、と言われた気がした。

しかも名を呼ばれた時、呪を掛けられたような束縛を感じた。まさか…名で縛れる？

『わ…っ我が主様のもとへとご案内します。』

(こ、こわいよう。)

詠星の目の前に浮かんだまま踵を返そうとした時、その透明に近い羽根を掴まれる。

『千切れるうゝ、お助け・・・』

思わず泣き声を上げると、呆れたようなため息が聞こえてぱっと放たれる。

「そんなに力入れてないよ。・・質問に答えてないだろう？」君は、誰？”。もちろん、名前は聞いてないよ。」

(・・・)

『…生まれたばかりの木の精です。』

「妖精ってこと？」

『はい。まだお使いくらいしかできませんが。』

「では“主様”って？」

『私たちを統べていらっしやる“主”でございます。王…と言った方が解りやすいでしょうか、人間の世界では。』

(王・・・ね。絶対権力者ってこと？)

外国ならまだしも自分が住んでいた地域には王様なんていなかった

かピンと来ないし、主従関係らしいが、庶民にはそれも感覚的に解らない。

【妖精】

【王】

(こりゃ、友人がやっていたファンタジーゲームの世界だな。・・・
てことは何か？本当に道端なんかで寝てるのか？それとも、事故
ってあの世か？)

その時、声が聞こえた。

詠星・・・こちらへ。

きよろつと周囲を見回しても、何もなし誰もいない。ふと目の前
で羽ばたいているウインを見ると、さっきよりも元気がいい感じで
羽がばたついている。

「今のは？」

『主様です。道を開いて下さるようです。・・・愛されていらっしや
るのですね。』

(愛されて...って...。何だそりゃ。)

ため息をついた途端、扉が現れた。文字通り、“扉”だ。薄く透け
て見える様な感じで全体的に光背がさしてはいるが、それ以外は普
通の家にあるような扉、玄関の。

（入って来たってか？…怪しい。）

そう独りごちると、ウインの羽を捕まえて開けたばかりの扉から中へと放りこんだ。ウインならば眷属らしいから害はないだろうと踏んで、だ。その開けた扉の中、真っ白な空間に、何かがいた。人影ではない、でも嫌な感じはしない、何かが。

（…ってみようじゃないか。）

1 「お前、誰？」（後書き）

初めての投稿です。何卒生暖かく御覧ください。

2 「ううは、どい？」

廊下から人の気配が近づいてくる。とは言っても実際聞こえるわけではなく、気配だ。これはある人（人と言つていいのかわからんが。）から貰った力だが、意識しさえすれば扉や壁などを問題とせず、自分が知りたいものを探れるらしい。人の心も、らしい。身の危険があつたらいけないので、とくれたものだが、もちろん探れないようにもできるらしい。でないとしたら覗き魔だもんね。犯罪でめて力を使っているからです。

窓の外に向けていた視線を扉へと当てた時、ノックもなしに扉が開いた。

人の顔を見るなりほっとしたかのように、また残念だともいうかのようにどっちとも取れるため息をついて、部屋の中へ入ってくる。

【とまれ。】

つぶやくと彼はくつと足が床に縫い付けられたかのように、歩いてきた動作のままその場に止まった。

「で？」

驚愕に固まる顔へ向けてそう声を掛けると、彼は緑色の瞳をこつちへ向ける。

「先ほどの言葉は？ 私は一体…。なぜ拘束が解けないのですか？」

なかなかいいお声ですね。空きつ腹に響きます。さつき下を向いてぶつぶつ言っていたのはその拘束を解くための呪文でも唱えてましたか。さすが魔術師です。ですが……。

不意に彼の薄緑色の髪が風にあおられたかのように靡く。風の出所は自分だ。

風にあおられた髪がふわふわと顔の横に降りてくる間、ずっと目の前の彼を見続けていた。印象的で人目を引くのは、黒い髪と同じ色の瞳。この世界にも黒い髪の間人はいるが瞳となるといえないから。身長は低めだしその細い身体つきを考えると、まだ子供の領域だろうか。だが、それに反して表情は落ち着いている。見知らぬ人間に見知らぬところへ連れてこられたのに、だ。

「誰か来たね。」

「神官長です。」

答えた途端、拘束が解けてその場に座り込んだ。そして開けたままだった扉から神官長の……、

「ランバード神官長。」

彼の声に入ってきた人物は、びしりと自分の横で固まった。今だ座り込んだままで目の前の彼を見る。

「まさか神官長にまでっ…！」

「控えなさい。」

言いかけた言葉はその神官長に遮られた。

「愛し子様。お初に…いえ、私の代で御会いできるとは光栄に存じます。ウィル・セレン・ランバード、第326代中央神殿神官長でございます。」

「うん、最初に貴方に会うようにと言われたんだよ、…父に。

“母の如き慈愛のセレン・道を示す雄々しきウィル” 受け止める覚悟はあるか？」

それはランバードのことかと神官長を見れば、ランバードは静かに彼の前3メル（1メル＝50センチくらい）ほど前に膝をついて腕を胸の前で交差させて彼を見上げている。ランバードは拘束されてはいないらしい。彼はそれまでの無表情が嘘のように、にっこりと魅了するような笑顔をして自分の胸の前に両手を合わせる。するとその手が眩しいほどに光を放ち一瞬目を閉じて開けると、彼の細い白い手が開かれその中、いや手の上に浮いているような形で赤いものが光を放っていた。

彼はそれを指で摘み、一歩二歩とランバードの近くへ寄ると赤いものをランバードの額に押しつけた。一瞬ランバードの身体が震えたようにざわめいたが、彼は気にした様子もなく依然そのままの姿勢で口を開いた。

「ガイアスの代弁者 パウロ・ウィル・セレン・ランバード”あなたに父の祝福と恐ろしき枷を。愛し子なる我の手によって授けよ

う。」

ズズツ・・・と音が聞こえ、その赤いものはランバードの額に埋まっていた。するとランバードの額に赤い文様が浮かび上がる。それは鳶が絡まるような文様で、そして彼が身体を屈め額に唇で触れると肌に溶け込むように消えていった。

「神殿守護第一部隊副隊長 エセル・ソード。」

彼の声が威圧感を持って自分の名を呼ぶと思わず立ち上がる。ランバードが振り返った。

「また後日お披露目はあるかと思うけど・・・彼は今この時より、名を“パウロ・ウィル・セレン・ランバード”と名乗ることになる。あなたには証人になってもらおう。これ決定事項だから。拒否なし、質問なしでね。」

ああ〜疲れた。部屋のソファにすくとん、と座って目を閉じて天井へ顔を向ける。

「いかながなされた愛し子様。」

ランバードの声に目を開けると、彼とエセルが目の前に立っていた。エセルの方はいまだ釈然としない顔をしているが、ランバードの態度が恭しさを醸し出しているせいで自分には何も言えないらしい。

「お腹が空いたよ、パウロ。」

そういつとランバードは声を出して笑った。

私用だという部屋に通されて待っていると、エセルの指揮の下
食事が運ばれてきた。見目はいい。怪しそうな色も形もない。運ん
できたのはいずれも美形の三人。水色の髪を後ろで一つに束ねた少
し肌の黒い人はまだ若い男性。赤いうねり髪の美女はこれでもか、
と主張するバストの持ち主。そしてグレイの髪の……。

「クリス。」

名を呼ぶとびくつと身体が震え、ギギギツと音が聞こえるゼンマイ
仕掛けの人形のようにこちらを見る。その瞳は真つ青だった。エセ
ルが何事かと身構えるのが解ったが、そんなことには構わない。

「こつちへ、クリス。」

ダイニングのイスを少し後ろへ引き体を横に向けると、手招きをし
てクリスを呼ぶ。クリスは一度エセルの方を振り替えるようにして
見ていたが、もう一度名を呼ぶと怖々ながら自分の方へと歩いてき
た。どんだけ怖がられてんだ。シヨックだよ、少し。

目の前にやってきたクリスの手を掴む。小さな手だ。明らかに自分
より年下だろう。

「そのままでもいいと思ってる？それで自分を守れると？」

びくつとその小さな手が引かれようとするのを力を入れて離さない。
視線はその青い瞳からそらさない。

「なにをつ……。」

言ってこちらへ来るエセルを無視したまま、なおもクリスへと問いかける。どうせ邪魔はできない。

「護ってくれているものに悪いとは思わないか？君が受けた傷は大きいだろう。だが、それでも生きてこられたのは彼がいたからだろう？このままにしておくかと消えてしまおうよ？」

“消える”と聞いてクリスがびっくりした顔をする。

「彼はそんなことも教えてなかったかい？よほど君が気に入ってるんだね。自分が消えてもいいと思うくらい。でもね、彼が生まれたのは意味がある。そしてクリス、君が生まれたのにもね。痛みを抱えるのは悪いことじゃない、でもその痛みに関わられて歩き出さないのはいけないことだよ。生きていけば辛いことは沢山ある。君よりきつい命を生きてる人だっている。何より君を彼が護っているのは意味があるからだ。それを無視して生きていくのは許さないよ。それくらいなら、彼を解放しなさい。消える前に父へ返せ。」

少しきつく言ってみると、抗議するように影が揺らいだ。自分以外の人間が啞然としてその影を見つめている。

それ以上は……

言ってくれるな、と？いつまで甘やかすつもりだ。それが逆にクリスの立ち直りを妨げているのが解らないか？それとも自分なしでは生きていけないようにする気かい？それを父が許すとも思っているのか？クリスが幼いというのならお前が導いてやらねばこの子

は一生このままだぞ。今はいい、お前がいるからね。でもお前が消えたらどうする気だ。

影は人型をとって項垂れるように膝をついて自分を見上げている。ワノコがいる、と悶えたが、今は自重。皆はそれを信じられないように見つめていた。

御子様。

「クリス。」

「っはい。」

急に名を呼ばれて不安そうにしていたクリスは、裏返った声で返事をした。それに少し笑った。

「お前が自分の道を歩き出さないというのなら、彼は自分が引き取る。エセル、あなたなら解るだろう?」

“何が”と説明しなくてもエセルは肯いた。

「消えかかっている。彼はもう…。」

エセルの言葉にクリスは慌てたようにいつも自分の傍にいたであろう彼を見た。精霊だから透けて見えるのではない。もうはつきりと姿を現わせないほどに彼は摩耗しているのだ。霊力が。

「そんな…僕の、せい、ですか?」

きゅっとクリスの手を握る。

「そうだ、とも言えるし、また彼自身のせいでもある。彼は君を可愛く思うが故に必要以上に甘やかした。君が歩きだすために背を押さなかった。これは彼の罪だ。精霊と加護持ちは表裏一体。歩き出さない君に加護はいらないだろう？ 神殿で十分守ってもらっているのだから。」

きついだろう言葉を投げかける。まだ幼い少年に将来を決めると、歩き出せと急かしているのは解っている。でも、自分は精霊側のヒトなのだ。彼が消えるのを見ているわけにはいかないのだ。

ウインが“主”と呼んだ、王に当たる人（精霊王？）は、眩しい光の中威厳を持って佇んで……

詠星！！ やつと会えたあ！

「……っなん……ぐえ。」

……佇んでいなかった。抱きついてきたよ、そりやもう思いつきり。危うく首が絞まって天国の扉をくぐるところでした。叩こうが蹴ろうが離れない身体をどうにかして引き剥がさないと死ぬと思つた時、すさまじい力で自分の身体が後ろへ引かれ、精霊王も反対に引つ張られて、やっと離れた。温かく柔らかいものに包まれるように受け止められているのに気がついて周囲を見回すと、7人（7体

？)が立っていて、そのうちの緑の人に抱き留められていた。

邪魔をするな。私の詠星を返せ。

そんな駄々っ子みたいな言葉を言う時ですら、威厳のある声。しかし内容は全く、だったが。

ガイアス。詠星は死にかけてたぞ。人間なんだ、手加減しろ。半分は。

水色の人がそう言って自分の頬に触れる。この人は冷たい。

そうだったの？ごめんね詠星！感激のあまり、つい…。

くねくねしながら謝られてもなあ…。

感激度は解らないでもないが、まずは説明、だろう？ガイアス。

そうだったのは赤い人。

そうですね。座りましょうか？詠星。

促してくれたのは、空気椅子に座るように浮かんでいた茶色の人。

同じようにすると、まるでそこに椅子があるように座ることができた。高級な空気椅子はちゃんと身体を半分沈みこむように包んでくれた。

自分、緑の人、赤い人、茶色の人、水色の人、ガイアス、金色の人、黒い人、白い人。円陣を組むように丸くなって浮かんでいた。

詠星。何でも答えよう。聞くがいい。

黒い人の問いかけに、とりあえず、一番聞きたかった人ことを吐き出した。

「……どうですか？」

2 「1111は、ど1111?」（後書き）

主人公・・・斎木さいき 詠星大学えいせい1年生で19歳です。

身長が低いだの、細いだのと言われておりましたが、172センチ。

この世界の人たちがでかいのです。

3 「説明を求めろ。」

この世界の名は、ガイアースヒル……

地球と違う次元の惑星なのだが、周回するとき見えなくても交わる時間があるという。ガイアースヒルのガイアス達からは地球は見えている。地球からは、ただそこに宇宙空間が広がっているだけだ。

ガイアースヒルは精霊と魔法が存在する世界。そして、人の他に動物や獣人や精霊、神も存在する世界。

(”獣人” って……)

”神” ならば、信じるも信じないも、おそらく目の前にいるガイアスがそうなんだろうなあ、という感覚がありそしてそれは間違っていない。

(リアル・ネコミミとか？おおう、同級のお宅秀才の奴が喜びそうな案件。自慢だ！自慢。帰ったら自慢しよう。)

ひそかに心の中でガッツポーズを掲げている詠星に気がつかないまま、説明は続く。その交わる時、不可抗力としてある現象が起こってしまうという。

我の力が流れ込んでしまうんだ。

「はい？」

聞き返すと見た方が早い、と緑の人が手を翳すと、その空間に何か

が現れた。詠星の世界で似たようなものというと、ブドウが。まだ実が生りきれてない、小さな房のまま。

見ててごらん。

そういうと緑の人はその房を両手の間の空間に留め置いたまま ほんらと言った。見ていると房がだんだん実を大きくし、色が濃くなつてゆく。

僕は何もしてないんだけど、今僕の力がこれに流れ込んでいるのが見える？

肯くと、

魔力とか精力というのはね、これと同じように高いところから低いところへと流れる性質がある。今この実を取り巻いているのは私という精霊の力、つまり精力だ。これはただの実、魔力などはもちろん持たない。それが近づくと私の力をとりこんで急激に熟してゆく。・・・同じことが詠星のいた地球とガイアースヒルが交わる時、起るんだ。

「つまり、地球へガイアースの力が流れ込む？地球には魔力のあるものなんて存在しないから、空っぽの状態なんだね？」

（溢れ出た力が器を求めるように、空っぽの地球に注がれる、ってのは解った。でもそれが自分に何の関係が？）

詠星の疑問が解っているように、ガイアースが話し出す。

君たちは気がついてないかもしれないが、地球にも神はいる。我

らはお互いを感知しているのだが、地球の神というものは人間に対して不可侵なのだ。力を貸すとか導くとかではなく、見守ることが仕事だ。それによって地球の行く末が間違った方へ行こうが正しい方へ行こうが、ただ見守るだけだ。・・・彼らは人間が好きだよ。愚かしくて賢くて弱い人間がね。でも力を貸すことはできない。それはあの世界の理なんだ。しかし、人間に直接力を貸すことはできないが地球の寿命が尽きるのを阻止することはできる。それで我の力をそれに使っているんだ。我の流れ込む力を地球の修復と維持に転換して地球を守っている。

「ちょ・・・ちょっと待って？地球の修復と維持？地球ってそんなに危ない状態？」

文明の発達具合と大きさからいつて限界だね。何しろあの星は小さすぎる。その上、人が多すぎる。

そう教えてくれたのは赤い人。近くに座っていると何となく熱いことから、この人は見たまんま火の精霊なのだろう。さっき実演してくれた緑の人は木か植物の精霊。

そうだったんだ・・・と思う。このままでは地球はとか、危機感を叫ぶ人たちは沢山いて、でも何となく毎日を過ごしてきた。エコだの清掃作業だのにはできる限り参加はしてきたが、そもそも限界なんだ。信じている人がおそろくほとんどいないに等しいだろう地球の神様は、それでも地球を、自分たちを守ろうとしてくれていたんだね。今まで以上に感謝しないと。

でもな・・・。

「でも」？

身じろぎをするようにして、黒い人が口を開く。嫌な予感に喉が渴く。

それでもガイアスの力は多すぎるんだ。この星を維持し我らを生み、世界を作った。そして地球とか他の星へも力を流していても、なお余っている。

(ってゆーか、ほかの星もですか…。どんだけ?)

ガイアスを思わず凝視すれば、彼は照れて真っ赤になっている。

ヤダ！ 褒めないでよ、照れるから！

褒めてねーし。気持ち悪いから赤くなるな。・・力が抜けるだろう。結論はな！ お前がガイアスの娘だったことだ。

(・・・は?)

ユファ

とがめるような赤と緑と水色の人の声が飛んだ。ガイアスを見ると何も言わず、ただ自分を見て微笑んでいる。そこにはさっきまでのおちやられたような雰囲気はなく、それが真実だと語っている。

「説明を求めます。」

敬語なのに何で上から目線・・・と皆は思ったが、ガイアスの娘だ、

威圧感は半端ない。それこそが証明だろうが本人には自覚がないようだ。一番耐性のあるアルファがすいっと皆より詠星に寄る。

娘・・・というには少し違うのだが・・・。詠星、貴女はガイアスの力の塊だと言った方がいいだろう。貴女は人間の行う生殖活動、遺伝子を残すための活動から生み出されたのではなく、純粹に流れ出たガイアスの力の結晶によって生まれた存在だということだ。地球という星に貴方の家族というものがあり、貴女を慈しんではぐくんできたことは知っている。何より、私たちはそれをずっと見守ってきたからね。貴女が父と呼び母と呼び兄と慕う人間や、厳しいながらも貴方に稽古をつけていた貴女が爺様と呼んでいる人間たちと、貴女は違うのだ。それがどれだけの衝撃を貴女に与えるか、私たちは理解しているつもりだが、私たちは人間ではない。完全に理解はできない、できないが彼らと同じように貴方を愛し、慈しんでいることだけは貴女にも理解してもらいたい。特に人間的な言葉を使うのなら貴女の父親に当たるガイアスは。

詠星は黙っているガイアスを改めて見つめた。

光り輝くその姿がやけに眩しく感じられるのは、彼が色がなからだ。他の精霊のように赤だの黒だのと色がな。彼は（厳密にいえば彼なのかすら解らないが、見た目では男性型なので彼と呼ぶ。）肌も髪も瞳も・・・すべてが白かった。白い髪はその長身よりも長く、肌は内側から輝いている（いや比喻ではなく）。瞳は光彩ですら白い。おそらく普通ならば眩しくて直視できないはずだ。それを見ることができるのは、彼が加減しているからなのか、それとも・・・。

それは君が私の霊力の結晶、娘だからだよ。

他の者を見ることができないよ、と。ここにいる王たちは別だが、

それ以外の精霊や人間たちは目がやられてしまつし、何より密度が濃すぎて正気ではいられない、と。

(娘・・・結晶・・・)

ピンと来ないというのが正直な感想なのだが、それでも嘘や偽りの言葉でないのは感覚で解る。それは幼いころから備わっていた感覚で、詠星はそれ故過敏な幼少時代を過ごした。嘘や偽りや誤魔化しを感じられるというのは、子供にとっては辛いことだ。そしてそれに気づいて欲しくないと思うその人の気持ちすら手に取るように解つた。制御できない幼い頃は周囲を怖がり祖父の後ろに隠れてばかりの子供だった。祖父が一番嘘のない人物であつたからなのだが。

小学校へ上がつてすぐ、祖父には打ち明けた。自分はおかしいのかと。祖父は聞いた後にこりと笑つて言つてくれた。『それはお前は神様の加護を多分にもらつていいるからだろう。』と。『うちは神社だ。神様はすぐそこにいる。その神様がお前に力をくれたのだろう。』と。そういう祖父の言葉に嘘はなかつた。この人は本当に神様を信じているのだと感じられた。だから詠星も祖父を信じ神を信じられた。

その後、精神力を鍛えればその力を抑制できるだろう、という祖父によつて祖父の持つあらゆる武道を叩き込まれたには正直音を上げたかつたが。その修業という鍛錬の中で、常に自分の精神をコントロールに保つていれば、周囲の雑音を遮断できることを学んだのだから悪いことばかりではなかつた。ちよつとばかり女の子らしくない女の子が出来上がってしまったのには、両親が嘆いていたのは蛇足だ。

(両親。)

「自分はあの両親の子ではないということですか？」

そうであるとも言えるし、それではないとも言える。貴女は確かにあの人間たちの遺伝子を受け継いではいない。しかしあの女性の胎内にはいた。・・・それはガイアスの力が固まり貴女という存在ができ始めた時、地球の神たちが提案してきたことだ。彼らの世界では親のいない子は厳しい育ち方をする、と。だから人間の女性の中に貴方を宿らせてはどうか、とね。あの女性は自分ではそうと知らず子を宿らせていたが、その子は胎内ですでに命が尽きていた。その子を取り出し貴女を入れたのだ。あの女性に決めたのは貴女の家の神、龍神の訴えがあったからだ。生まれた時周囲から浮かぬようにとガイアスの力を変化させて貴女の地域の人間のように髪を黒く瞳も黒く。その後は龍神があなたを守ってきていた。しかし、限界があつたのだ。

アルファの言葉を受け継ぐようにして、茶色の人が言った。

人の身にはガイアスの力は大きすぎたんだ。

いきなり生命の危機宣言ですか？

このままではお前が消えてなくなると判断した。

待ったなし、でしたか…。

それで一か八かでこちらへ転送した。成功してよかったよ。

・・・殴ってもいいですか？

3 「説明を求める。」 (後書き)

人外でした。

4 「デザートはまだですか？」

危ないだろう！

「つい。すみません。」

伸ばしきった脚を元のようには胡坐に戻して空気椅子に座りなおすと、若干離れて茶色の人も座った。反射的に蹴り上げたのだが、届かなかった。というか測ったようにぎりぎりのラインまで下がられた。

力というのは形があるものではない。が、詠星は人としての型が定まっている。いわゆる”個体”だろう？モノのやり取りなどしたことはないからな。でもそのままにして詠星が消滅するのだけは避けたかった。地球にいて消滅するのであれば、こちらへ連れて来るしかなかったんだ。

龍神さまが構築した詠星としての人間の器には、ガイアスの力は大きすぎた。溢れる力に詠星の身体が飲み込まれ、人としての詠星は消滅してしまう、と龍神さまが泣きついたのだという。人としての器は外見の大きさのことではないから、身長が伸びようが体重が増えようが変りはしない。

ガイアスは最後まで反対した。“もし無事に来られなかったら？” “人間として生まれたのだから人間として死んだ方が幸せではないか？”とね。しかし、お前は人間として死ぬのではなく、消滅するのだ。影も形も欠片も残らない。それは幸せか？人間として死んだといえるのか？我らは何度も話し合った。そして実行したのだ。

詠星を此方へ呼ぶ。貴女を壊して再構築することをね。

・・・何かあったな、そういうの。

(仮面ライダーだっけ？改造人間って。・・・いやデビルマンか？)

兄貴のフィギアコレクションをもっと勉強しておけば良かったな。

「僕は…何をすればいいのか、解らない。」

クリスが弱弱しい声でそう言ってぼろぼろと涙を零し始める。その頬を白い指で拭いながら、彼は厳しい表情を崩した。

「生きてゆけばいいんだよ。精いっぱい自分の足で前を向いて歩いてゆくんた。誘惑に負けず、ズルイ近道をせず……。自分の意思で選びとって真っ直ぐに歩いて行くことが君と彼の力になる。留まったままでは君の生きる力が減ってゆく。そうなれば彼は消えてゆく。そういうことだ。騎士になるのもいいし、神官になるのもいい。普通に結婚して家族のために生きてゆくでもいい。君は何にでもなれるしどう生きるのも君の自由だ。ただ責任を持つことだ。君自身と、彼に、ね。いいんだよ、手放しても。こっちの世界に帰ったからといって彼は消えはしないから。」

そう言うとクリスはぶんぶんと頭を横に振った。嫌だ、と。離れたくない、と。

「どうすればいいのか、解らないけど…。僕ちゃんとする。逃げないようにする。それじゃダメ、ですか？」

「…いいよ、それで。どんな困難があっても逃げちゃだめだよ？ 苦しくても辛くても、生きていれば当たり前だ。君を守って死んでいった家族には味わえない感情なんだから、むしろ有難いと思いなさい。そして君が生きることで彼らもまた生きることになる。見えない君に教えてあげよう。君のご両親はここにいますよ。」

言った途端、弾かれたように周囲を見回すクリス、私はその場限りの…と言わんばかりに、彼を睨みつけた。彼は相変わらずの無表情で解っているよ、というような顔をして私を見ながらクリスに触れているのとは逆の手で空中を一撫でした。すると…

「パパ！ママ！」

クリスの左右に女性と男性の影が浮かんだ。それは半透明で頼りなかったが、確かにクリスとよく似た面差しをしている。クリスは二人に手を伸ばして、その二人もまた同じようにしたが触れることはできなかった。

「ごめんね、万能ではないんだ。ただ君に彼らが伝えたいことがあるらしいから。自分に触れてもらん？ 怖いかな？」

ううん、という感じで首を横に振って、クリスは彼の手に触れる。と、私たちには聞こえないのだが女性の影が口を開いて何かを話しているのが解った。そして男性が次に話し出し、片手を彼に差し出した。彼は繋いでない方の手でその影に重なるように手を差し出して、ぎゅっと握りしめる。次に彼が掌を開けると、シャラツと軽い

金属の音がして細い鎖が零れ落ちる。

「これ、パパの……。」

父親のネックレスらしい。確かに何もなかったのに。彼はそれを広げてクリスの首に架けた。

二人に返事をするクリスの言葉だけしか聞こえなかったが、不意に彼らが薄くなり始め、クリスの顔が歪んで涙が零れ始める。そしてゆっくりと微笑んで彼らは消えた。クリスは彼を見上げ、彼と目が合うとそのまま彼の腹部に顔を埋めるようにして泣いていた。

「愛し子様……。」

「泣いてもいいが悲しんではいけない。彼らは消えたんじゃないからね。……彼らは転生の輪に入ったんだ。やがて生まれ変わるよ。それが何時かは解らないが……。転生の輪に入るには厳しい審査がある。ご両親は心の綺麗な人たちだったんだね。大丈夫だよ、彼らはいま父の元にいる。魂は浄化の作業に入る。浄化され無垢な魂となつてやがてこの世に生れ出る。　　ライン。」

はい、御子様。

お前の靈力を高めよう。彼に与えて減ってしまった分をね。でなければ消えてしまうだろ？受け取るかい？

よろしいのですか？私などに……。

お前も等しくガイアスの子だろう？泣くよ、あの方は。お前が消えてもね。

精霊と何かを話していた彼は、精霊の額へ手をつけて何事か唱えた。すると、今にも消えそうな薄さだった精霊が輝きを増し、濃く生命力溢れる様相へ変化した。それによって精霊の顔立ちがはっきりと見え、その瞳が緑色なことが解った。

(馬鹿な・・・！)

属性は瞳に顕れる。精霊と加護つきの属性は同じはず。クリスは青だ、水属性のはず。

「クリス、大丈夫だね？」

それが何を聞いているのかクリスには解っているらしく、しっかりと肯いたのを見て彼はパチンと指を鳴らした。途端クリスを包んでいた透明な何かが弾けたかのように、パリンという微かな音がしてクリスの身体が一回りほど大きくなった。彼の腹部の辺りだった頭が胸辺りにまで上がってくる。

「ど・・・いう・・・。」

赤毛のメアリーが声を零した。

「彼がクリスを守っていたのさ。年齢と属性をごまかすためにクリス自体に魔法を掛けてね。そのせいで普通以上に霊力を消耗していたんだ。クリスの属性は緑。よって瞳は・・・。」

鮮やかなグリーンだった。透き通るほどに輝かしい色で、クリスの力の強さが解る。そして6つだと言っていた年齢も、9つだった。

「3年前の北部の惨劇を覚えていますか？」

ランバードの言葉に肯いた。その頃エセルはまだ神殿の部隊ではなく、王宮にいた。そこで話を聞いて行かせてくれるよう再三進言をし、やっと王宮が腰を上げた時には北部のその村は全滅していた。

隣国の傭兵がやったことだと発表があつたが、実際には傭兵ではなく正規軍がやったことだ。隣国は深刻な食糧危機で『テスの加護を失った』と周囲の国からは言われていた。畑はやせ衰え何を植えても枯れるばかり。物価は上昇し、王宮内の食糧さえ底をつき始めて、やっと周囲の国に助けを求めたのだが、それまでのその国の王族の横柄さや貴族たちの態度の悪さから積極的に援助しようという姿勢に出る国は少なかった。が、王族や貴族はそうでも国民には罪はない、やがて周辺諸国は国民にのみ援助を始めた。これにより王族と貴族の権威は失墜、それ自体が潰れてしまったのだが、仕えていた正規軍は行き場がなくなり傭兵化していった。そして村や町を襲いだした。北部の惨劇はそんな中起こった事件の一つだった。目的は食料の確保と亡命、そしてテスの加護を受けた者の排除。

「全滅だと言われた村人の中で、ただ一人生き残ったのがクリスでした。彼は彼の精霊に守られて、隣の町にある神殿に保護されました。あそこの神官長は同期でね、私の元へとクリスは送られてきて見守っていたのです。再び襲われることを恐れて心を閉ざした彼に、私は生き残りがいると報告はしなかった。」

ランバードはそう言ってテーブルのカップからお茶を飲んだ。

「リンドルがテスの加護を失った原因は知っているか？」

テーブルの上にあった皿は全て空になっている。

(どこに入ったんだ？)

相変わらず細い彼の腰回りについて目を走らせながら首を横に振った。

「テスが子供好きだと知っているか？加護を失ったその日、テスの神殿にはひと組の男女がいたんだ。テスの加護を受けるべく生まれた緑の瞳の赤子を連れた夫婦がね。夫の名はアリー、妻の名はコレル。あの国の第二皇子とその妃だね。新たに生まれたその子に、テスが加護を授けて精霊をつけようとしていたその時、目の前で二人と赤子は殺された。神殿が血で汚され、土足で踏み荒らされ、そして赤子は両目を剝り抜かれた。それを指示したのはカイロス。自分の弟に加護つきが生まれて、自分の地位を失うことを恐れた故の愚かな行為だった。」

テスは怒ったよ、と彼は言う。緑の王であるテスは植物の王でもある。リンドルの食糧危機はテスの加護を失った故という話は本当なんだよ、と。

「加護つきはそうは多くない。だからこそ王たちはその存在を慈しむ。クリスについた彼はもちろん王の怒りの原因を知っていたから、クリスを、この国を守るためにも逃げたのさ。クリスの属性を変え、人の多い町をあえて選んで逃げた。“木を隠すには森の中、人を隠すには…”ってね。もしクリスが死んでいたら、次はこの国だったんだよ？」

知ってた？と彼はふつと笑った。あまり表情を変えない彼のそんな変化にドキツとする。

「な・・・ぜ？」

「助けに行くのを渋ったろう？パウロが何度も進言したし、君もだね。でも北部の警備隊に指示を出すばかりで行くのを渋った。理由を知らないでも思っているのか？愚かだね人間は。都合がいい時ばかり精霊に願いを聞いてもらいたがり、都合が悪い時は気がつかなかった振りをする。・・・自覚することだよ、君たちは常に精霊に囲まれて生きている。この世界は人間が中心なのではない。君たちは”生かされている”ということに。」

だからアルファとユファに嫌われるんだよ、と笑った。夜の精霊と昼の精霊の名だ。

「あーところでパウロ。すっごく悪いんだけどね。」

表情は変わらないものの、気まずそうな声で彼は視線をエセルからランドールへと向けた。> pbr .

「何でしょうか、愛し子様。」

ランドールはニコニコ微笑んで彼を見る。それで安心したかのよう
に彼は言ったのだ。

「デザートは、まだかな？」

（だからどこに入ってたんだ。）

4 「デザートはまだですか？」 (後書き)

白の精霊 〓 昼の監視者 〓 ユファ

黒の精霊 〓 夜の監視者 〓 アルファ

緑の精霊 〓 植物の監視者 〓 テス

・・・名前が大変です。忘れそう。

5 「タマでもポチでも。」

「愛し子様。」

それは、つい2日前突然に顕れた彼への呼び名だ。

黒い髪に黒い瞳。すらりとした肢体に中性的な面差し。

「何？ メアリー。」

見上げると木の上で枝に寝そべるようにして、ぶらんと片足を垂らしている彼を見つけた。

「使者が来ております。」

そう言うと、ふーんと言いながら動く様子がない。もう一度「愛し子様。」と呼びかけると、“面倒だなあ”と言わんばかりに上体を起こし枝から飛び降りてきた。

目の前に立たれると、そう身長は変わらないのに自然圧倒されるような感じがして2歩下がる。

「メアリー。」

ずっと彼の手が伸びてメアリーの髪に触れると、何かを掴んで目の前で開かれた。乗っていたのは、この季節珍しくないテントという虫。髪についていたらしい。

「きれいな髪だね。・・・髪を切るのはよした方がいい。女性の髪には魔力が宿ってるよ。」

そう言っただけは神殿の方へと歩いて行った。

けしてやたらと威圧的なわけではないが何となく人目を引き、そして近寄りたがたい雰囲気が出ている。彼が人を厭っているわけではないのは神官長との関わり具合で解るが、親しく声を掛け合うという感じは持てない。

『愛し子様だよ。』

エセル様に呼ばれて神官長が神殿警備隊の建物へ入った後、一緒に連れていらつしゃった時におつしゃった言葉。

“誰の“愛し子様であるのか、と聞けなかった。その醸し出す雰囲気は常人と違っていたから。神官長自らが先導して気を遣いつつ階段を登る姿を見れば、察して余りある。

最初はまだ子供かと思ったのだが、どうやらそうではないと解つたのは食事を運んだ時だった。落ち着いた物腰とまるで年を経たような瞳の深さ。クリスを導いた時の叱責のきつさと、その後の慈愛。見惚れるほどだった。

「・・・ああ愛し子様。一生ついて行きますわ。」

「愛し子様。お初にお目にかかります。」

(・・・『愛し子様』・・・ね。気恥ずかしいんだよねえ、それ。背筋がぞわぞわとするってゆーか・・・。まあ仕方ないんだけどね。) 名は体を縛る力があると赤のエンヤが言っていた。

万が一にもガイアスの子であるお前を縛る力のある人間がいるとは思えないが、教えないに越したことはない。と。

気になるような通称を名乗ればいいとは言われているが、思いつかないまま今日まで来ている。

目の前に膝をついているのは3人。

「リンドル国王 オズワルド。何の用？」

今さら何だ、と聞いてやる。

すっかり瘦せ衰え、国を、貴族を御する力も失った哀れな王。そば

に控えるのは此度の騒動の原因となつた皇太子の妃と第3皇子。皇太子は、テスの怒りで事件が起こつた時神殿で死んでいる。王族相手にぞんざいな口をきく自分に、ピクリとオズワルド以外の二人が反応した。

「此度の件、精霊王は何と？」

「それを聞いてどうする？お前に取りなす力があるとしても？それとも会いにでも行くか？見ることすら叶わぬ相手を。」

パウロが自分の席を用意してくれたのだがそこには座らず3人の前に立つ。

煽る気か？

どういう腹積もりなのか、探ってからでも遅くないでしょ？

話しかけてくる金のオーズにそう返しながら3人を見る。

どっちにしるガイアスに引き合いわせるところか口利きをしてやるつもりもないし。

・・・成程な。テス、お前の獲物だとき。さすがガイアスの娘だ。よく似ている。マルスを置いてゆく。好きに使うといい。

そう言つてオーズは自分の神殿へと帰つて行った。後には同じく金に輝く青年が残つた。金の瞳に、くるっくるの金の髪。優しげな印象を与える外見とは裏腹に、目が腹の中を覗わしているかのように感じた。

腹黒そう。

御褒め頂き光栄です。御子様。

褒めてないし・・・。マルス、テスの領分だ、手を出すな。

・・・！御意に。

それらの会話は思考の中でのみ行われたもので、他の人間に悟られることなどなかった。

「我が息子の不始末につきましては、私の恐れ多いことと感じてお

ります。テス様のご加護を戴いたにも関わらず……。」
反省している、だからと話は続く。要は自分たちの国を元のように加護してほしい、贅として皇太子を捧げたのだから、とか何とか……。

（馬鹿だなあ。）
と思う。

テスを宥めてガイアスに取り成しを頼むと言っているのだ。

「あれが生きていれば今後もテスの加護が続いたというのに、愚かだな、お前たちは。」

自分の言葉に耐えかねたように第3皇子が立ちあがった。さっきから聞いてないような素振りをしていたのも気に障っていたらしい。実際聞いてなかったけど。

「父上がこうまでして頼んでいるというのに、平民の分際で……！」
パウロとエセルが庇うように前に出てくるのを片手を上げて制して、向き直る。

「分、と言ったか？お前は弁えていると思うのか？……ただの人間だろう？お前は。」

ゆっくりと視線を上げてゆく。それに沿って第3皇子の身体が持ち上がってゆく。もちろん誰も触れてはいない。自分も指一本動かしていない。

やがて自分の身長くらいまで空中に引き上げられた第3皇子に、階段の途中から見上げたまま言葉を掛ける。

「国をどうする？お前が継ぐか？それとも、兄が死んでこれ幸いと抱いた皇太子妃の腹の中の子が？」

妃が息を飲んでお腹を庇うような素振りを見せた。夫が死んで喪も明けぬうちから、盛んだこと。

「国はいずれ復興しよう、そこに民がいるからな。しかし、お前たちがのさばるのは罷りならん。もう次に国を継ぐ者の選出は始まっている。それはお前たちの預かり知らぬところだな。」

息を飲み込む音が聞こえた。自分たち以外に、誰がと言いたいのだ

ろうが……。

「元々国というのは民の為にあるものだ。王族の為にあるものではない。お前らとて最初はただの民だったろう？そんな簡単なことも忘れたか？世界があり精霊がいて、初めてお前たち人間は成り立つ……知っていたか？加護持ちが死ぬとき、精霊もまた一緒に死ぬことを。寿命ならば仕方ない。が、テスの愛し子をお前ら人間が殺したんだ。ノール。」

「は……つい。」

第3皇子が辛うじて掠れた声を出す。

「この女の腹の子が死ぬばお前はテスの気持ち解るか？人は自分が体験したことではなければ実感できんだろう？」

「な……にを……。」

マルス。腹の子だけな。

御意。

皆にも見えるほどにマルスが光り輝き、その手にした剣で妃の腹部を撫でた。「ひっ。」と小さく声がした時には、自分の掌の上に小さな固まりが載っていた。

保健の授業で写真付きで習った胎児。まだ2、3ヶ月の。

「お前の子だ。妃の腹は空っぽだよ。」

驚愕に見開かれる目。それはパウロ以外の人間みなだった。

「斬るか？お前の兄がしたように。テスの愛し子にしたように。」

「斬るか？お前の兄がしたように。テスの愛し子にしたように。」
深い怒りが伝わってくる。腹の中の子だという小さな固まりを掌上に浮かべて彼はじっと空中に浮かんでいる第3皇子を見つめてい

た。

「その子には・・・罪はつ・・・。」

皇太子妃がそう口走って詰め寄ろうとする。と、

「では聞くが、テスの愛し子に何か罪があったか？殺されたあの赤子には？・・・罪とは何だ？オズワルド ノール ユリア。」

3人の名前を呼んでそれぞれの顔を見つめる。

「罪がなくとも人は殺されていいのだろうか？ではこの子もよからう？少なくともこの子の親は罪人だろう？母親は夫の弟と契り、父親は兄の妻を寝取った。祖父は国を顧みず遊興に耽り、諸国からそっぽを向かれた揚句、息子の暴挙を止められずテスの怒りを買った。国を民を見捨てて自分たちだけ逃げたのも罪の一つだろう？」

謁見の間に怖いほどの静寂が漂っている。そしてその静かな空間に彼の言葉は続く。

「赤子は目を剝り抜かれた。そしてカイロスに踏み潰されたぞ。加護つきと精霊は一心同体。赤子が受けたのと同じ痛みを精霊も受ける。それがどういふことか解るか？テスの目の前でテスの愛し子は目を抜かれ潰されたのだよ。・・・ノール、ユリア。お前達の目の前でこの子を同じようにしてやればお前達は痛みが解るか？・・・オズワルド、ノールをそのようにすればお前は自分の罪が解るか？

先ほどノールが言ったな、“平民の分際で”と。解って言ったか？我は何と呼ばれていた？お前は何と我を呼んだ？オズワルド。」

「い・・・愛し子様・・・と。」

「“誰”の愛し子だと思つて口にした？我は”人”か？お前たちは誰に何を頼んでいるのか解つて口にしているのか？それが許されることだとも？」

解っているのか、と彼は問う。

空気が怒りで震えている。静かな声であるにも係わらず、圧死するほどに重い。その私より小さな背が怒りで溢れ、そして悲しみに染まっているのが解る。

ドサツとノールが空中から投げ出された。

詠星。

精霊語が聞こえた。前回クリスの件が片付いたときに彼に何という言葉と話していたのかと聞けば「精霊の言葉だよ。」という返事だった。その言葉だ。人間には耳にしても意味は解らないし、話せないのだという。確かにどうやって気をつけていても聞く傍から音が霧散してしまう感じだった。

テス貴方に任せるよ。貴方にこそその権利がある。

彼が何かを言うと、急に空気の密度が濃くなった途端そこに緑の精霊が現れた。

“テス神“

その表情は常に穏やかだと言われている。豊穡の神、実りの神。が、

『我がわざわざ来てやったのだ、感謝するんだな。我は”これ”ほど気が長くない。すぐに済むぞ。』

頭の中に直接響く声に3人が青褪め、また彼が反応するのが解った。

”これ”って何だ！”これ“呼ばわりか！

早く決めぬからだ、呼びにくくて仕方ない。

何を言っているのかは解らないが、テス神は彼を振り返って笑っている。それは穏やかな笑顔だった。

だって思いつかないんだよ。

困ったような表情の彼にテス神は口を開いた。

タマでもポチでもいいじゃないか。どうせ人間には意味は解らないんだから。

聞いた途端、彼は勢いよく私を振り返った。

「エセル！」

「はい……。」

いきなりで間の抜けた返事をしてしまう。

「許す。斬れ。」

私に死ねと言うのか。

5 「タマでもポチでも。」（後書き）

赤〓炎の監視者〓エンヤ

金〓大気の監視者〓オーズ

うらん、あと二人です。そして詠星の通称も何にしよう……。。

6 「あなた、いいね。」

神殿づたいに、裏のこんもりとした小さな森を抜けると、とたんに声がたくさん聞こえてくる。

(ああいたいた。)

「エセル！ エセル・ソード！」

呼ばれた声に振り返れば、澄ました顔をして彼が立っていた。

ここは神殿隊の鍛錬場だ。森に囲まれて、周囲に被害が行かないよう配慮されている。

「どうなされたのですか？」

駆け寄って行けば、周囲がざわめいた。

「見に来てみた。」

ちやんとやつてるんだねえ・・・と無表情ながら感心したような口調で言う。馬鹿にしている風ではない。

ふっと視線を感じて振り向けば、皆が鍛錬の手を止めてこちらを見ている。初めて見る彼に興味津々な様子だったが、副隊長の私がいるから声は掛けられないようだ。

「神官長は？」

「お仕事だよ、今お城みたい。」

「それって・・・御一緒されるはずではなかったのですか？」
確かそう聞いていた。

「そうだったっけ？」

「そう聞きました。」

「ええ？聞いてないなあ・・・。自分も入れて？」

空惚けた様子でそう返してくるのに、ため息をつく。その返しから、行きたくなくてランバードに押しつけたのがありありと解った。しかも“入れて”とは、もしかして……。

「だ……。」

「どつちにだ。」

だめですよと言いかけて被さってきたその声に横を見ると隊長が立っていた。今朝から宮殿に行っていたはずだが。

「うん……どつちでも？ ミハイル・ブロスワーズ。”風神のミハ”？ へえ……面白い渾名だねえ。」

ねえ彼って……。

ライガの獣人です。主人の一番のお気に入りですよ。

嫉妬だ？

そんな下等なことは……。

じゃあ何で私をぶつけようとするのさ？

マルスは言葉に詰まったように、フンと横を向く。

意味は二つあるのだろう。1つはミハイルが気に入らない。2つには私が気に入らない。自分の主人の関心を持っていくモノは全て気に入らないのだ。

それは解らない感情ではない。ある意味、精霊らしいと思う。精霊は気に入ったものにはしか関心を寄せない。あとは自分が魅かれるモノだけにしか、だ。ガイアスが私に構うのは、私を娘だと認めているからだ。自分のモノだと。その執着ぶりはおそらく人間のそれより強いと思う。だって精霊は子孫を残すわけではないから。ガイアスはこの世界が始まってからずっと一人だった。で、物足らなくて

各精霊王を作った。自分の力の一部を分散させたのだ。
まあいい。乗ってやるう。

「誰に聞いた？」

「あなたに加護を授けたオーズの身内の精霊から、だよ。ここに
いる。」

「お前：いやあなたはランバード神官長が言っていた・・・いと・・・」
言いかけた言葉を最後まで言わず、私にはっこりと微笑んでミハ
イルに言った。

「素手の勝負を所望するよ。」

魔法なし、武器なしの素手勝負。

それがどういうことか解った上で言っているのか、この少年は・・・
という呆れかえった表情の隊長ミハイルは、茶の髪に金の瞳でさす
がに獣人らしい優れた筋肉をお持ちのようだった。

（いやあく眼福眼福。ってゆーか、ライガってあれだな、ライオン
というより、トラ？）

別に身体に縞模様があるとかではないのだが、耳はある。本物のリ
アル・ネコ（トラだけど）ミミ。さらに尻尾。

（ああ・・・あの尻尾は勝負が終わった暁には、触らせてもらおう。
お願いしちやおう。つか、触る！、絶対触る！撫でたい、弄りたい、
引っ張りたい。）

身悶える私はさぞかし薄気味悪かっただろう。若干、ヒかれてるの
が解る。

「本当に、いいのですか？隊長は・・・」

エセルは心配してくれているのだろう。しかあし！

「エセル。敬語禁止。これ決定事項。・・・ご心配ありがとう。」

これでも素人ではないから。でも、まあ？ミハイルほど大きな人相手にしたことないから、どうだかね？」

だって優に2メートル越えて・・・あり得ないでしょ、地球じゃ。そもそもどうやら子ども扱いされてるみたいだけど、声を大にして言いたい。19だよ！花の女子大生だよ！

確かに親友より胸は小さいが、サラシ巻いてますが一応あるんですけど！顔だって、中性的だとは言われてたけど、けして男性的ではないと思う！（思いたい、いや、多分。）

ミハイルが、甲冑らしきものを脱いだ。剣を置き、小手を外す。白い薄手の上下からは身体にも獣毛は生えてないのが解った。（だって肌の色だったもん。）

私も服を脱ぐ。そう、こっち来て服はどうしてるのかってゆーと、こちらの世界の規制の服を貰った上で、ちょちょいと改造しております。ちなみに裁縫はマイナス評価でした。魔法ですよ、ま・ほう！！すごい便利です。頭の中で思い浮かべて（こうしたいなあ。）と思うと、その通りに変形してくれるんです。ブラボウー 魔法

！ ビバ 魔法！

針で指を刺し刺し必至に縫った拳句、出来上がる頃には布が血で染まり、気持ちも身体もマイナスで、ついでに評価もマイナスだった頃には考えられません。

「では、始めようか。」

エセルが森で見つけてランバード神官長が連れて帰ったという少年のことは聞いていた。会ったのは、今が初めてだが。ここ4日間、おれは宮殿の部隊に稽古つけに行っていたからだ。

少年と言うには華奢すぎ。少女と言うにはふてぶてしそつだった。格闘場の脇に控えているエセルだって少年の時には女と見間違っただったから、それに比べれば中性的だ。

腕か襟を掴もうと腕を伸ばすと、ぎりぎり触れない距離に下がられる。

その足裁き、所作。さつきエセルに「素人じゃない」と言っていた通りのようだ。

カシユと呼ばれる脛に巻きつける形で着る服から覗く細い腕や、作り直したのであるう、おそらく元は同じようなタロン（パンツのこと。）が描き出す長くも細い足のライン。

『少女』だと言われれば、そうかもしれないと思うのだが・・・。

「手加減したら、ハッ倒しますよお。」

にっこりと向けられた言葉に似合わない笑顔と、その黒い瞳に映る負けん気の強さ。

どっちであろうが、知ったことではない。

（楽しめそつだ、久しぶりに。）

「そ・・・の体術は・・・何と・・・？」

突っ込んだ腕を軽く取られ、脇に流されてしまう。さつきからそんな状態でまともに身体に触れない。

周囲は最初は囁きたてたりしていたが、今では息を飲んで見守っている感じだった。

それもそのはず。隊長である私が先ほどからまともな一撃を加えられずにいるのだから。

彼の繰り出す武術というのは、見たこともないものばかりだった。

しかし、それを言い訳にするには彼は強かった。飛ばすくらい力を入れて突きをくり出せば、するりとそれをかわされるばかりか、受け流される。私にとっては精神的ダメージが大きく、彼にとって

は私の威力が解りダメージがない。

「合気道って・・・ゆーんだよ。・・・さすがに避けてばかりじゃ倒せないよ、ね！」

”ね！”のところであつたりと彼の身体が浮いたと思つたら、次の瞬間には首に向かつて回し蹴り。間一髪、腕で受けた。

「アイキドー？」

「うん、爺様に教えてもらったんだけど・・・。今の蹴りは・・・空手ってゆー・・・んだ！ああ、くそ！」

回し蹴りから着地をしないまま、その足をまたもと来た方向へと切り返してきた。それもまた受ける。

「カラテ・・・、つ。」

腕を下げると目の前に構えをした彼が立っていた。肩幅に開いた脚はセオリー通り、両の拳を握りしめ、目が合うとにやりと笑う。

「あなた、いいね。すっごい楽しい。」

こちらこそ、だ。

「あーっ！ 悔しいなあ。まあでも当たり前か。」

地面に倒れ仰向けに空を見上げて叫んだ彼は、それでも言葉通りに悔しがっているというよりは楽しかったと瞳が言っていた。

「スタミナが足らん。もっと鍛錬を積みばまだいける。」

かくいう私もその横に座り込んでいるのだが。

「・・・だよねえ…。爺様にも言われてたんだけど、こればかりは、鍛錬じゃなかなか・・・。」

2リル（1リル＝1時間くらい）ほど打ち合っていたが、がくと彼の体力が落ちたので、私の勝利になった。

「しかし、私を2度も投げ飛ばしたのはあなたくらいだ。びっくりしたよ、こんな細い身体から繰り出された投げ技には。」

と伸びていた彼の腕を取る。本当に細い。ちよつと力を入れて捻れ

ば折れてしまつくらいに。まるで……。

「シャワーを浴びていくか？ 気持ち悪いだろう、それでは。」
官舎には風呂もあるが、と誘つと彼は「いいや」という風に首を横に振つた。

「この先に大きな池があるだろ？　そこでちよつと泳ぐよ。……
・”寄つて行け”って煩いからさ。」

“何が”寄つて行けと”煩い”というのか、彼が何者であるかを知つていれば聞かなくとも解る。

「ありがと。」

彼が立ち上がつて服の埃を払いながら言つて、手を差し出した。その手に自分の手を添える。

「こちらこそ。また来るといい。皆もあなたとならいい鍛錬になる。怪我をしない程度に。」

白く細い指がするりと離れて顔の横で振られた。

「うん、お邪魔するよ。じゃね。」

その後ろ姿に周囲の兵から声が飛んでいた。「かつこよかったよ。」
だの「なかなかやるな。」「今度は自分と。」だの……。それを見送りながらふとさっきの自分の心情を振り返つた。

（）”まるで” 何だと思つた？（

6 「あなた、いいね。」（後書き）

彼らは神殿警備隊で、第一部隊が魔法部隊、第二部隊は武器メインです。

武闘派のミハイルですが基本は第一魔法部隊隊長。獣人は基本型は人型二足歩行、耳と尻尾は常に出ている状態です。完全型は獣、二足歩行のまま獣毛が全身に生え、牙があるものは牙も生えます。

7 「パパって呼んで！」

池は湖ほどは大きくなく、でも池というには大きかった。そこにすべてを脱いで飛び込む。

御子様。

プカ・・っと水面に水色の髪が広がり、青い瞳の精霊が顔を出した。気配で解っていたからびっくりはしなかったが、冷静に考えれば、怖いよ。

だって水面だよ？ 髪が徐々に広がって人の顔が浮かぶんだよ？
どこの怪談だよって話でしょ？ 以前の私だったら速攻攻撃してる
って・・。アブなっ。

なあに？

って返せるけどね、今は。

主人がきます。

さっきの鍛錬について話していると、アーリーが質問してきた。
なぜ、魔法ではなかったのか、と。

うーん・・。だって多分、うーん絶対被害が甚大そうだったから。

そう言うと、ああ・・と深く肯きながらアーリーは微笑んだ。
肯定しますか。

あの時はひどかったですからね・・・。
フォローもなしですか。

オーズの結界が割れたのを私は初めて見ましたよ。ガードに回ったアルファが慌てたのもね。

何気に追い打ちですか。ひどいです。

な・・・何なんですか・・・これは。
アルファと反対側に回って修復を行っているアーリーがそう呟いた
声は、今ここにいる王たち皆の心の声だった。

【解放】

詠星が異世界の言葉であり、彼女の母国語でそう呟いた途端だった。
自分たちでさえ目を開けていられないほどの光が満ち、激流のよう
な力がオーズが万が一と言って張った結界の中を覆い尽くした。
そして・・・。

・・・ヤバイ。もたないぞ。
ため息に似たオーズの声が聞こえて、そっちを見た時だった。ピキ
ピキッと亀裂の入る音がして結界にひびが入り始めたのだ。
マジかっ！

横でユファが叫び、対のアルファと共に結界の外に飛び出すとオー
ズの結界の更に外側から二神の結界を掛ける。瞬間、パーンという
甲高い音でオーズの結界が割れて中心にいる詠星に光が降り注いだ。
ガイアス。

うつとりとした詠星の声が聞こえる。驚異的な速さで学んだ精霊語
が。

何だい、娘。

湧き上がってくるこの力の源は何だい？

輝きを増す詠星が呟いて中に浮かぶガイアスを見上げる。

あなたの力だ。そしてそれは私の力でもある。

精霊の力を使う前に、その力を身体に馴染ませるためにも一度解放
した方がいいとガイアスが言ったので、オーズが万が一に、と結界

を張った中での解放になった。人間として育った詠星には必要ではなかった力に、こちらの世界からはガイアスが向こうの世界では龍神が、それぞれ詠星に呪を掛けて守ってきた力。それが今枷が外れ、結界の中渦を巻くように暴れている。それはまさに歓喜と言っている。

その歓喜の渦の中、クセツ毛の髪を靡かせて、細い身体から信じられないほどの力を放出させながら詠星は微笑んでいた。

正直、こちらへと詠星が運ばれて来てから、無表情な顔以外見たことがなかったからドキッとしたことは秘密だ。

これは・・・、気持ちがいいな。自分が広がる気がする。ギシギシと、嫌な音がする。

それはユファとアルファの結界が軋む音。ガイアス・・・と意識を向けると、彼は肯いて、

詠星・・・溢れる力を自覚できるか？

そう詠星に問いかける。

うん。解るよ。貴方と同じ真つ白だ。

うっとりとして詠星は答える。夢見心地な声で。

その力を小さく纏める様な感じで、丸めてあなたの前に・・・。いうと、圧倒的な力が弱まり凝縮された感じで詠星の前に光り輝く珠が現れた。それは虹色の輝き眩しい光を放って、まるで詠星の魂そのものようだった。

綺麗だな。コレが自分の力？

目に見える形で言うならば、ね。それを貴女は修めないといけない。取り込む、という方が解りやすいだろう。でないと、彼らのが持たないよ。聞こえる？悲鳴を上げている。

それまで、詠星はまったく目の前のことだけで、我らに気をやっていなかった。その時始めて我らの状態が解つたらしかった。

吹っ飛ばされたオーズが結界の外の地面に寝転がっていることや、ユファとアルファが必死の形相で結界を保っていること。その結界を強化するために、あとの者が更にその外側に控えて力を分けてい

ること。

常識的に考えてみれば、解ることだった。詠星はガイアスの娘。彼の力の塊であり、彼と性質を同じくする唯一の者。

” 我らの創造主と同じ。 ”

であれば、我らより“上”。

たとえそれが我らから見れば小さな“人間”という形の中に納められてはいても、力の質は同じ。けして箱物の大きさが小さいからと言って力が小さいということはないのだ。それを完全に失念していた。

お前たちも、解ったな？

それは我らへの警告でもあった。

我らが気持ちの大小はあれど、少なからず詠星を軽く見ていたことをガイアスは気がついていて。そして、警告も教えることもせず、まずは力を解放させたのだ。また、それをしても”詠星”という器が壊れるということはないと解った上で。

“私の娘を甘く見るな”と。

ガイアス。ユファが・・・保たない。

あゝ・・・マズい！

大地のアークの叫び声と詠星の声が聞こえた途端だった。

ズシ・・・ンと大地と空気が震えた。身体のない我らたちが、地面の叩きつけられたような大気の圧力と共に詠星を中心として圧縮された力が爆発した。

外側へと吹き飛ばされる意識にブレーキを掛け、我らを受け止めたのはガイアスの力だった。

詠星

たった一言。

詠星は圧力の中心にいた。まだ放出される力に振り回されながらもガイアスの方を見上げる。

詠星

もう一度ガイアスが言うと、こつくりとそちらへ肯いて瞳を閉じる。真っ白に覆われていた視界がだんだんと収まっていき、内側から力の放出、外側からはガイアスの結界に挟まれて悲鳴を上げていた意識が楽になった頃、中心にいた詠星は。

あれは・・・何？

エンヤがそう呟いた。

後から聞いた詠星の話ではそれは座禅という座り方らしく、その座り方をした詠星が拡散された力を傍に寄せつつ、それを分散させていた。

我らだ・・・彼女は凄い。

アークがうつとりと呟く。

詠星の周りを縦横無尽に飛び回る手のひら大の珠は、赤・黒・白・金・茶・青・緑。そして動かず額の前に輝く虹色。

それは我らとガイアスの色だ。

それがやがて一つずつ詠星の身体に吸い込まれていくたびに圧力が減っていく。

最後に額へと虹色が吸い込まれると、一気に通常に戻った。

ああ・・・解った。

【修復・復元】

その小さな口が呟くと、見る見るうちにクレーター状に押し潰されていた大地が元のように盛り上がり、吹き飛ばされて跡形も無くなった木々が何倍という速さで成長した。木々の下に咲いていた花々すらも。

・・・。へえ、うん、やってみる。

言うと、詠星は徐に立ち上がり、倒れ込んでいたオーズの傍まで来ると彼の身体に手を翳した。すると完全に意識を途切れさせていたオーズが元の状態へと戻っていった。

もう・・・いい。

うん。・・・。ガイアス父上。じぶ・・・私は貴女の娘としてこの世界で生きていこうと思う。いい？

すっと立った詠星はガイアスの方を見上げてそう言った。

漆黒に輝く瞳はきらきらと内から虹色を宿し、まるでガイアスと同じように肌は内側から白く発光している。

ああ。

ガイアスの嬉しそうな声が返事をした。

ありがとう。

こちらこそありがとう。今まで守ってくれたこと。そして生んでくれたこと。呼んでくれ、た・・・つくえ・・・。

小動物の潰れたような声がしたと思ったら、ガイアスが人型になって詠星を抱き潰していた。

パパって呼んで！

ガイアス！

遠い目をした我にブチブチと愚痴を零す。

アーリーたちだってさ、まるで仕返しみたいに扱いたる？オアイコだよ。
と。

水の上に身体を投げ出すようにして浮かんでいる姿は、まるで我を全面的に信用して安心して頼ってくれている感じがして嬉しくなる。

そんな気持ちは、おそらく詠星には解らないだろう。

ガイアスの娘だというのなら、我らにとってもまた娘同然。仲間であるという意識は急速に我らの中で庇護欲を膨らませていった。

仕返しとは心外な。我らはただ詠星が困ったことにならぬよう鍛えただけの話。貴女の爺様と同じだろう。

・・・つぐう。

・・・の音も出ないといった感じで詠星は唸ると水底に沈んでいった。

オーズは我よりも気が短いぞ。

そう呟くと、大気の塊が揺れた。

(ん?)

水辺に座って新しく生まれただばかりの精霊と遊んでいた詠星が気配を察知して振り返ると、そこにはミハイルが立っていた。

「ミハ。」

「ソナタ・・・。」

驚きで固まっているミハイルを置いて、「ああごめんね。」と言いながら薄絹単衣を纏っただけの詠星が

【乾燥・装着】

呟くと、池に潜って濡れていた全身を風が纏い瞬間湯いてしまうと横に置いていた服を着た状態で立っていた。

「用事だった？」

「・・・い、いや、なかなか戻ってこぬから、そのまま神殿へ帰ったのかと思っておったのだが・・・。オルセル殿が探していたのでまさかまだと思って来たのだ。」

「ふうん・・・何だろ。」

解った、と言って詠星は神殿の方へと踵を返す。

「そなたは・・・おん、いや女性、なのか？」

やはり気が付いていないまま対戦していたのだな、と思った。“風

神のミハ”は、女性にはめっぼう弱いと噂だからおかしいなとは思ったのだが、もしかして知っていても只者ではない者と対戦することと喜びを感じてそっちを優先させたのかと。それと言うのもミハイルは女性には弱いのが、好敵手を見つけるとその喜びで剣を震わせるとミハイルについている精霊が言っていたからだ。

「・・・女性が男性かということでは聞かれば、女性かな。」
何でそこで疑問形なのだ。

つい突っ込んでしまうが。

だって、ガイアスの娘であるわけだから、どうなの？精霊って性別があるの？

思考で詠星から返事が返ってくる。

(なるほど。)

それが頭にあるわけか。

「その前に“お前は人間なのか？”と聞かれるかと思ったよ、ミハ。優しいね。・・・じゃまた遊び行くけど、普通にね。普通に。」
背を向けてしまうと詠星はさっさと脚を進めて神殿へと歩き出す。

見られた！見られちゃったよ・・・アリスと戯れてた間抜けな顔。恥ずかしい〜！

(気にするところはそこか？詠星・・・。ほぼ真っ裸を見られたというのに。・・・残念な奴だな。)

アーリーは人間のようなため息をついた。

7 「パパって呼んで！」（後書き）

青〓水の監視者〓アーリー

茶〓大地の監視者〓アーク

やっとなみな・・・。

8 「これ、いる？」

謁見の間にはえらく身なりのいい青年がいた。

「愛し子様。」

こちらへ、とパウロが導く椅子には座らず、横に立つ。

「誰？」

「この国の宰相であられますマークス・ジュエ・ハークエンド様でいらつしやいます。」

銀の髪に薄青の瞳。先ほどのミハよりはわずかに低い身長ではあるが、それでも2メートルは下るまい。

（何でこの世界の人間はこんなデカイわけ？）

星自体が大きいからですよ、御子様。

心話でマルスが返してくる。地球よりも十倍近く大きいんだって……。知らなかったよ。

この人、顔いいけど加護付きじゃないんだね？

後ろに立っているマルスへ問うと、

別に顔で選んでいるんじゃないやありませんよ。それも審査対象に入るというだけです。 “魂” の透明度で選ばれるのです。

呆れた風に怒った風に返される。

だって、魂って……。生まれたばかりの赤子は綺麗なんじゃない？穢れなんて……。

”輪廻”ですよ、御子様。この世界では生まれ変わりは存在しません。パウロがいい例ですし、記憶はなくとも魂は前世の罪も善も何もかもを背負います。ですから、生まれる前に”魂の格付け”があるんですよ。解りやすい例でいえば、クリスの両親はクリスを授かったことで魂の格が一つ上がり、庇って亡くなったことでまた一つ上がりました。それらは全て魂に刻まれ、新しい人間へと生まれ変わる浄化によっても消えることはありません。罪が許されるという

ことはないんですよ、ここでは。

(シビア……。世界が違えば常識も違う。)

死してなお、罪は許されることはない、転生後も、とは。次の生で前の罪を償っていかなければ、またその次の転生でも……。と罪は引き継がれてゆくと。

彼の前世をご覧になりますか？理由が解るでしょう。

いや、まあ機会があったらね。(……ってゆるか気にはなるけどそれこそ覗き見つばい。)

「愛し子様にはご機嫌麗しく……。」

(……見えますか？型どりのおべんちゃらは退屈だな……。まあそれが仕事なんだろうけど。)

でもすごいな、この人、と思うのだ。
思ってもいないことをすらすらと言えちゃう辺り、おそらく歳はそう上ではないだろうにちゃんと“仕事”してる。それが心がこもっていけばなおいいんだろうけど。しかも“思ってます”って相手に解っても構わないという態度が大物です。

「うん……。それいつまで続く？失礼を失礼だっけ解っててやるってことは、やめてもらってもいいってことだろ？パウロ、裏の池に新しい精霊が住むことになった。勝手をして悪いが、どうやら自分がやってしまったらしい。」

もういいやつ、てマーカスの言葉を遮ってパウロにそう言うと、それはまたどうして、と聞かれる。

「ミハと鍛錬した後、アーリーに呼ばれて池へ行ったのさ。”ここで汗を流していけばいい”と言われたから潜ってみたら池の底に綺麗な小さい貝があつてね、拾って上がっていじってたらどうやら力を注いでしまったらしく、次の瞬間には生まれてた。」

この人の笑顔は好きだな……。最初からこの人はなんでだか好きだが。

「名は何と？」

「アーリーと自分で考えてつけたよ。あとで教える。女の子なんだ。綺麗だよ、パウロもみれば解る。」

なんて話を完全無視して話していたのだが、先の客のようにマーカスは切れたりしなかった。

御子様

マルス？・・・ああ解った、ありがとう。

送られて来た映像を見て階段に座り、その数段下にいるマーカスに声を掛ける。

「これ、いる？マーカス。」

ぱっと目の前に現れた男二人を指して言ったのだが、マーカスは顔を上げてびっくりしたように彼らを見た。

(ふ・ん)

「いらない」と言ったら、どうなさるのですか？」

と言うマーカスに、二人はギクツとしたように蒼褪めてゆく。

宙に浮かんだままの彼らからガマの油のように汗が落ちそうさだ。

「それは、貴方が知る必要はないだろ？だって”いらない”のだから、どっちにしる彼らは使えないよ。加護も力も“抜いた”から。」

マーカスと彼らは目に見えて驚いた顔をして私を見た。

「できる・・・のですか？そのようなことが。」

マーカスの声に真実の気持が混ざる。

「出来る”よ。貴方が我を“愛し子”と呼んだその意味を考えればね。」

ハッと息を飲んだマーカスに対して、

「う、そだ。できるはずがない！」

二人は口々にそう叫んだ。まあね、解ってたけど。

「ならば試せばよい。」

宙から降ろされた二人は、可笑しいほどに呪文や操縦をしながら力を行使しようとしている。それをパウロと彼は面白そうに微笑んでみている。馬鹿にして微笑んでいるのではないのは表情で解る。目が瞞つてないからだ。

「加護を取り上げられた人間がどうなるか、知っているか？」

彼らに、ではなく、俺に彼は尋ねている。

「いいえ、見たことも聞いたこともありません。」

「そう？いたらしいぞ？マルスが言うには。まあ、消えちゃえば同じか。」

「“マルス”？」

「ああ、風の眷属がな、ここにいる。見るか？ 見えなくとも見えるようには出来るよ、今だけならな。」

と言いながら、人の返事は聞かないでタンタン・・・と階段を下りて来ると、俺の両目に軽く息を吹きかけた。

開けていいよ、と言われ目を開けると意外に近い場所、彼のすぐ後ろにその眷属が浮かんでいた。

金の髪に金の瞳。優しげに見えるようで、人の気持ちを解さないであるうほどに厳しい雰囲気。

そしてかなり上位であるう力。それは輝き方で解る気がした。

御子様。

彼が何かを口にする。それは俺たち人間には聞き取れない言葉のようだった。

ああ。パウロを。

言っですぐだった。

「愚かだな、ジューン。」

魔術師の片方、壮年の男の方が短剣を持って彼に斬りかかっていた。いや、斬りかかった姿勢のまま見えない壁の向こう側でその壁を叩いている。

もう一人は知らなかったのか、驚いたまま固まっていた。

「あれがお前たちが探していた間者だぞ。どうする？」 いる”か？”
完璧無表情な彼が俺を振り返っていた。

ジューンはミハイルたちに拘束され、牢へ連れて行かれた。その際、彼が「心配ないよ、彼はもう“力”がないから。」と言付けていたが、加護持ちであるミハイルには解っていたようだった。加護つき同士は互いの精霊が見える。では彼は？

「見えないよ、自分についての精霊は。加護付きと違って契約をしている訳ではないからね。・・・ベント。」
もう一人の元加護付きの名を呼ぶ。

「は・・・はいっ！」

平伏している彼は顔を上げることすらできないようだった。当たり前か。

「君、加護を返してほしい？」

「へ？あ、はいっ！」

その時、また彼・マルスが何やら彼に言っているのが見えた。それに彼が肯いてベントへ言葉を掛ける。

「条件があるけどね。今までついていた精霊とは格が下がる。つまり力が下がるということだ。今までのような力は使えないよ。それは君への罰だから。受けなければ貰えない、受ければ貰える、格が下がるということだけだ。それでも返してほしい？」

何故？という顔をしている彼と、多分俺も。

「君は知っていた。・・・と言うか薄々勘付いていたろう？ジューンがおかしいことに。疑いながらも一緒についてきたね？真実を知る

うとしない者は愚か者だ。しかし真実に気が付いていてなお目を瞑るうとする者は罪を負うべきだ。君は自分の保身に目がいつて精霊を穢した。君の穢れは精霊が負う。それが我らには許せない。神殿で誓いを立てた時、パウロから言われたろう？それを犯した罪は重い。君の魂は一つ穢れた。このままでは次の生で加護は得られないと思え。」

ズシンと圧力が押し掛かる。その言葉一つ一つにベントが恐れ戦いているのが伝わってくる。が、

「それでも！ それでも私はシールと共に今まで育ってきました。精霊は私の身体の一部。失って生きてゆくことは考えられません。どうか…どうかお願いします。」

伏して頭を下げる彼の言葉に嘘は感じられなかった。そしてその横には薄い影が。

「ではシール。お前は？お前はとうしたい？」

彼の言葉にシールと呼ばれた精霊は顔を上げ何やら話している。薄いながら色は解る。緑の真っ直ぐな髪と同じ色の瞳の精霊。

「そう…ではお前の力を削ごう。それでいいか？ベントの罪はお前の罪。導いてやらなかったお前のね。また二人で協力して成長すればいい。」

言って彼が手を翳すと、精霊から薄い膜のようなものが彼の手に吸い込まれていく。それに従って精霊が小さくなってゆく。

「ベント。シールはお前を選んだ。感謝しろよ。お前のせいで穢れたシールはそれでもお前と共に生きることを選んだんだ。彼の力は恐らく今までの半分だろう。心して力を成長させるんだ。保身に心を揺らすな、君は少しそこが弱い。二度はない。次は有無を言わず取り上げる。でなければシールが消滅してしまうからな。」

「はいっ…はいっ！ ありがとうございます。シールごめん、ごめんなさい。」

そう言っただけでベントは今度は泣いて伏してしまった。ため息をついた彼にランバード神官長は微笑んで「私が…。」と言って彼を連れ

て出て行ってしまった。

何時から知っていたのか、と聞くと彼はまた軽い口調に戻っていた。

「ここにはパウロと自分の結界が張ってあるから。どちらかに不信や反感を持ったり、敵意を持った状態で侵入すればその時点で。」

「そうだよ、だから貴方も。」

と漆黒の瞳が向けられる。

漆黒の瞳と髪。

” 精霊の愛し子が現れた “

そう話が広まったのは最近のことだ。

そんな事は今まで一度だつてなかったことなので俄かには信じられなかったが、今朝ランバード神官長が名を戴いたこと、そして今現在神殿にいることで城内は騒然とした。

精霊の加護付き自体数が少ないのだ。その“力”はそうそう見ることができるわけではない。その上“愛し子”などと。

(信じられるか?)

それが一報を聞いた時の俺の心境だった。俺には加護がついてないから、もちろん精霊など見えない。だから元々加護付きの人間の言うことすら半分聞いていくくらいの気持ちだったからだ。

「私が？」

「馬鹿なことを」と言い、パウロを嘲った。とうとう身内から変な奴が出た。と弟のエセルを家から追い立てるように出した。」

寝言は寝て言え」と危険があると忠告した加護付きを突き飛ばし戦場へ向かった拳句、案の定大怪我をして結局加護付きに治療してもらったね? まだ言おうか？」

それは今までの恥を聞かされているようで猛烈に恥ずかしかった。いいえ、と首を横に振る。

してきたことを思い返せば、ただの子供の駄々だ。ただただ羨ましさから出た行為。自分ではなく弟へついた加護への嫉妬。

「謝れば？兄弟だろう？」

その後はいつ呼んだのか（後から聞けばエセルの精霊に直接呼びかけたらしいが）、エセルが静かに現れて俺の横に膝をつけて彼を見上げた。

「エセル、彼が話があるんだって。」

勝手にそう言ってしまう。

「・・・何でしょうか、ハークエンド卿。」

家から出た後騎士団に入ったエセルは、ハークエンドから籍を抜いた。それを知ったのはかなり経ってからだったが、その時初めて自分の行動に責を感じた。

辛く当った子供時代、幼いとはいえエセルは賢い子供だったから俺に嫌われていると解っていた。だから俺に近寄らなかつたし、極力目立たないように暮らしていた。騎士団に入った後、あれはじつと家を出る年齢になるのを待っていたのだと解る。城ではなく神殿の騎士団を選んだことから。精霊など・・・と普段から言っている俺が罷り間違つても神殿へ足を運ぶことなどあり得ないからだ。つまりは・・・俺と会いたくないからだ。当たり前だ、俺だって逆の立場であつたら嫌っている相手になど会いたくはない。

籍を抜いたと聞いた後、何度か城で仕事に声を掛ける機会があつた。その時返された言葉は、

「何でしょうか、ハークエンド卿。」

今繰り返される、この言葉だった。

感情の籠らない瞳。感情の現れない顔。こんな弟にしてしまったのは俺の罪なのだ。

「喧嘩をしたのなら、悪いと思つた方が謝ればいい。子供だつて知つてるぞ？」

8 「いね、いる？」（後書き）

シンデレレを虐めてみました。

9 「代償は払って貰うから。」

「で、何だっけ？用事。」

「聞いてないんですか？」

まるで同僚に言うような口調のエセルに焦る。

「ああいいんだ。自分がエセルに“敬語禁止令”を出したんだからね。何といつてもエセルは自分が初めて遭遇した人間だし、自分を監禁した初めての人間だから。感慨深いね。」

彼がそう言つと、エセルが焦つたように言葉をつなぐ。

「監禁・・・って、仕方がないじゃありませんか・・・じゃなかった、仕方がないだろ、結界内のあの森に見知らぬ人間がいたんですから。怪しんで質問した私に答えたあなたも結構いい加減な回答でした！副長権限で収容した私に罪はないと思う。しかも収容した部屋からだつて簡単に出たじゃないか！」

言葉が混ぜ混ぜになつて、逆に子供っぽいエセル。

「だつて牢屋だつたじゃない。綺麗な方ではあると思うけど、お腹空いてたのにあんな食事じゃ・・・。だからさつさとパウロに会っちゃえつて思つたからさ・・・。いいじゃない、過ぎたことは。」

「その過ぎたことを持ちだした張本人のくせに。」

まるで小さな子供の時みたいに拗ねているエセルに遙か昔となつた姿を思い浮かべた。

「で？」

といきなり話が振られびっくりして彼とエセルを交互に見た後、我に返つて本来の目的を思い出す。

「陛下がお会いしたい、と。」

薄く微笑みながらも完全な無表情な瞳で彼は返してきた。

「何で？」

「昨日の神官長召喚の折に、ご一緒して戴けるものと思っておりましたが、いらつしやらなかったので本日私が使者として参上いたしました次第です。ランバード神官長より、“愛し子様のご訪問されている”と伺ってから、是非会いたい。”と毎日のように陛下はおつしやつていらつしやいます。”

「とそこまで話すと、彼はコテン、と首を傾げて言った。

「じゃあ、来れば？そちらが。」

(・・・っな・・・！)

「・・・っという自分を不敬だと思う？ あのね、自分はこの国の人間ではない。その王に仕えている訳でも仕える気もない。だから聞きたくない命令は聞かないよ。そんなことの為に来たんじゃないよ？ なのに何で自分が会いに足を運ばなくてはいけない？ これを聞いて”じゃあこの国にいることは罷りならん”と言っんなら、いいよ、出て行っても。別にこの国にいる必要もない。自分がこの国に来た目的はパウロだから。パウロに新しい名を授けることが目的だったんだから、それはもう済んじゃったし？」

まるで態と言っているように聞こえる。

怒らせるように、そしてその後の態度を見るように。

試されている、と思った。俺の力量を。

「・・・ではごさいますしょうが、私からも是非愛し子様には王城へ来ていただきたいのです。」

真っ直ぐな瞳が射るように俺の顔を見詰めている。だからこっちも負けないくらい真剣に見詰め返す。

マルス。

彼がまた不思議な言葉を口にする。それに従うかのように、彼の横の空間に一人の男が現れた。金の神と金の瞳。ひと目で解る属性に威圧感。精霊だ。

.....

「・・・ふうん。なるほどね。・・・エセル。」

「何ですか？」

「王太子と同級生だった？ エセルの方が格好いいって、よかったね？」

「誰が言ってるんですか、それ・・・。」

「精霊たち。頭の方もエセルがいつて？それでかなり嫉妬されたって話だね。犬猿の仲って？」

初めて彼が笑うところを見た。にっこりと焦っているエセルを見ても嬉しそうに。そして言ったのだ。

「エセルがついて来るならいいよ。ただし自分を呼びだす代償は払って貰うから。」

「“代償”とは？」

不吉な言葉に聞き返すと、彼は、

「お楽しみは後からだよ。」

とそれこそ怖いくらい優しく微笑んだ。

なあ・・・と横からの声で、やっと回復した身体を持ちあげる。

さっきまでの鍛錬で相手をしてもらったのはいいが、ケタ違いだった自分自身も周りも、呆気にとられるほど威力が違いすぎた。これで全力ではないというから、だったら全力だとどうなるのかと聞いてみたら、

「わかって聞いている？ “誰”の愛し子なのか。」

と、返された。あからさまに皆言葉に出さないが、解っている。

彼は、いや彼女は我が世界の唯一神“ガイアス”の愛し子。数々の精霊王たちが膝をおる“神”の“唯一の娘”。

そう、娘であるにも拘らず、その風貌や言動から皆“男”だと思っ
ていることを伝えると、

「知ってるよ、それでいいんだ。ああ、口調は元々こんなだよ。ミ
ハもバラさないでね？バラしたら、ミハが覗きをしたってバラすよ。」

「あれはっ、けして・・・！」
焦って噛んだ。

「解ってるよ、自分の着替えを覗くほどミハは女に困ってないもん
ね。聞いたよ。モテるんだって？“クールで女性に優しいミハイル
隊長”。花街を歩けばタダでいいって待つ女の人が大勢いるんだ
って？」

ブツと、愛し子の前だというのに吹き出してしまふ。

「な・・・なっな・・・。」

「な？」7人？へえ、それって多いの？少ないの？」

絶対解ってて言ってる顔だった。

「違う！誰に聞いた！エセルか？トムか？それとも・・・。」

「メアリー。」

意外な名前に、固まる。

”メアリー”・・・愛し子様付き女官。ランバード神官長が街で拾
って養子にして育てた赤毛の少女。花売りをしていた母親が死んで、
家賃が払えなくて家を追い出され行く当てなく路地の暗がり死に
ゆくだけだった4歳の少女。それをたまたま通りかかった神官長が
拾い上げ、手当てをし養子に加えた。ランバードの養子は6人いる。
最後がクリスだ。皆親がいない子ばかりで、神官長はその子たちを
我が子と呼んで育て上げた。

「私は生涯を神に奉げる身、もし結婚したとしても家庭より妻よりも神を取るでしょう。ですから、結婚はしません。そんな私に神が下さった家族がこの子らです。ありがたいことです。神とこの子らに巡り合うために私は生まれてきたのです。」

ランバード神官長の凄いところは、それを心から言っていることだ。神職だからとかそういう義務感や世間体、建前などではなく、心からそう思い行動し、何一つ私利私欲に走らない。なるべくして神官長になった方だと皆が思っていて尊敬している。1年前に養子になったクリスはまだまだが、あとの5人は皆成人し、メアリーののように傍にいる者もいるが、街へ出た者、我らのように騎士となり誰かを守っている者それぞれだが、皆やはり清廉潔白な人間ばかりだ。

「可愛かったよ？メアリー。嫉妬しちゃってたのかな？ちょっとばかり口調がきつかった。自分のことで勘違いをしてたみたいだけど、その誤解も解けたんだし今度から睨まないでね？」

その言葉にうつとなる。睨んで・・・？

「・・・ましたか？」

「・・・ました、すっごく。頭から噛み付いてバリバリ喰われそうだった。別の意味でメアリーも喰われそうだよ。」

最後のニュアンス。

「横取りしそうな心当たりが？」

その言葉にこっくんと彼女は大きく肯いた。が、しかし。

「条件があるよお。」

と。

「何なりと。私が出ることでしたらば。」

「二つ。」

「こちらが肯くと、」

「第二隊のアーシド、同じくマックライン。あとさつき名前だ、トム・レイノス。」

「そんなに？」

「驚いちゃだめだよ、だってこれこっちだけね。あと王城にもいる

から。・・・だから条件その一。」

と彼女は指をピツと自身の鼻の前で立てて、注意を引く。

「早くアスレッドの花束を持って来い。本数は・・・知ってるよね。色は彼女の好みに会わせろ。」

「はい。」

「その二。街で一番美味いと評判の“メイカーズ”のケーキ。丸で一つ自分に買ってきて。両方とも期限は1週間後のメアリーの誕生日までに。」

「御意に。愛し子様。」

なあ・・・と話しかけられたのはその後のことだった。

「国王ってどんな人？」

宰相閣下が来たことか、と視線で問うと。

「まあね、知っておかないと。」
としらつと返す。

「お知りになられても、態度を変えられることはないと推測出来ませんが・・・。」

こちらもしれつとそう言うと、彼女は肩を竦める。

「鋭いね。まあ予備知識？」

何で疑問形なのかは不安があるが、自分の率直な意見を述べる。どうせ嘘をついたところで、愛し子にはばれるから。

「部下の私が言うのもおこがましいですが、よい王ではないかと思っております。他国に対してむやみに好戦的ではなく。ただ、少々慎重すぎる方かと。貴族の突上げに困ってらっしゃったり、3年前の北部の時も、救済措置を遅らせてしまったりと。その決断の遅さがあるの虐殺を生んだと思っております。しかし慎重だからこそ、大きな間違いは起こしておられません。」

聞かれれば不敬を理由に処罰を喰らってもおかしくないほどに、あからさまに言っ たつもりだ。

「おお、齒に衣着せぬ言い方。正直者。」

茶化した感じで言う彼女だが、にやりと笑う。

「探りは入れてらっしゃるのでしょうか？」

と聞けばあっさり。

「うん。いろいろ。でも人から見たらって点が欠けてるからね。あの子たちはある意味中立だけど、人ではない。人の心の機微は解らないから。」

「そうですね。では陛下よりも王太子殿下にお気をつけられた方がよろしいかと。悪い方ではないんですが、やはりそういう教育を受けていらっしゃる分、何というか・・・。」

「高飛車” 我儘” 傲慢” な王太子？” あれが次期王ならば、国内は乱れる。”？ 噂が絶えないけど、噂されるってことはそれだけ注目浴びてるってことの裏返しだよな。良くも悪くも。あと何だっけ？ ああ“女癖が悪い”だっけ？」

わはは・・・と彼女は笑った。

「水浴びをしたらエセルを借りるよ。」

「我を呼びつけたな。」

不意に声がしたと思ったら、目の前に輝く人が立っていた。横には知った顔が。

「どこからっ！」

「用は何だ、クリフォード王。」

男か女か、どちらともとれる中性的な顔立ちに、漆黒の髪と瞳。すぐにランバードが言っていた“愛し子”だと解る。

「不敬だろっ？」

そう叫ぶと、初めてこちらを見た。何の感情も籠っていない、物を見るような視線。そんな視線を不躰に向けられるのは初めてだ。

「王太子殿下でいらっしやいます。」

知った顔：エセルがそう言っていると、「あ？そう。」だけで流されてしまふ。

「クリフォード・フォン・デ・サージエス。会いたいと言っていた要件は何だ、と聞いている。」
そして無視。

「い・・・愛し子殿か？」

「いかにも。・・・ああいらぬ事をしない方がいいぞ、怪我をする。」

言った時には遅く、侵入者に慌てた衛兵と魔術師が攻撃した後だった。

「・・・遅かったな。」

信じられない光景が目の前に展開していた。

9 「代償は払って貰うから。」 (後書き)

次話、ちよこつと戦闘です。

「ば・・・馬鹿な！」

結果を目の当たりにし、驚愕に慄いているのは二人を除いたその場の人間たち。

二人、とは愛し子とエセルだ。愛し子は澄ました顔をして、言ったのに・・・と言い、エセルの方はまるで日常とでも言いたげな表情をしていた。

「お前とお前、鍛錬をして居らんな、精霊が弱っている。取り上げるぞ。それと、この中で一番筋がいいのは白のお前だ。精霊の成長が著しい。鍛錬を増やせ。・・・衛兵に至っては、ミハが泣くぞ。

何だその鈍らな剣は。それじゃ誰も守れん。」
彼は一人一人にそう言いながら視線を投げる。

「それと我に攻撃するな。危険だからな、お前たちが。」
バタバタと足音がして警護の人数が3倍ほどになった。

転がっている仲間を見て、さつと身構える。

『やめろ！』・・・そう叫ぶはずの声は誰にも届かなかった。比喻でも何でもなく、事実、声が喉からでなかったのだ。口は開くがパクパクと馬鹿みたいに開くばかりで、声が一言も漏れないのだ。

「エセル。素手でな。できるか？」

「やれます。が、魔術師は？」

「何も出来ん。我が封じた。術を繰り出すどころか指一本動かん。・・・参る！」

二人の声だけが鮮明に聞こえて、二人が目の前で背を向け合う。

「我が5人。エセルはそっちな。」

言いながら、にやりと楽しそうに口許だけで笑った彼は、斬りかかって来た衛兵を視線に捕えた途端すつと無表情になつてその懐に飛び込んだ。その速さについて行けず、長剣を振るうことが出来なく

なつた衛兵の足の甲を思いつきり踏みつけ、上体が落ちた相手の顎下に拳を突き上げる。

「私の方が少ないのでは？」

エセルの方も剣をすれすれで避け、素早く衛兵の背後に回ると、その首の後ろを掌刀でたたく。これで二人沈んだ。

「遠慮しろよ、久しぶりに暴れてるん、だ！」

と”だ”のところ、その長い脚を利用しての回し蹴り。衛兵は部屋の間まで吹っ飛んだ。

背を向ける形になつた彼に隙ありとばかりに斬りかかった相手に、彼は振り向きざま拳を顔面にめり込ませ、倒れかかる身体を殴り倒した。流れる様な体術で、次の相手を視界に捕えた時、見たこともない技にびっくりする。そのまま背負つて投げたのだ。彼より遙かに大きい相手を、容易く、その細い背に背負い足を引っ掛けて投げ飛ばした。もう一人・・・、

「何だお終いか？不甲斐ない。楽しくない。」

彼が構えていた腕を下ろしてそう言った先には、剣をぶるぶる震わせているだけの新人が立っていた。もちろん、エセルの方も終わっている。

王の執務室には、衛兵たちの呻き声とノビた身体、落とした剣が散乱していた。

「・・・えらくご歓迎だな、クリフォード。それとも、この国では招いた客を切りかかつてもてなすのか？」

冷えた声が響いた。

「そん・・・。」

言いかけると、今度は声が出た。

「我は最初に言つたらう？」呼び付けた”と。”用は何だ？”とも言った。クリフォードも“愛し子殿”と言つたな。だったら我の身分は解つていてこのもてなしなのだろう？」

怒っているのか、と顔を見ても至つて無表情で感情が読めない。

「しかし、いきなり……。」

「我以外で、それが出来る人間がこの世界にいるか？考えれば自ずと解ることだろう？」

馬鹿にされた、とかつとなった。

「不敬は不敬だろう！ここは王の執務室であり、こちらにいるのはこの国の王だぞ。」

叫んだ。

その時、入ってきたマーカスが、まずそんな顔をした。

「不敬」か？ 我はこの国の人間じゃなし、家来でも下僕でもない。なぜ敬意を払わねばならん。」王の執務室”とは言うが、こんな穴だらけの結界に何の意味がある。それに我は呼ばれたから来た。日にちや時間の指定はなかったから、暇を見てきたただけだが？ ああマーカス、久しいな。」

王太子である自分をスルーして宰相のマーカスに微笑みかける。

「お久しぶりでございます、愛し子様。お越し頂けて嬉しく思います。これはこちらの手落ち。申し訳ございません。」

深々とまるで王にでも頭を下げる様子でマーカスは礼を取ると、倒れている部下たちを運び出すように指示をする。王である父は、やつと驚いた表情を顔から剥がして彼にソファを勧めている。自らが立ち上がり、頭を下げている。

「クリフォード。パウロから預かり物があるぞ。妃にだがな。採れたての果物だ、身体にいいと。」

どこから取り出したのか、さつきまでまるで手ぶらだったのに、その手には袋が持たれていた。

エセルが彼の斜め後ろにそっと影のように立つ。

「父上！」

「控える、私が呼んで来て戴いたのだ。あまりの展開の速さについて行けなかったが、こちらが悪い。お前も頭を下げよ。」

よりによって自分に頭を下げる、と？ 王太子である自分が？

あんまりな言葉に、憤って部屋を出て行こうとした。

「殿下！」「アッシュフォード。」
「マーカスと父の声が重なった。」

「思い上がるなよ？」

静かに彼の声が響き、振り返って思いつく言葉をそのまま口から零れさせた。

「俺は王太子だ。何故どこの誰とも解らん怪しい奴に頭を下げなきゃいけない？　そもそも愛し子など、神殿の作り話じゃないのか？　あの神官長は少し思いついてるんじゃないか？　見えない精霊など信じられるか！　うそくさい。大体精霊に何が出来る！　父上も父上だ、ちよつと母上の身体の調子がおかしいからって気弱になつてこんな奴を頼ろうなどと。」

「クリフォード。妃をここへ運ぶぞ。」

彼が立ち上がつて父上の了解を取る前に、ベッドごと母上が執務室に現れた。母上は知っていたのか、慌てずベッドから降りて彼に頭を下げようと……。

「フローレンス、いい、そのままだ。……ああ絡まっているな。それでは腹の子もお前も苦しがる。我が取つてやるから。」

そう言いながら、母上の身体に触れるかどうかという感じの距離感で手を動かす。その動きを見ていると、何やら細い紐らしきものが母上の身体に絡まっているようでそれを手繰っているという感じだった。それを何度か繰り返すうち、不意に彼の手の中に黒い紐が現れた。

「それは？」

「これか？　これはな、情念だ。嫉妬やねたみ、羨望といったモノの塊だな。妃が苦しくて熱を出していたのは、これが身体中に絡まっているからだ。腹の子にもな。消滅させることもできるが……面白いものを見せてやるうと思つてな。わざわざ手繰っている。」

しばらく待てと言いなながら彼が手繰っていると、どんどん母上の顔色が良くなつていく。

「楽になつて……。」

「そうだろ？ 良かったな。確かにこれは人間の医者では治せんな。フローレンス。」

彼が紐を束ねているのとは逆の手で緩やかに母上の頬を撫でる。

「その子を大事に育てよ。出来れば教育係はマーカスがいいが、出来ぬだろうからマーカスが選んだ相手をつけよ。ただし身分を問うな、貴族から選ぶ場合は十分吟味しろ、その子は重要な子となる。

育て損なうと、この国はなくなることになるぞ。隣のようにな。

甘やかすな、上に立つ者として何を行えばいいのか解る子に育てよ。思い上がらせるな、間違わせるな。我がこの国を消したくなるような子に育てるな。解つたな、フローレンス、クリフォード、マーカス。」

「……はい。……」

と3人は頭を下げた。

「それと医者だが……今いるカリストは外せ。あれは出世欲ばかりで役には立たん。頭はいいが応用が効かない。ああ悪い、お前の同級生だったな、エセル……。引退したガゼブが一番良かったんだが、今は孫に囲まれて幸せに暮らしているしな……。マルセーヌ・ルシフォーがいい。」

出て来た名前にピクリと反応してしまう。彼女は……。

「北部で夫が死亡したから、帰つてきている。たった1年ほどの結婚生活だったな。……で、これだが……。」

ついつと引くと、廊下からがたがたと引きずられてくる音がする。それはどんどん大きな音となつて、しまいには扉のすぐ外で打ち付けられるようになっていた。扉にぶつかっているのだ。そして声。彼がふつと指を動かすと、扉が開かれ入つてというか引きずられてきたのは……。

「カリスト。それに……。」

妾妃のイメルダ、イメルダの侍女の女官。

「いつたい・・・あの・・・。」

何で自分たちがここにいいのか解らないといった顔をして、3人は茫然としている。当たり前だ、こちらとて驚いている。

「これが・・・。」

と彼が一本の紐を強く引く。すると、グンツとイメルダが傾いだ。

「彼女のだ。いわゆる嫉妬だな。立場上いたしかたない感情だろうが：元々クリフォードは乗り気ではなかったら？この際下がらせてはどうだ？彼女ならば今だ若いし美しい。嫁の行き手はあるだろう。侍女は、まああれだな。主が不遇なのは王妃のせいだと思っているのだ、ねたみだな。王太子以降長く子が出来なかったのに、自分の主が来た途端の妊娠、王の渡りは一度もない。主大事の気持ちゆえ、だな。カリストはこの機に一気に頂点に上り詰める気でもあったのだろうか？王妃の主治医として他の医者を出し抜いてな。彼にとつては王妃やその腹の子は金の成る木な訳だ。しかも名誉も地位も引っさげて来る。」

彼の言葉に、3人はそれぞれの反応を見せる。

俯く者、無礼だと叫ぶ者、真っ赤になつて怒っている者。が、

【浄化・削除】

彼が凜とした声で聞いたこともない言葉を唱えた途端に3人はその場に倒れ込んだ。

「・・・っ。」

「気を失っただけだ。誰か運んでやれ。」

彼の腕にはイメルダが、エセルの腕には侍女が抱き留められていた。カリストは倒れるままに放置だったらしい。男女差が激しいな。

マーカスの指示で3人それぞれに運ばれてゆくを見送った父上が母上に「すまなかつたな。」と謝っている声が聞こえてきた。配慮を怠つた、と。「解っております。」と母上はいつもの優しい笑

みで返している。

政略結婚であった二人は、それでも時間を掛けて話し合い解り合いの時を紡いで自分が生まれた。子の目から見ても、政略婚だとは思えないほどに仲がいい。

15で当時23の父に嫁ぎ17で自分を生んだ母は、38の今21年ぶりの妊娠中。

「カリストはともかくとして、イメルダを責めるなよ。あの娘は好きな男がいたのを父親の出世欲の為だけに嫁がされてきたのだ。侍女にしてもそれを知っていて、ただただ主を守りたい一心なのだ。少なくともイメルダはクリフォードの渡りがなくてほっとしている。」

「しかし下がらせるとなると・・・。」
「マーカスは言いにくそうにしながらもこう言った。

「王の下がり」としての肩書は付いて回ります。確かに姫は若く美しいでしょうが果たして結婚となると・・・。貴族社会の口さがない者たちの噂の餌食となりませんか・・・?」

尤もな意見だった。過去そういう噂が元で田舎にひっこんで一切出てこなくなつた者、自害して果てた者などがある。

「大丈夫だ。イメルダの想い人は案外近くにいる。そして王の渡りがなかつたことも知っている。あらぬ誤解をすることはない。父親には叱られるだろうが、彼が申し出ることによって、二つ返事で嫁に出す。噂のついた娘の取り扱いに苦慮した父親はもろ手を挙げて今度こそ娘を彼に嫁がせる。愛する男が信じて傍にいてくれさえすれば、女はどんなことにも耐えられる強さは持っている。そうだろう?マーカス。」

それは、マーカスの家の事情も解っていると暗に言っているようなものだ。

「ご存知でしたか。」

エセルが言つと、

「“見える”からな。」

彼はそう返して、マーカスを見つめた。マーカスはふつと大きなため息をつくとにっこりと社交辞令ではない笑顔を浮かべ、「すぐに手続きに入ります。」とだけ父上に伝えた。

「任せる。」

父上の言葉に、部下たちが動き出した。

「愛し子様、そのあと1本は……。」

そう、彼の手にはあと1本紐が握られている。母上の言葉に彼はついと自分を見た。

「これが一番愚かで厄介な人間のだ。」

言っと思いつきりその紐を引いた。と……、ガクツと身体が揺れ、膝を床に着いた。

「アッシュフォード・フォン・デ・サージェス。お前のだ。」

10 「お前のだ。」（後書き）

次回、隣のあの国の惨状を目の当たりにします。

11 「加護を取り上げる。」

「精霊に何が出来る」とほざいてたな。
怖いくらい静かな声にびくりと顔を上げる。

【転移】

視界がぼやけたと思ったら、王城の裏の丘に来ていた。

「フローレンス、お前にはきついだろうが、お前が学習することは腹の子も学習する。親の務めだと思えよ。」

何をやる気なのか説明する前に母上にそう言っていると、母上は、

「いえ、先ほどのことですからしっかり身体が軽くなって、久しぶりに気分がいいのです。それに私も知りたいのです。この世の理を。」

と、微笑んで頭を下げた。そうか、という感じで彼はそちらへ肯くと皆へ向き直る。

今この場にいるのは、父上と母上、自分にエセル、マークス。そして数人の護衛と魔術師、そして主だった幹部の貴族たちだ。貴族たちは今まで執務室の隣で会議中だったのを、そのまま一緒に連れてこられたらしい。

「アッシュフォード。お前が思っていることは少なからず加護付きではない奴は思うことだろう。それを何とか知ってるか？」

「知らん。」

「馬鹿だな。」

「馬鹿ではない。」

「エセルよりは馬鹿だろう？何一つ叶わなかったくせに。」

「……っ不敬だ。」

「二言目にはそれしか言えん馬鹿だからこんな紐を生みだすのだ。」

「何だっ!」

「真実だ。認めよ。そこからしか人間は強くなれん。」

「それは……。」
言い返す自分に彼はため息をつく。それがいかにも小さな子供の我儘に対する感じのもので、胸の中に情けなさが広がってゆく。
「まあ、いい。今から見せてやろう。お前たちが軽く見ている”精霊”が何をお前たちに与えてくれていたかを、な。」

【範囲結界】

私を中心に半径100mの範囲で結界を張った。それは空も地中もだ。

エンヤ アルファ ユファ オーズ アーリー テス アーク
協力してくれる？

7精霊王を呼びだした。

今この中にいる者は私を除いて30人ほど。その中に加護付きは5人。その5人にはうつすらと精霊王たちの気配が解るのだろう。自然と膝が折れている。

「今、王たちを呼んでいる。姿が見えないのは不便だろうから、見えるようにしてやろう。もちろん聞こえるようにもな。」

みんな姿を強化してくれる？

言うと、

『お前の心のままに 詠星 』

私の名前以外は聞こえるように調整した声は、皆に届いているようだった。そして、皆の顔に広がる驚愕。

恥ずかしいだろう！

7人が私を丸く囲むようにして傳えているのだ。そりゃ驚くよ。だって”精霊王”だよ”王”。

(やーめーてー・・・)

恥ずかしがっても極力表情は変えないようにしつつ、皆を見回す。

『何を望む？ 詠星 』

加護を取り上げる。

そう宣言して、アーリーに向き直る。

「結界内限定で加護を取り上げて、アーリー。」

『御意に 詠星 』

アーリーが光を発すると、それが収まった時には傍にあった池の水がどんより曇っていた。透明度がなく、まるで毒でも含んでいるかのように底が見えない薄汚れた感じの池。そしてそれに続く川もまた同様であった。しかしその先、結界を出た後の川は本来の輝く透明な水の流れのまま。

『飲み比べてみるといい。』

人々にアーリーが言う。皆それぞれに手で水をすくって飲み比べる。その味の違いに、後から結界内の水を飲んだ者は吐き出していた。

『不味いと感じるのは、その水の中に栄養素が入ってないからだ。水はただ水なのではなく、その中に見えない栄養を蓄えそれを飲む者に与え、また植物へと受け継ぐ。私は水の監視者、加護を取り上げればむろん雨も降らせない。池もそのうち枯れるだろう。』

そう言つてアーリーは消えて行った。

「アーク、お願い。」

言つとアークはにやりと笑つて私の手を取ると、その甲に温かい唇を押しあてた。

(何すんだ・・・)

こっちが恥ずかしがっていると解つてての、悪戯つ子的な笑みを浮かべつつ。

『承知した 詠星 』

アークが肯いた途端、ちよつと離れたところにあつた木が倒れた。
『僕は大地の監視者。さつきアーリーが水分を抜いたところに僕が加護を取り上げたせいで地面が木を支えられなくなったのさ。触つてごらんよ、さらさらした砂みたいないな地面だろ？加護と水分が抜けてしまえばそうなる。木どころか植物さえ育ちはしないよ。』
じゃあねえ・・・と言いながらアークも消えた。

『次は私か？』

「テス、ごめんね。」

『いいや、何よりお前の頼みだ。馬鹿がいると大変だな。我の加護を取り上げよう。』

言つた途端だつた。結界内に態と含ませた森の一部の木々たちがシユウシユウ・・・と音を立てながら枯れて行つた。枝が落ち、木が倒れて、腐つて砂のようになってゆく。

そしてテスの足元からススス・・・と地面の芝が枯れ始め、結界内に緑がなくなつた。

『我らの 詠星 を罵つた意味を知れ。 詠星 が許さなければ、

お前たちは隣と同じ目に会うことになるぞ。』
言い捨てて消えた。

テスが一番怖いと思うんだ、7人の中では。

『そうだな、あ奴はめつたに怒らんからの。その分怖いの。では我か？』

「うん、お願いエンヤ。」

『可愛いのを 詠星 だがしかし・・・フローレンス。』

エンヤは王妃に近づいて行く。そしてそのお腹に手を翳しつつ、小さく呟いてから顔を上げた。

『腹の子に触る故、一時的にその子だけは加護で結界を張つたぞ。』

・・・我が加護を与える予定の子ゆえな大事にしてもらわねばならん。その子が人為的にも殺されたら我はこの国ごと燃やしかねん。』

恐ろしいことをにつこりと笑いながらいい、皆に向き直る。

『我はエンヤ。炎の監視者。我が司るは炎のみに非ず。お前たちがあるのが当たり前だと思っっているあの火も我のモノ。よって……。』
太陽を指さしてエンヤが宣言すると身震いするほど寒さが押し寄せてきた。

『我が温めた空気も冷える。死ぬまで凍えて我が身を省みる。』
いいながらフェードアウト。

「オーズ。」

『何だい、俺は最後かと思ったよ。だって俺が加護を取り上げると確実に死ぬぞ。』

そうなんだよね、だって大気だから。だから……。

「一瞬でいい。それでフローレンスのみ除外してほしいの。」
だって子供に酸素がなくなっちゃう。

『なるほどな……楽な仕事だ、承知した 詠星 』

『俺は大気の監視者、オーズ。今から加護を取り上げるが心して受けよ、愚かなる人間よ、パニックになるなよ。』

言ってフローレンスの背後に回る。

『よく見ておけ。お前が逃れることが出来るのは、腹に子がいるからだ。それがエンヤの加護付になることが決まっているのと、 詠星 の優しさだ。』

途端に皆が喉を押さえてのたうつ。
そりゃそうだ。

だって空気がないんだもん。苦しいよ。でもね1分くらいは息は止められるし。まあ前置きがなかった分吸い込んで息止めてって感じじゃなかったから不意打ちで苦しさ倍増だと思っけど。

『解除…… 詠星 を怒らせるな、俺たちの兄弟であり父を同じくするものであることを忘れるな。』

最後のちよん……とフローレンスの周りに張った結界に触れてパチンと壊してから消えた。

『最後は俺たちか。』
ユファとアルファが左右に並ぶ。

「うんちよつと特殊でしょ。長い時間がなければ分からないからだから。」

そう言つて二人と手を繋ぐ。

『人間たちよ、俺たちは昼と夜の監視者。その意味が解るか？』

マーカスが口を開く。

「まさか…時が…。」

『そう、流れることのない永遠の時間の狭間に落ちる。俺たちの加護がなくなる時それは時間が止まる時だ。もちろん加護を取り上げるのだから一番最悪の時間に、だ。見るがいい、我らが加護を取り上げた一番新しい場所だ。』

皆が立つ空間を小さく纏め、半径10mほどにしたものを飛ばした。

リンドル王国 首都ドートル

昼と夜のこない空間と、普通どおりに昼と夜が来る空間が並び立つ国。

その間には直径10?ほどの壁が立っている。不可視の壁だ。内側…つまり王城と貴族街からは外は見えるし音も聞こえる。庶民たちが暮らす外側からは中を感知することはできないし、そもそもそこに“ある”ということを知覚することは出来ない。

テスの加護を失った内側と加護溢れる外側。そしてそれを見せつける様な壁。テスの怒りの深さと怖さが浮き彫りになっている。

『俺たち精霊は、お前たちのように子を成すことはない。その分加護付きに対する気持ちは深い。それこそお前たち人間の愛情などにも負けないほどな。永遠の時を生きる俺たちにとって、お前たちの命など一瞬に等しい。その中で加護付きの成長を見守り死ぬのを看取り、また輪廻で還ってくるのを待つのがどれほどのことか解るか』

？テスの目の前で殺された加護付きは280年ぶりに還ってきた魂だった。しかもテスのお気に入りの精霊をつけてやるところだった。加護付きが死ねば、それに付く精霊もまた消滅する。テスは目の前で二人の子を殺された。目を抉られ踏みつけられ四肢を裂かれた遺体にテスの叫び声で俺たちはみな呼びつけられた。”殺しても足りない”とテスが言うから、こうしよう、と提案したのは俺たちだ。永遠に俺たちの“檻”の中へ。テスの怒りが収まるまで、永遠に。」

そこには幽鬼のように壁伝いに彷徨っている人間たちがいた。壁の向こうを羨ましそうに妬ましそうに絶望の瞳で見つめながら、時々壁を叩いては絶望したただ歩く。穴や壊れているところはないかと思いつながら歩いているのだろうか。

「他国に逃げた貴族や王族、すべてがこちらへと戻されている。何も知らずに働いていただけの人間は逆に全員出した。この中の人間たちは知っていて何もしなかった者と一緒になつて贅沢をし国を疲弊させ、民を苦しめたもの。皆罪のあるものばかりだ。国自体が苦しんでやっと生まれるはずだったテスの加護付きを失くした罪は全員で払ってもらおう。王城内で蓄えた食糧が一番尽きた時を見計らつてユファとアルファの力を発動させたんだ。飢え、苦しみがいたるところで、テスの加護がない故植物は育たない。また二人の加護もない故時間が動かないから芽すら出ない。殺し合つても死にはしない。傷は出来るけどね。自殺も出来ない。」

「.....」

ユファがアツシユフォードの頭を掴んで、目を反らせないようにする。

『我らの加護なしでは生きてゆくことすら出来ぬお前たちが、俺たちの愛しい加護付きを愚弄することは許さん。お前が愚弄したパウロはな父自らが選出した選ばれた魂だ。死して3度の転生を繰り返しつつ善行のみを行い、父自らが名を与えて来た稀有な人間だ。お前などより余程価値がある。それを一步間違えば自らの国をこのよくな目に合わせるはずだったお前がこの口で語るな。』

「しつて・・・。」

『当たり前だ。俺たちはいつもそこにいる。何時いかなる時も。お前がエセルを罷免しようとした時もパウロの忠告を一笑した時も。』

”今は北部よりも自分の地盤を固めることが先決だ”などと、貴族に根回ししていた時もな。そんなに腹の子が怖かったか？自分の地位が奪われるかもしれない？お前とあのカイロスの立ち位置は同じだと気付け。』

目の前に曝されているのは3年たった今も死んだばかりのように横たわっているかつての隣国王太子カイロスの姿。両目を抉られ、身体中の骨が潰れているのであろうべしやんこになった姿に深々と剣が刺さっている。

「クリスが死んでいたら、次はお前たちの国だった。クリスがパウロにひそかに保護されていなければね。クリスとパウロとクリスに付いている精霊に感謝しろよ。精霊は主であるテスがどれほど怒るか知っていたから、必死でクリスを庇って逃げ出したんだ。戦火の中、まだ6つのクリスを隠しながら隣町まで。」

11 「加護を取り上げる。」（後書き）

さて、心を入れ替えますでしょうか。

落ちくぼんだ目、痩せて骨と皮だらけになった腕や首。着替えや風呂などといった余裕があるはずもなく、汚れ皺だらけになり、よれよれになったドレスや服。そんな姿でまるで生きた屍のようにゆっくりうろつく姿。

「カイロス様・・・恨みますわ・・・」

そう呟きながらへたり込んでいるのは、比較的まだ綺麗な格好をしているカイロスの妻であった女だ。それでも謁見に来た時とは比べ物にならないくらい疲れきっている。

「愛し子様、あの赤子はいかがなされたのです。」

そう言えば、と思いつく。取り出して掌に浮かんでいたあの赤子。弟王子との子だと言っていた哀れな子。

「腹の中に返した、成長することはないがな。時が止まっているんだから。・・・しかしおそらくはもたないだろうね。ユリアは遠からず狂うよ。」

恐ろしいほどに彼は冷静だった。自分や他の人間は目の前の光景に動揺し、恐れ慄いて、一つところへ縮こまってしまっているというのに。

「あの愚かな男は、輪廻の輪から外れた。魂を浄化するどころか生まれ変わって償いをする機会も謝る機会も何もかもを奪われ、今は虚無の海に漂っている。あの男の頭上では、生まれ変わりの魂の列が進んでいる。それを下から見上げながら永遠に苦しみもがく。そこには知った顔も通りかかるかもしれないが、男は一人だ。たった一人真つ暗な波のない底のない海に浮かんでいる。意識を失うこともなく死ぬこともなく、ただただあるはずのない許しを請いながら。」

静かな声にその光景を想像をする。おそらく皆がそうしているであろう。「哀れな。」と小さく呟いたのは誰の声だったか。

「どうすれば、許される？」

カイロスの遺体に視線を投げたままアッシュフォードが呟いた。

『悔い改めて、祈れ。』

『心からの祈りを捧げよ。』

『俺たちに届くのは心からの真実の気持のみ。』

ユファ神とアルファ神が口々にそう言った。

「精霊は嘘が”見える”んだ。だから、本心から悔い改めねば嘘の言葉になる。嘘の気持ちと言葉を並べたところで、人間ならば騙せても精霊は騙せん。」

それを難しいと思う人間は、悔い改める気がないんだろうね、と。

城の中から物を壊す騒々しい音が聞こえてくる。

『馬鹿皇子だ。癩癩を起してる。そろそろ来るよ。』

ユファが言っていると、剣を携えたノースが血走った眼つきでぶるぶる震えながらやってくると、兄であるカイロスの遺体に斬りつける。凶器に取りつかれたその行動は何度も繰り返される。「あんたが・・・あんたのせいで・・・！」と呟きながら。

そしてぎらついた目がユリアを捉えるとつかつかと歩いて来て、その細い手首を掴んで引きずるように部屋へ戻ろうとしている。

「嫌！ノース、いやっ！・・・はなし・・・。」

「黙れ！股を開くしか能がないだろうが。来るんだ、そして啼いてる。」

本当に引きずられてユリアは城の中に戻されて行った。叫び声だけが聞こえてくる。でもそれはユリアだけでなくあちこちから、男の声も女の声も。

そこには救いはないように見えた。透明な壁一つ挟んだ街が眩しいだけに余計にそう見えた。

街の様子はすっかり立ち直っていた。

3年も経っているのだと改めて思う。

かつては、”通りの真ん中は貴族専用”とか法律のあった石畳の立

派な通りは、今は両脇に小さな店が立ち並び、人々が明るい顔で買い物をしたり立ち話をしたりしている。

「来るぞ。」

彼の指さす先を見る。そこに現れたのは3人ほどの男たちだった。他の街人と何ら変わらない、普通の格好をした、しかし屈強な身体つき。ミハイル隊長が3人といった感じか。

「あれは・・・リーヴェ副官？」

マーカスの声に王がそうだと小さく言った。

「リーヴェ・クリストフ。今や新しいこの国の英雄だ。お前らは惜しい人材を逃したな。なあ、マイルズ？」

彼が振り返ってマイルズ公爵を見た。

自分が副官になる前、その地位にいたのは今日の前で人々と親しく話をし、手を貸し街を一緒に復興しているリーヴェだった。

リーヴェは獣人の父と人間の母親を持つ獣人で（父親が獣人の場合、母親が誰であっても必ず生まれてくるのは獣人だ）、ミハイル隊長が格闘系に特化しているのとは違い、俊敏性に特化した身体つきと瞳に縦に伸びる瞳孔が特徴だ。

「隣にいるのはリアクロス国の魔術師ランド、テスの加護付きだ。

反対のはランドの双子の弟であるテイル。3年前に彼らはここで出会い、気持ちを重ね合わせ、街と人を守るために先頭に立って戦った。テイルの片腕がないのはその時負傷したためだ。彼らに賛同し、各国からかなりの人材がやってきた。皆仕事を辞め、彼らと共に戦っている。かなりの人間が犠牲となり、また負傷した。リーヴェは妻の家族がここ出身だった。どうか助けを出してほしいと訴えた時、マイルズお前は何と言った？」

「何故態々首を突っ込まなければいけないのです。それよりはむしろ逃げ出してくる難民をやらせないよう国境を固めるべきです。あの国はなるべくしてあんなった。救う必要はない。」

「そうだ。以前からあの者たちの態度は目に余った。結果、どこの国も助けに入らないではないか。」

「そう同意したのは王太子である俺だった。その後すぐ、リーヴェが騎士団を辞めたと聞いたが、何とも思わなかった。いや、馬鹿な奴だと思った。」

「確かにリンドル王室の人間は腐っていた。が、それが民を見捨てる理由になるか？むしろそんな奴らに苦しめられているのを助けようとは思わなかったか？ お前たちは知らないだろうがな、他国はさっさと助けに入ったのだよ。あからさまに国旗を掲げて入ると国と国との戦いになる故、”傭兵”という立場でしか入ることは出来なかったが、それでも正規軍がかなりの数入っていた。皆罪のない民を救う為に他国の為に。お前たちが王宮で”救う必要はない”と断罪した国のために戦っていたのだ。サージエスの北部が狙われたのは、その時お前たちが参加していなかったからだ。あの国ならば易々と入れると思われたからだ。他の国は絶対に許さないという意気で戦っていたから、報復が怖くて襲われなかったのだ。つまりは・

・北部の虐殺はお前のせいだよ、アッシュフォード。北部の人間が何人死んだと思う？クリス一人しか残らないほどの虐殺を許したのはお前がパウロの忠告を王に伝えなかったからだ。”そんな事があるか？””その話に信憑性はあるのか？”と他国の介入の話を調べもせずに一笑したお前が、北部の人間たちを、殺したんだ。アッシュフォード。」

一言一言を切るようにして述べられる自分の罪に、足が立っていられず崩れ落ちる。石畳だと思った地面は、元の王城の裏の丘に戻っ

ていた。

「お前がつまらぬ嫉妬をしてエセルを遠ざけていなければ、学友時代に腹を割って友人になってさえいれば、こんなことはなかったんだ。」

”エセル”？ 何故？

「加護付きには、同じ属性の精霊の声が聞こえる。エセルはテスの加護付きだ。殺された赤子と同じ属性だからな。いち早く察知出来ていた。だから進言しにきたろう？ リンドルにテスの加護付きが他に一人もいなかったとは考えられない。だったら更に多くの声が聞こえたはずだ。それこそ魔される位な。何度も訴えたはずだぞ、エセルは。それをつまらぬ嫉妬心から相手にしなかつたらう？ お前は愚か者だ。馬鹿だ。甘やかされるばかりで、努力をすることもなく他人を羨んで遠ざける大馬鹿者だ。」

「俺・・・は、・・・お、れ・・・は・・・。」

茫然として自身を失っているアッシュフォードをそのまま部屋へと転送し、貴族たちには散々静かに脅したのち帰らせ、そして執務室へ帰ってきた。

「愛し子様。・・・あれは、私たちの罪でもある。」

かなりの精神を疲労したのであるう妊婦の妃は部屋に返した。今いるのは私とマークス、王とエセルだ。

「そうだよ。お前たちの責任でもある。甘やかして育てた馬鹿がつく親だったお前たちのな。・・・それでも矯正する機会はいくらでもあった。子は成長する生き物だ。そこでリセットさせれば良かったのに、付いた教官がマイルズではな。王、お前の人を見る目が甘かったのだ。確かにサージエスは平和が長く続いていたから油断も

あつたろうが、例え他の者がそうであつても王とその側近だけはそれでは駄目なんだ。」

彼は息をつき、窓の外を見ながら夕陽を背負つて話し続ける。

「王」とは何だ？ クリフォード。」

「民と国を導く者、です。絶対的な力を行使し、国を守るものです。私はそう習いました。」

クリフォードの答えは一応及第点だろう。「王」を知らない私が言うのもなただけだ。」

「自分はね、」すべてを背負う者”だと思っている。」

一人称を“我”から“自分”に変えることで、少し肩の力を抜く。元々人間の私にとっては、さっきの光景はかなりシヨックだったんだ。一応女の子ですからね。現代人だから、戦争も知らないし。かなり身体が強張っていたんだ。

皆が座つたのを確認して、自分も出窓のスペースに座る。行儀悪いけど。

「背負う者”ですか？」

マーカスが問いかける。

「うん。情勢が不安定で国が定かでない時は、先頭に立つて雄々しく戦う王の方が民衆は安心するだろうけど、平和になった場合、そんな王では逆に不安になる。」また戦争をするんじゃないか？”とね。考えてもみる。兵は元々民だろう？家族を戦争に取られて嬉しがる人間がどこにいる。」

”あつ”と三人が今気がついたという様子で息を飲む。そこが駄目なんだつて。

「最前線に行かされるのは、精鋭部隊と大抵民出身の兵だ。王族は出ないし、貴族どもは安全な後方にはかりいる。それで”戦え”と旗を振られてもな。皆家族がいて死にたくはないんだから。だから平和な時に入つたら、王は引つ込むのがいいと思うんだ。皆を国こ

と背負いながら、後方で”好きなようにやってごらん”と見守るのが王の仕事だと思っっている。出しゃばって、“俺が”俺の為に”とか“俺のモノ”だとかいらんないんだ。静かに見守りながらちゃんと人を見て選んで、良き人材をあった場所に使うよう手配する。いったん対国となった時には、力強い王として出しゃばってゆく。それが王だと、ね。貧乏くじだと思っただろうが、そのために立派すぎる城に住んで、多くの税金を使わせてもらっただろう？国は王の為にあるんじゃないよ。民の為にあるんだ。どんなに“自分が王だ”と叫んで威張ったところで、民が一人もいない土地を“国”とは呼ばないだろう？クリフォードが言ったが”絶対的な力”を“自分”の為じゃなく“民”の為に行使するのが王だと思っよう。理想論かもしれないが、平和だからこそ理想論が語られるべきだろう？

と語ってみた。キャラじゃないけど、必要だと思っんだ。民側の意見って。

だって絶対王政なんだもん。周りは貴族ばかりだし、一般市民の声なんて聞こえやしない。

「精霊王たちは怒っていらっしやるのですか？」

この国が助けに入らなかつたことを・・・と、陛下が問うと、「彼らは基本的に人間たちがすることに関知しない。視ているだけだ。でもそこに加護付きが巻き込まれれば、そうはいかない。言っただろう？加護付きが死ねばそれに付いている精霊もまた消滅する。それは仲間が消えるということだ。君たちは目の前で仲間や家族が殺されるのを黙って見ていられるか？答えは”否”だろ？」

彼はそう返した。

皆が肯くと、

「そういうことだよ。命とは精霊であつても人間であつても同じくらいに貴いものだ。しかし、それをすぐに忘れるのは人間の悪いところだ。”個”の命は誰のものでもない、その”個”のものだ。国のもので、ましてや王のものでもないんだ。クリフォード、忘れるな。それを忘れた時、この国は大きな厄災を喰うことになる。」

「神、とは。。。」

エセルの呟きはマーカスに引き継がれる。

「厳しい方だということだ。優しさだけを受け取るのではなく、その厳しさもまた贈り物、ですか。」

「そういうことだ。」

「。。。さて、代償を払って貰おうか、クリフォード。」

12 「王とは？」（後書き）

く…暗かった。

13 「教えなあい。」

神殿の奥、神官長ですら許可なく立ち入れない場所がある。

「パウロ。」

そこに座す人影がゆっくりと立ち上がって振り返る。

漆黒の髪、向けられる迷いのな黒曜石の瞳。

「愛し子様。」

パウロは床に膝をつき、見上げた。

白い肌を惜し気もなく曝し、手が痺れるほどに冷たい泉に身を浸していた詠星は、薄い布一枚の姿でパウロの前に立つ。濡れた身体にその布は纏わりつき、いやが上にもその性別を露わにする。そして、「ご成長なされましたか。また力が上がっておいでです。」

曝した姿は、ここへ入った時より僅かに大きくなっていた。

身体の細さなどは変わらないものの、身長が伸びている。髪も伸び、肩辺りで遊んでいた毛先は、背の中央まで伸びている。手足が長くなり顔立ちも僅かに大人びていて、当初は10歳程度と思われるが今では15、6には見える。それでも実年齢を考えると幼く見えるのだが。

（どうやら空気に馴染んできたらしい。）

と詠星は思った。

”この世界”の空気感に、人間であったはずの詠星の身体が。

（それってますます人外ってことデスネ。）

複雑な心境ではあるが、ガイアスを自分の父と認めたあの時から、

“嫌”ではない。

（でもいいこともあるもんね。）

乾いた布に身体の水分を吸い取らせながら、自分の身体を改めて見る。

”電信柱”だの“まな板”だのと言われていた己の胸が大きくなっていることだ。

(どれくらいなんだろうね。これ。)
大学生になってまで胸が無きに等しかった故に、詠星は信じられないことにブラというものを着けたことがなかった。だからカップ数なるものを知らない。

「メアリーには遠く及ばないけど・・・。」

ぼそつと口にする、着替えを用意していたパウロが、

「あの子は特別大きくございます。愛し子様は一般的ではないかと、乏しい私の知識ではございますが。」
と言つて、着替えを手渡してくる。

それに何と返していいものか・・・バサツと被るだけの服を着て、詠星は言った。

「いつものところにいる。」

【パウロつてばさ、好々爺つて感じのくせして、意外と遊んでたりしてたのかな？】

久しぶりの日本語を語りかける相手は・・・。

【そうだな。今でさえあれほどののだ。若いころはさぞやモテたろうな。】

真つ白な毛並みの獣。

マンモスほどの大きさの。

【いやあ〜！生臭坊主？】

【それを言うなら神父だろう？ しかもここでは妻帯は許されていないゆえ、“生臭”扱いは可哀想ではないか。】

長く大きく美しいふっさふさの尻尾を左右に振りつつ、背に乗っかっている詠星にそれは言った。

【突っ込まないでよ、言葉の綾でしょう？ つーか・・・魄も大きくなってるし。】

【うむ。主の力が上がった故我らの力も大きくなっておる。】

【それって魂も？】

【そうだな、我らは対故な。嬉しいぞ。】

【そっか、なら良かった。お休み。】
ふあわわあゝと欠伸をして、詠星は眠りに入った。

面会をさせてくれ、と申し出る人間は後を絶たなかった。

それこそ王族から貴族、庶民に至るまで様々で、その内容も「子供のどれに跡を取らせたがいいか？」だの、「うちの人はいつ帰って来れるのか？」など、拳句には「占い師ではないんですぞ。逆に不興を買ってしまわれませう。」とパウロが追い返さなければならぬほど。

鉄壁な結界を張つてあるので、危害を加えようと思つている人間は一歩たりとも神殿の敷地にすら入ることは出来ないが、逆を言えば敵意さえなければスルーである。

「ミハ エセル。」

「何です？」

鍛錬が終わつて草原にうつ伏せていたのをゴロンと空を見上げる様に態勢を変えて二人を見る。

ミハは私の横に座つていて、エセルはまるで見張りでもあるかのように起立したまま周囲に視線を飛ばし、精霊術で気配を探っている。

「ここを、出ようと思う。」

そろそろ潮時ではあると思つていたが、このところの訪問者の数とそれに忙殺されているパウロが本来の仕事が出来ないほどだと聞けば、名づけ親の親心が疼く。……って、聞こえはいいが、興味を押しさえられない。

元々面倒臭がりの割に、自分ひとりであれば結構活動的であった詠

星にとって建物の中から出ないという生活を長くは続けられないのも道理だ。

「どちらに？」

「決めてはいない。が、世界を視ると父に言っ出て来たから。」
この世界で生きてゆくと決めた時、自分が護っていかなくてはいけない世界が、どんなものなのか説明ではなく自身の目で確かめたいと言い出したのは詠星だ。

それをガイアスは快く肯いてくれた。

行っておいで、詠星。

君が護るに相応しいと思える世界かどうか、異世界で育った君だからこそ解ることもある。

それでもし疑問が生じたら、精霊王たちなり自分自身の力なりを使い、正すか消滅させるか決めていい、と。

それでいいの？壊しちゃったらどうする？

いいんだ。試行錯誤して創り上げていくものだろう？ここは元々我の力で成り立っているものだ。我は“神”だと言われているが、自分自身で“神”だと名乗ったことも意識したこともない。ただ生まれたのが何時かすら解らないが、存在したその時から、この力は“あつた”のだ。それについてしばらく考えたこともあつた。”なぜ力があるのか”、“なぜ我なのか”と。しかし答えをくれる者はいなかった。だって“我”は“我”のみなのだから。 だったら、生かすにはどうしたらいいと考えたのだ。我は”生みだす”ことしか出来ん。だったら”生めばいい”とね。生みだされたものは創ったものというの、何時かは壊れるか壊されるものだ。しかし我にはそれが出来ない。その為に精霊王たちを作った。守り、壊すために。彼らは我の息子たちだ。 だったら詠星、貴女は我の娘だ。彼らと同じ我の力を持ち、しかし彼らと違い我と性質の同じ全ての力を持つ。貴女だからこそ出来ることがある、我はそれを反対する気も止める気もない。貴女は貴女らしくここにあってさえくれればい

いのだ。

そう言っていたガイアスの言葉を人間たちに教えることはないが、”造る”ことのみには力を使うことが出来ないというのは歪なことだ。必ず反対に作用するものが出てくる。それが“私”だということなら、“私”はこの目で確かめなければならぬ、と思うのだ。世界を。

人々を。

その暮らしを。

「御一人で、行かれるですか？」

「うん・・・それはパウロにも反対されたんだけどね・・・まあ今日会合があるだろう？それにちよつと顔出して他の国の神官長たちにも顔見せだけして、行くことは知らせておこうと思ってるよ。でも誰を何人連れてどのルートから行くとかは教えない。まあ、抜き打ちテストみたいなの？」

というと、抜き打ちテストが解らなかつた二人に説明をする。二人は納得して肯いたのだが、ミハイルが、

「では連れて行く“誰か”は決めてるのだな。」
と鋭いことを言う。

まあ二人には見せてもいいか、と目の前に広がる草原に二人…というか二匹を出すことにした。

【魂・魄】

突如空中から出現した二匹のものは、スタッと彼女の前に降り立つと、その巨大な身体に似合った太い脚を折り曲げ彼女の前に従うかのように身体を伏せた。

世界には沢山の獣も魔獣もいる。しかし、これは……。

真っ白の体躯に長い体毛、金の瞳に長い鼻面。大きく口が裂けたその顔は一見魔獣よりも怖そうだが、瞳には理知的な光が宿っている。もうひと片も同じ感じたが、色は黒。闇のような濃い黒だった。

「これ……は？」

驚きで声が途切れがちなエセルがやっとそれだけを吐き出す。

「“式”“式神”という。黒が魂、白が魄。私が幼い頃より傍にいる。……彼らと行くよ。」

(シキガミ)

耳慣れない言葉を時折話す愛し子ではあるが、また奇妙な神の名前を告げた。

「“それ”は……。」

ミハイルがそう言いかけると、

【“それ”とな？ お主、無礼な。】

黒い方……魂がそう言っただきな口を開いた。

【こら。その言葉じゃ通じないよ。さつき教えたじゃん。】

何と言っているのか解らないが、愛し子が何かを言うと、今度は白い方が口を開いた。

「お前”ミハイル”とか言ったな。我は気が長い方だが、これは気が短い。“それ”呼ばわりに怒っているぞ。」

と、親切にも教えてくれた。が、

「“これ”って何だ！ “これ”とか“それ”とか……お主ら纏めて噛み砕いてやる。」

黒い方が怒って唸ると、すかさず愛し子が髭を引っ張った。

「やめて。ミハは友人なんだよ。……ごめんね、久しぶりに出てこれて伸び伸びしたいんだ。大丈夫だよ、口では何といっても彼らは強いから。そして日頃はコンパクトだし。」

「コ……？クト？」

「あ……ああ、いいいいよ。ごめん解らない言葉使って……。それよりミハとエセルには頼みたいことがあるんだ。留守中。」

“留守中”という言葉を使うということは、いつか“ここ”に戻ってくる気にいるのだろう・・・とそれだけで、ほっとする自分がいるのをおかしな気持ちで考えた。

「何ですか？」

「アツシユフオードを、ね。鍛えなおして欲しい。発つ前に挨拶には行くけど、腑抜けになつてるんだ。シヨックが強すぎたのかも知れないが、必要なことだったしさ。・・・私はね、“王”であるなら、綺麗なことも穢いことも、いや穢いことなら尚更他の臣下たちより知っておくべきだと思つたんだ。だって、解つててそれをやるように命令する立場だから。清濁飲み合わせて、それでも国民の前で、爽やかに笑つていられるのが“王”の仕事だと思つてる。」

仕事、ですか・・・と俺が言うと、

「そうだよ。”王”という役職の“仕事”だよ。個人のことを指す言葉じゃない。だって引き継がれてゆくモノだから。今はクリフオード、次はアツシユフオード。この国ではね。誰よりも辛く苦しく、それでも雄々しく大らかに笑っているのが仕事だよ。だからこそ尊敬を集め慕われる。愚痴を言う王なんて見たくもないし、飾りなら尚更いらないだろ？民にとって“この人がいれば大丈夫””この人に付いて行けば大丈夫”と思われる度量を持つ者が“王”だよ。出来ないなら、最初から継いじゃ駄目だ。後になって“やめた”が出来ない仕事だから、最初に覚悟を持たないと。一生臣下と民の前では仮面を被つて生きてゆく覚悟を。決断をするなら、その責任と結果をすべて一人で負う覚悟をね。」

それを二人に持たせてほしいと彼女は言った。

「何故ですか？ミハイル隊長はまだしも・・・。」

「お前が学友で在り、心の底ではお前を必要としているし、好きだからだよ、アツシユが。」

信じられない！という顔をして彼女を見つめるエセル。まあそうだ

るうな、とは思つ。今までの態度が態度だったから。嫌がらせしかしてるのを見たことがないからな。

「だから。お前も“王太子”としてではなく、“同級生”として接してやって。・・・言つたらう？アツシユは甘やかされて育つてきたどうしようもないボンボンなんだよ。甘つたれで、意気地がなくて我儘で。」

「要するに“子供”だと言いたいのか、王太子に向かつて。」
俺の発言にびつくりした顔をしてエセルは慌てて周囲を見回すが、誰もいやしない、と肩を竦める。

「そうだよ。立場なんか関係ないだろ？“それ”は自身で自覚するものだ。そこから出発しなくちゃいけないのを、あのガキはしなかつた。生まれた時から与えられて育つてきたために誰も教えてやらなかつた。教えるべき相手はあの公爵だろう？保身と出世のことしか頭がない。あれは王のミスだ。クリフォードにもそう言つておいた。だから同じ歳でありながら自覚が出来るエセルと自他ともに厳しいミハに頼みたい。」

「わ…私は、そんな立場では・・・そんな大それた・・・」
「・・・といえるエセルだから、だよ。“己が無知であることを知る人間は馬鹿ではない。己の無知を知らない人間は馬鹿である”だよ。お前にはアツシユの逃げ道になつて欲しいんだ。マーカスと共にね。正直本心を曝す人間が一人もいなければ、人は潰れる。綺麗事だけでは生きてはいけないから。“王”の仮面を脱げる場所がなければアツシユは潰れる。その場所になつてやって。真夜中にグダグダ言いながら酒を飲む相手でもいい、執務室で悪態をつく時、突っ込みを入れる相手でもいい。その内、その仲間に王妃も加わる日が来るだろう。」

にやりと笑う彼女に、まさかと思う。

「・・・王妃の当てが？」

王太子は女癖が悪いことで有名だが、本気の相手は今だ一人もいない。秘めたる相手がいるのかすら。

「あるよ。でも教えなあい。」
「にやにやとほくそ笑んでいる彼女は、とても楽しそうだった。」

13 「教えなあい。」（後書き）

成長しました。約10?ほどですが。それでも小さい方です。

14 「準備と覚悟をして待ってて？」

「お邪魔します。」

そう言っただけで来た人間を、皆は注視した。

漆黒の瞳と髪。白い肌。少年のような少女のような体格で、ランバードを見つけるとそっちへと歩いて近付いてゆく。

「おまえは……。」

「誰だ？」

という人々の声に

「パウロ。メアリー知らない？」

という言葉を重ねて無視。

その時、気がつくべきだった。ランバードを新しい名前呼び捨てにしたその時に。

誰かが術を飛ばした。

「ペア・・ン」という大きな破裂音がして、ああ吹き飛ばされたかと皆が思った時煙の中からその人物が一步出てきた。

何でもないという感じで、全然ダメージもなくそこに立っていた。

「バスクのミグリン神官長。それが精一杯か？そんなものでは我に傷一つ負わせるどころか、髪の毛一本吹き飛ばせんで。」

静かな声ながら、その威圧感は凄まじかった。

「ではこちらもお返しをしようか。」

口の端だけで笑った人物は、すっと手を翳すと、

【返還】

知らない言語で呟いた途端、ミグリンの身体から急速に力が引き抜かれて行くのが皆にも解った。それはミグリンの色を纏ってその人

物の掌に吸収されていく。

「い・い、や・やめっ。」

ガタガタと震えながら呻くミグリンと、それを顔色一つ変えず表情すらないまま見つめながら、あるうことかまたランバードと話し出す。

「メアリーに大切な用があるんだ。お使い？」

「ええ、街まで行ってますが、もう帰る頃だと思います。大切な用とは何ですか？」

ランバードにしても至って普通だ。

「うん、ランバードにも関係するんだけどね、メアリーお嫁に出しちゃってもいい？・・・ああ、もう終わりだね。」

すっと翳していた手を納めると、ミグリンはもう息も絶え絶えといった感じだった。

そしてその人物の掌の上にはミグリンの青を彩った頭ほどある球体が浮かんでいた。

「結婚、ですか？ミハイルですか？」

ランバードはニコニコ笑っている。うんと肯いて今度は指をくいと曲げた。途端にミグリンの身体が浮かんでその人物の前まで運ばれる。

「いきなり人を攻撃するようランバードは教育しなかったろ？ 若いからって侮られないよう気を張るのもいいが相手を見て喧嘩を売れよ。死ぬぞ。」

視線を合わせてから、その球体をずっとミグリンに押し付けると、それは彼女の胸辺りから身体の中に取り込まれてゆく。“返すよ”と言いなから。

「大丈夫か？ミグリン。肩の力を抜いて、深呼吸をしながら力を意識して身体全体に行き渡るよう気を巡らせる。一気に入れたから気を失うぞ。」

と、ミグリンの額に触れてその揺れる身体を指一本で固定しているらしい。そこに来て初めて皆は気がついた。

「い、としごさま……。」
誰が呟いたのか、その小さな言葉が部屋に零れた。

「ああ、そうだ。 我が唯一神ガイアスの子“零”。」

「御名前を決められたのですね？」

パウロはそう言って席を勧めると、私の目の前に手ずから入れてくれたゾーイという飲み物を置いてくれた。これは地球で言うところのコーヒーにそっくりの味をしていて、コーヒー党だった私にとっては、非常にうれしい飲み物だった。

ただ…そうただこれって木の実なんだけど…なんだけどさ…変な形してんだよね。初めて見た時は即効消えたもん、その場からだって！！ だってよ、よりによって！

ああ、確かに嬉しかったさ。美味しいし懐かしいし。…小さい頃からいろいろと視えたり感じたりしてきて、あんまり怖いものがない私だって怖いもの、というか好きになれないものはある。

パウロがこうしてゾーイを入れてくれる度に、それを口に入れながら（でも飲むんです。だって美味しいから。）あれをつい思い浮かべるわけよ。

美しい緑の木の枝にびっしりと、そうびっしりとなっているゾーイの実。あの黒々とした艶のある…大きさといい光り方といい、よく似た地球の生き物、ゴブをね…。

でも哀しいかな美味しいんだよね、また。

喰い気（飲み気か？）に負けるって人としてどうなんだと思うこともあるんだけど、まあ今更か？とか開き直りも必要だよ、だって異世界だし、精霊だし、神様だし…ってかなり現実逃避して、現

在に至つてゐる訳で。ついつい浸つちやうわけなのよ、これが出ると。
「・・・うん。呼びにくかつたろ？それにほら、バレバレ感がちよつとね・・・だから。通称つて思つてくれていい。」

“創る”のがガイアスで“壊す”のが私なら、名前は単純に“零”
0、ゼロという意味で“レイ”）“でいいんじゃないかと思つたんだ。ポチやタマよりまともだろうし。”

「零様。先程は失礼を致しました。ランバード神官長より話だけは聞いていたのですか、よもや来て戴けるとは思つておりませんでしたので・・・。」

深々と頭を下げるミグリン。彼女は最近神官長を拝命したばかりの女性で、元はパウロの養子。何でよその国かというと、この世界ではガイアス以外の神はいないから。つまり世界唯一神がガイアスなので、どの国もガイアスを信仰し、神殿も王のいる街の本殿はガイアス神で、あとの地方はそれぞれその土地にあつた精霊の神殿だったり（たとえば海沿いだと水関係でアーリー神の神殿とか）、でもどこの街にも大きさは異なれど神殿はあるんだと。

そしてそれぞれの国にたつた一人神官長が配属されている。これは転勤制があるらしくずっと死ぬまでその国、ということはないそうだ。それは特定の国や地域、王や貴族との癒着を防ぐためなのだそうだが、神殿や神官の立場は基本中立。どこにも属さず、誰の臣下でもなく。長は当たり前ながらガイアスで。

「用がね、あつたんだ。二つ。一つはね、さっきも言つた通りパウロの子、メアリーに求婚をしたいと申し入れがあつたこと・・・あとひとつは・・・パウロ。」

「はい。」

貴方は気が付いていてでしょう。聡い人だから。

「ここを、サージェスを出ようと思う。」

そう言つと、

「はい。」

にっこりと、解ってますよって顔で返事をされた。

この人は爺様みたいだ、といつも感じていた。実年齢からいくと、父親の方が近いんだろうけど（どうかな？こっつて1年1520日あるからな。それで計算すると、私はまだ13歳だよ。）無条件に甘えなくなるってゆーか、解ってますよ感がある割に、それが嫌味でなく前面に出されないさり気なさが、“大人の人”って感じなんだよね。

「私どものどれかの国にお越しですか？」

さつきから人をガン見していた彼が言う。

金茶の髪に細面の茶の瞳。そうか、実家が山岳地帯だからアークの加護付きか。

「そのつもり、ってゆーか、全部を回ろうと思ってる。」

その言葉に部屋の中がざわめいた。自分たちの国にまで来てくれると。さつきまで話していた議題はまさにそれだったのだから。

「中にはパウロが独り占めしてるなどと、不穏な言葉もあったようだが・・・なあ？ ザクトの。」

と冷たい空気を纏わせて零様はランバードの向かい側に座っているザクト国神官長コスタモールを見た。

「そ・・・すみません。」

”そんなことは・・・”と言いかけたのだろうが、彼は頭を下げた。

「イライラしている原因は解っているが・・・気になるくらいなら今回は代理を送ればよかつたろう？来る馬車の中でもずつと愚痴ってたな。流石にお前たち一人一人の都合に合わせてこちらは動けないし、動く気もないからな・・・コスタ。」

ビクツと彼の肩が揺れる。

「生まれたぞ。無事だ。奥方も大丈夫だぞ。つい先ほどだ。……
ああよく泣いてるな、元気な……。」

「女ですか？女の子ですよ？」

零様の言葉を奪うようにして身を乗り出し、唾を飛ばす勢いでコスタモールは聞いた。そうか……。だから最初からイライラしていたわけか。

「……………」

そんなコスタモールを見ながらにやにやして零様は、肩を竦めて教えなあいと言っている。

「零様！」

「おっ！……母親譲りの金の髪に金の瞳。真っ白な肌の、そう……待望の女の子だよ。」

やった！と飛び上がる勢いで席を立ったコスタモールに零様が口を開く。

「コスタ。お前、すぐ帰れ。」

「……………は？」

部屋がシン・とした。それは怒っていつている訳でないのは、声の調子で解る。表情はあまり変わらない方の様だから、知らず声で判断してしまう。コスタモールは、零様を振り返って泣きそうな顔をする。

「ご不興を？」

「違うわ。どんな暴君だ、私は……。オーズが下りる。私が送ろう。その方が早い。パウ口席を外す。皆庭にいてくれ、すぐ戻るから、私の旅の連れを紹介しておく。」

言っただけのことだった。零様はコスタモールの襟首をガシッと掴んだかと思うと

【転移・目的地ザクト神殿】

消えた。

もう誰一人声を出すことは出来なかった。

この世界には魔法がある。しかしそれでも転移は魔法陣を使って行われるものであって、一言で転移を、それもほかの人間を連れてとというのは初めて見た。

(でたらめだ。)

指示されたように中庭に出るとすぐだった。目の前の空間が光ったと思つたら、零様が立っていた。

あっさり帰つて来た零様は手ぶら……いやお一人だった。皆がコスタモールを探すような素振りを見ると、「置いてきた。あれは今日は使い物にならん。」と微笑んでいらつしやった。

「先ほどの言葉は……。もしや。」

「ん？ ああ、生まれた子はオーズの加護付きになる。嬉々としてオーズが下つて来ていた。オーズ好みの美しい赤子だったよ。綺麗な瞳をしていた。」

御子様、そのような言い方は……。まるで主が。

うるさいな、マルスは。事実だろう？ お前だつてあまりに速さに呆れていたくせに。

ですが……。

いいじゃないか。あれはフラウの花の精を付けることになったぞ。気にかけてやれ。

……。御意。

風の精霊と話しているのは解つた。言葉は理解できないが。精霊語は、どんなに修業をしようが勉強をしようが、人間には聞きとることは出来ないし覚えられない。

【魂・魄】

現れたモノに、皆は後ずさつた。更には ま・・魔獣。 と言つて

しまい、黒い方に不興を買った。

「魂と魄だ。魔獣ではないよ、どっちかってゆーと神獣だから。彼等と共に行く。どこからどのルートでは教えない。それにこの格好でも行かないから。」

そう言う顔を一撫で。瞳の色と髪の色が変わる。

「それに一番に神殿に顔を出すとも約束はしない。私は街を人を見てみたいからね。」

この国の王が会いたいと打診してきた時、「なら来れば？」と言った話はランバードから聞いた。

「ただ、貴方たちには言っておこうと思って。父から“守るに相応しくないと判断したら壊していい”と言われていることをね。」
静かに言われた言葉に、最初は理解が出来ず、そして理解した後は驚愕した。

“壊す”

零様はふつと笑って静かに佇んでいる。私たちの反応を見ているようだった。

「そ、んな・・・何故？ 何故ですか？」

ミグリンの呟きに、

「そんなに驚くことか？ 何も全てを滅ぼすとは言っていないぞ。ただ、一部の人間が得をし苦しめられている人間がいた場合、そしてそれが理不尽であったなら、私は迷わず力を振るうと言っているだけだ。その一部の者たちだけが消えることになる。それで何か、困ることでもあるのか？」

零様はミグリンへと視線を投げながら、言っていることは全員へだ。「それ・・・がもし王族でも、ですか？」

「当たり前だろう？ そんな事が躊躇する材料にでもなると思っっているのか？ 何の為に神殿は中立でどこにも属さない作りになっていると思ってる、ソレイク。何故見て見ぬ振りをし、耐えねばならん。そなたたちの力が小さいからというのなら、なぜ精霊王たちや父を呼ばん。心からの助けの言葉なら届くの。そうパウロは教え

たろう？得をし、悪事を働く者たちの声にかき消されてはならない。許してはならない。“真実の扉が開く時、人は平等に裁かれん。”お前たちが毎日の祈りをする時に最後に唱える言葉は飾りではないのだぞ。」

事実、決まり事のように祈りをし、その言葉の意味を神官になった当初ほど考えたことは最近はなかった。それが真実だと零様はおっしゃった。

だったら、日々愚痴を言っていた自分の悩み事も恨み事も？全部届いていると？

そう考えていたら、こちらを見てにやりと笑われた。

(まさか・・・ほんとうに・・・)

「内容を嗤っているのではないぞ、ソレイク。百面相をしているあなたの顔が面白いから笑っているだけだ。もちろん、内容を知ってはいるがな。」

またにやりと含み笑いをする。

「ひどい！」

「聞こえるのだから仕方ないだろう？加護付きのそなたたちは他の民より私たちに近い。その分聞こえる。職業病だと思って諦めるんだな。それに今更だろう？・・・今までだって散々付いている精霊を通して育ってきた過程の全てを見られているんだから。」

あんな事もこんな事も、振られた事も恥をかいた事も・・・。落ち込んできた。

「まあ・・・そういうことだ。とにかく私は世界を回る。何かあったら何かするかも？だから、心の準備と覚悟をして待ってて・・・ってことだ。」

疑問符付きなのがいかにもで、怖かった。

14 「準備と覚悟をして待ってて?」 (後書き)

・・・ってことでやっと旅立ちます。けど、その前にあと一つ。
そつあの甘えん坊の始末です。

月が昇っている。

地球で見るよりかなり大きめの月は、銀色に輝いていて世界を白っぽく染めているように見える。

【綺麗だな。】

心から美しいと思う。ガイアスの作ったこの世界は、その隅々まで美しい。(例外はあるよ、ゾーイとかゾーイとかゾーイとか・・・)魔法がある分科学というものはなくって、高いビルや車や電子機器はない。けど、不便ではない。

自然や精霊が人々を包みこんで、優しい世界になっていると思う。

パパ。

詠星。

人型になったガイアスが横に並び立つ。その姿は神々しいままに輝いて、月ですら霞む。

なのに、あんまり“パパ”の名称に固執するから、こっちが折れてしまつてこの通りだ。いろいろ失くしていつてる気がするけど、まあほら“パパ”という言葉自体は間違つてないというか否定しようがないので、親孝行と思つて、色々飲みこんでマス。

あなたの気持ちが伝わってくるよ・・・この世界が好きなんだね。とつても愛しているんだね。

うん、愛してるよ。人も精霊も、そしてあなたも、詠星。

この歳になって頭を撫で撫でされるのは実はとても恥ずかしいけど、嫌な気持ちではないから、誰も見てはいないから今は甘えておこう。優しい手、優しい気配。その眼差しも心も。

私も、好きだよ。だから視てみる。そしてパパの守りたいものを私も育てたい。人や精霊、パパであるガイアスを、私も愛してるから。

素直にそう思えることこそが、私がガイアスの娘である証でもあると思う。何の反感もなく、そう感じてしまう。美しいと、好きだという気持ちが溢れてきてしまう。

ギユツと、いつもより多少加減した抱擁をされる。いつもは息が止まるほどで、王たちが仲に入って止めるから。

我はいつも見ている。我が淋しくならぬように何時でも呼んで欲しい。

その言い方自体が、思いやりに溢れている。

やめていい、と言わない。辛くなったらやめなさい、と。

全てを任せてくれる。気の済むまで好きにしたらいい、と突き放すのではなく見守ってくれる。

うん淋しくなったら、呼ぶから会いに来て。

だから私もそう答えた。

窓から吹き込む風が、頬にかかる髪を僅かに揺らした。

その風が何故か花の匂いを纏っている気がして、やっと顔を上げると、

「馬鹿皇子、目は冷めたか？」

彼だった。声は。

「愛し子様・・・か？」

と問うたのは、余りにも外見が違っていたから。

「大きく・・・。」

「・・・なった。昨日な。ところで何時まで呆けているつもりだ。」あれからもう数日が経ったというのに。と意味合いを含んで言われる。

シヨックだった。

『お前が殺したんだ。』と言われた惨劇。事態を軽んじていたこと。

“馬鹿だ”と言われた事に怒った自分は本当に間抜けだったこと。

皇太子だという身分に甘え、何時の間にか自分自身が偉くなつたつもりで何かを成している気になり、必要な友人や人々を疎んじ、りによつて出世のことしか考えていない人間ばかりを徴用していた。心地いい言葉によつて、結局は大きくことを見れていなかった。

「俺は・・・このままでいいのでしょうか？」

「何だ？じゃあ辞めるか？皇太子を。そんな事が出来ると思つていいのか？お前は、本当に馬鹿だな。」

そう言われても、言い返す気力もない。

それは本当に自分が愚かであつたと思ひ知つたから。

パウロがいなければ、この国もああなつていたかもしれないということすら考えなかつた。

自分の足元しか見えてなくて、他の国の情勢や出方を探る事もせず、結局はこの国も他の国も軽んじていたこと。

もつとちゃんと進言に耳を傾けて、耳の痛い言葉にも心を開ききちんと周囲を見てさえいれば・・・。

ふわり、と花が舞うようにベッドに頂垂れていた俺の前に、愛し子が椅子を持ってつて来て座つた。

「本来であれば、執政を少し遠くから見られる今だからこそ、周囲の状況や王としてのクリフォードの手腕を学ばなければならぬ時だ。何を優先し何を切り捨てるのか。それが成功しても失敗しても全ては王の責になるといふ事も。いいか、馬鹿皇子・・・王とはそうやってすべてを自分一人で背負うからこそ尊敬され、敬愛されるもの。どんなに周囲が煩がるうとも静かだろうとも、反対されようが賛成されようが、結局判断する時は自分一人だ。そして失敗すれば一人でそれら全ての罪を負わなくてはならない。お前に父母がいる様にお前の家臣にだつて父や母、妻、子がいる。皆お前の為に働くのではない、その守るべき家族の為に前にお前に賭けるのだ。それはお前が王になるからだ。それはけして逃げられない運命と知れ。」

それを父は、現サージェス王たるクリフォードは15で背負つた。どんなにか心細かつただらう、辛かつただらう。しかしそれを零す

場所はなかつたのだ。今の自分よりもつと下だった父は、何を思つてそれに耐えたのか。

もつともつと、見るべきものがあるだろう、と言われ頭を上げる。逃げられないなら、立ち向かうしかない。そうしなければならぬ身分であると知れ、と。

「お前が王として立つ時、どれほど信用できる人間を周囲に集める事が出来る？ クリフォードは今はまだ健在だが、それがいつまで続くと思っている？ 人はいつか老いる。老いたら死ぬ。その事を考えた事はあるか？ 今のお前では王として立った時、周囲に貪られるだけ貪られて終わるぞ。そしてこの国も民も皆終わる。馬鹿な王を立てたからだと言われるのだぞ。・・・では“信用”とは何か？ “信用するに値するもの”とは何か？ 金か？ 権力か？ それ以外の何か？・・・お前が考えなければならぬ事は多いんだぞ。こんな部屋で落ち込んでいる暇はないんだ。」

ゴツンと拳で頭を殴られる。

「私は助言しかせん。一つの国に肩入れは出来ぬ身分だから。ただ父が人が好きであるように私とて嫌いではない。だからこそ滅ぼしたくはないのだ、だから助言はする。あとはお前たちが考え進んでいかなければならない。良いか、心からの叫びや助けは精霊が届ける。それは精霊が付いている付いていないに関わる事ではない。確かに付いてないなら声が聞き取りにくい、その為に神殿があるだろう？ あそこは精霊王たちの家の入口みたいなものだ。家の前で叫んでいれば嫌でも聞こえるわ。」

その言い方に少し笑うと、ふつと愛し子の声が柔らかくなった。

「精霊は敵ではない、敵に回すものではない。彼らは人間が好きだ。愚かで小賢しい人間がな。お前たちは愛されていると知れ。だから自分たちにとって大切なものは精霊たちにとつても大切であると知れ。それを知っている人間を大切にしろ。」

そう言われ、エセルが思い浮かんだ。

何時も俺を情けないような目で見ていた彼を。あれは皇太子のくせ

に勉強が出来ないとかで蔑んでいたのではなく、こつこつ事だったんだと。精霊を信じれなくて蔑ろに考えていた自分を残念に思っていたのだと。視えないから信じられないと考えていた俺は、じゃあ何が見えていた？

何も見えていなかった。目の前の人たちのことすら。

「アツシユフォード。お前のすべきことは何だ？」

「何をなさった？」

ミ八がやってきて開口一番そう言って仁王立ち。

「。。。。」

言い返さず笑っていると、ため息をついて横にすんと座った。

「近衛隊隊長にエセルが引き抜かれました。」

と言いながら、名簿らしきものを手渡される。それには本日付のアツシユフォードの命で、エセルが近衛隊に配属替えになることと、神殿第一第二部隊の一部を派遣する旨が記されていた。隣国リンドルへ。

その責任者代表として名が上がっているのは。。。。

「危険です。」

アツシユフォードだった。

(極端な奴だな。。。。)
単純思考。

でも嫌いじゃない。

くくく。。。。と笑う私に、ミ八は苦虫を噛み潰したような表情を向

ける。

「では聞くが・・・誰なら適任だと言う？ お前か？ミハイル。同期のよしみで許してくれるとでも？」

「そ・・・それは・・・」

「忘れるな。あつちはすでに国の英雄と讃えられ、次期王になる身だぞ。出だしで出遅れているこの国が取り返すにはこれでも足りんくらいだ。足りない分もおそらくは考えているんだろうがな。ミハイル。」

もう眠れる獅子と言われる時期は過ぎたぞ、と視線で問えば、大きくため息をついた。

「・・・解っております。」

「あと一つもな。」

「そっちは今夕にでも。」

王からの代償は、早急なる北部の復興。

住むべき人間たちは死してしまっているが、人は呼べばいい。ただ呼ぶには街並を整え、その地を治めるに相応しい人材を置き、惨劇があつた記憶を残しながらももう二度と起こさないと確信させなければならぬ、それだけの街づくりをしなくてはならない。

それを最優先に予算を組み、煩い貴族を黙らせ（これは私がデバツたことで文句を言う貴族は出なかつたが）、残党への警戒を含め兵を編成させた一次部隊をもうすでに出立させてある。

かなりの出費である事は覚悟してもらつたが、それでも民への説明をすることで、反感は免れた。

ミハは、何とか及第点。“女に甘い”と言うより、“ヘタレ”だった。まあ、メアリー限定だろうけど。

「行かれるのですか？」

クリスがやってきて泣きそうな声で聞いて来る。

「ああ。他の国も視なくては。」

そう言つと、

「僕は・・・神官になります。」

決心しました、という意気こみで口を開いた。

「クリス。」

「はい。」

真つ直ぐな瞳で一言も聞き洩らさないとも言つように、クリスは私の顔を見上げる。

「目指すなら高みを目指せ。目標は高ければ高いほどいい。その高みに必死で手を伸ばして目指せ。・・・いい見本が目の前にいるだろう？」

“誰か解るか？”と問えば、パウロの方を振り返つて見つめ、しっかり肯いた。

「人を怨むな、とは言わん。目の前で両親を友を殺されたお前にはそれはまだ無理からぬとこだ。ただな、広く視て心を開け。お前の両親を殺した人間たちだつて、普通の人間だつた。彼らだつて逃げ出したかつたのだ。では何から？誰から？“そこ”を考える。考えながら学んでいきなさい。完璧な人間になどならなくてもいい。人を愛する事の出来る人間になりなさい。」

「小さなクリス。そのうち解る。お前がだんだんと大人になつてくればね。」

サラサラの髪を撫でる。

リイン。しつかり育てるのだぞ。お前の主は幼い、しかし考える力はあるのだから、困い込むな。間違えるなよ。次はないからな。精霊語で言えば、クリスの横にリインが現れ、深く頭を下げた。

15 「馬鹿皇子。」（後書き）

ちて、どくに行いじ。

横で執務の手伝いをしていたランドがいきなり立ち上がって俺の前に背を向けて立ち塞がった。

その後すぐだった。

部屋の空気が重く押し掛かり濃度が濃くなった途端、目の前に空間が光り輝きその中から人が現れた。

「リーヴェ・クリストフ。ランド・フォール。テント・フォール。」
光が収まった時、そこに立っていたのは漆黒の髪と瞳を持つ人物だった。

背中の真ん中あたりで遊んでいる髪は軽くうねり、真っ白な肌に必要な濡れたように光る黒い瞳。まだ少年か少女かという身長であるがその圧倒的な力はとても常人では考えられないほどの圧迫感を与えていた。

御子様。

自分たちに付いている精霊が姿を現し精霊語を使って話すと、自分たちの目の前で彼（？）に平伏した。

「愛し子様、か？」

噂には聞いていた。俺はランドから聞いたのだが、自分が元いた国に“神の愛し子様が現れた”と。その時はもうすでに俺はこの国にいたから、本当に噂だけだが。

ランドの震える声には答えず、彼はテントを見る。

「テント、腕は必要か？」
と。

何を言われているのか一瞬分からなかったが、それがどういう意味なのか理解出来た時、

「いいえ。これは勲章だと思っておりまです。」「
テントがそう言って床に片膝をついた。

「フ・・・カッコつけだな、“鬼神のテント”。では軍人であるお

前に相応しいものを代わりに贈る事にしよう。剣を。」

彼が言うと、テントは自分の剣を差し出して掲げる。

それについて手を伸ばして彼が触れると、剣は浮き上がり彼の両手の間に収まる。その数多の傷の付いた剣を「いい剣だな。」と彼はさすって全体を検分しながら何事か唱えた。と、急速に光が膨れ上がったと思つたら、それがまるで剣に吸収されるかのように収まって、あとには今しがた磨き上げられたばかりのような輝きを放つ剣が残っていた。

真紅に輝く真新しい剣は、テントの手に下ろされる。が、彼はテントの手を掴んでこう言った。

「間違つた使い方をすれば、それはお前自身を切り裂く剣となる。……ああ、間違つた使い方と言うのは、別にお前が何時もやっているようなナイフ代わりにしたり、木の実を取つたりと言う事じゃないぞ。」

「見……」
慌てて真つ赤になるテントに、

「罪なき者、弱き者を貶め、斬る時、救える力がありながら救わぬ時、その剣はお前に刃を向ける。覚えておけ。」

一瞬おどけたように見せた顔を引き締め、彼はそう言ってテントの手を放した。テントはすつとその剣を収めると深く頭を下げた。

「ランド。正しく精霊を使っているな。ミランがよく成長している。」

ランドの精霊はランドを離れ彼に擦り寄っていてその手に口づけている。

「ただ、疲れを溜めたな。ミランが心配している。忙しいのも解るが、精霊の言う事は聞いておけ。夜中に書類を引っ張り出してみるな。お前が少々サボつたところで、下の者は文句は言わんぞ。いい人材を集めたな、いい目だ。」

とランドの顔に手を伸ばしその瞳に軽く触れると、ランドの色が濃くなった。その途端にランドの精霊が一回り大きく成長した。

「リーヴェ・クリストフ。」

「はっ。」

自然と床に膝をつき頭が下がる。

「リーヴェ・クリストフ・コンドルト。」

“コンドルト”

それは皆が言いだした、国の名前。新しい国の。

この国の言葉で“コンドルト”とは、“気高い”“貴い”という意味で……。それは……。

「そ……。」

「お前が王だ。諦めよ。」

王などと正直面倒なことはしたくないのだと言って、就任を遅らせている事を言っているのか。

「しかし、私は学もないし兵上がりです。他国に人間だし獣人だし……。」

「そんな事は百も承知で、皆それでもお前にと言っている。それにお前の名はもう他国にも広まっている。……何より、父が認めている。お前が王だ。」

“父”と。あの唯一神が“父”と。

「あなたは……。」

「“零”だ。先程ランドが言っただろう？ 正直私だつてこの荷は重い。が、それが私の役目だし、嫌々やっている訳でもない。何より、私は父が創ったこの世界が好きだ。お前は違うか？」

世界を背負う役をしている彼から、荷が重い世界が好きでやっていると言われて、「俺は嫌です。」と言える人間が果たしているのか。

この国が好きだ。妻の里帰りについて来る度温かく獣人である自分を迎えてくれた人々が。圧政に苦しめられても、遅く生きていたこの国の人々が。だからこそ、兵を辞しても守りたいと思った。自

分一人でも。

「私で務まりますか？」

結局はそこに行きつく。どう理由をつけようとも、自信がないのだ。敵を倒すのは訳が違つ。机上で議論を交わしつつ裏を探るなんて技が俺に出来るとは思えない。

「何の為にランドがいる。奴はそういうの得意だぞ。そしてランドの下に集められた執務官たちは優秀だ。軍はテントに任せろ。テントは教えるのが好きだし巧いぞ。その内ミハイルと肩を並べるほどの使い手になる。片腕でもな。そしてそれたちがみなお前を慕つてついて来ているんだ。お前を王にと望んでいるんだ。これほど嬉しく頼もしい事はあるまい？」

王にと望んでもらっている、と言われて皆を振り返る。いつの間にか執務室には多くの人間たちが入り込んでいて、入りきれない人間たちは扉から中を覗っている。

「みんな・・・俺で・・・？」

「いいと言っている！お前がいいんだ。何時でも正直で真つすぐで確かにその性格は王には向かないという奴もいるだろうが、そんな王がいたっていいじゃないか。芝居くらい打てるように仕込んでやる。」

後にもやいのやいのと皆口々に言つては、笑っている。

「では、新しい王の誕生に、私から贈り物をしよう。・・・まずはチエス。おいで。」

彼は俺の精霊を呼んでその長い髪を撫でる。

御子様。

お前の主はこれから沢山の困難な局面に携わっていくだろう。お前は常に主に寄り添つて生きていかなければならない。今まで以上に力が必要になる。受ける覚悟はあるか？

あります。私はリーヴェと共に。

では、授けよう。少し痛むよ。

二人は話し、そして彼は俺に手招きをする。

「リーヴェ。痛みには強いか？」

「は？」

返事をする前に彼は両手を天に翳しその掌を握りしめる。するとそれが光り、目の前で開かれた掌には真つ赤に燃えているかのように光る寶石のようなものが浮かんでいた。

彼はそれを俺とチエスの前に翳し、瞳を閉じる。

「これは我の血、我の力。彼らを正しく導く手助けをするもの。・この証石を持って、彼らが我の加護する者と認める。彼らが道を踏み外す時、我の手でもってその命を狩ることを誓う。我の証を受ける者、リーヴェ・クリストフ・コンドルト。」

膝をついたままの俺の額にその石を押し付けると、ぐぐつとめり込むのが解った。

「・・・つ。」

痛いというより、熱い。焼印を押されているかのように熱くて、身じろぎをするのを我慢するので精一杯だった。

ズズツと音がして、それは額に吸い込まれて消えた。すると熱いのが消えて、ふつと身体に入っていた力が抜ける。

「火の監視者 エンヤの眷属でありリーヴェの加護精霊チエス。」
チエスの額にも、同じものが押し込まれてゆく。

音のない部屋の中に、ふつと彼が息をついた。

「終わり。・・・相談でも困った事でもあつたら呼べ。ただし、私は食費がかかるから、覚悟して呼べよ。」

ヘラリと彼は笑って、何という事はないという顔をして言った。

「街角にある“ヘリオス”の丸ケーキ2つ、買ってきて？お金は払うよ、もちろん。」

「ああ、忘れてた。これ、預かって来た。」
ひらりと紙を出して、リーヴェに渡す。

(どこから出した?)

右手には大皿、左手にはフォークを持っているにも拘らず、確かに紙は手渡された。いやそれ以前に何も持っていなかったはずだ。

「ランドォ。考えても無駄無駄。・・・それよりゾーイ頂戴。」
私の方を向いてにつこり笑う。怖いです、何でかその笑顔が。

「皇太子が来る、と?」

その言葉にリーヴェの方を見る。

リーヴェは紙を手にその内容を読み上げた。サージエスの皇太子が国の代表としてこの国を正式に訪問、軍を率いて残党処理と街の復興の手助けをしたい、と。

「うん、やつとあの馬鹿皇子が目覚めたからね。大変じゃなかったけど、なんせ馬鹿だから、現実を見せて完膚なきまで思い知らせてやりました。」

(現実を・・・?)

「この国の腐敗に関わった王族や貴族はね、死んではいないんだ。」
あっちと彼はフォークで私たちがいる仮の城の後ろ、森の奥、かつて王宮があつた場所を指す。

「あそこにはね、時の牢獄がある。正確には時を止められた牢獄がね。死ぬ事も出る事もなくテスの許しがあるその日までだけして開く事のない牢獄が。そこにね、閉じ込められている。テスの愛し子を殺した罪を全員で払ってもらう。・・・考えた事はなかった? 加護付きの中にユファとアルファの加護付きが同時に存在しないこと。」
(・・・確かに)

昼と夜の加護付きは、どちらかが存在する時は片方はいない。そして存在する方が亡くなった時、もう片方の加護付きが生まれる。

「止められるの、ですか? 時間を。」

「二人揃えば、ね。彼らにしかない力だ。王宮内にため込んだ食料

が尽きた時、その瞬間を狙って時を止めた。君たちには見えないだろうが向こう側からはこちらは見えている。街の人々の笑顔や復興の様子が。明るく楽しいげな声までね。しかし、向こうのはこちらには見えないし聞こえない。実際どこにあるか解らないだろう？目隠ししてあるからね。」

「許しは来るのですか？」

そしていつか、彼らがまた出てきて圧政をする日が？また戦う日々が？

「さあね。許す前に忘れてしまいかもしれないよ。これはテスの制裁だ、私たちが口を出す権利はない。ただ、時を止められた牢獄は解けた瞬間、止められた時間が一気に流れる。許しがずっとなかった場合その瞬間に死ぬだろうね。」

「しん・・となった。」

「覚えておけ。私たちは優しい訳ではない。戦争などはお前たちの領分でそれに加護付きが加わるのは人間として仕方がない事だろう、が加護付きが死ねば付いている精霊もまた消滅する。帰ってくる訳ではないのだ。王たちは二重に子を失う苦しみに晒される。だからこそ意味もなく理由もなく子を殺されると、王たちの怒りは深い。人間と同じだろう？何しろ、お前たちを創った父は精霊王たちをも創ったのだから、基本は変わらない。ただ人間と違って死なぬ。それは悲しみが続くと言っことだ。記憶が無くなる事もない、そこそサージエスが出来たことだって昨日のようなものなんだぞ。あそこ建国538年だろ？」

そんな空間はきつと生き地獄だろう。

それを見せた、と。どうやってかは知らないが、きつと連れて行ってだろうから。目の前で。

「ば・・・馬鹿皇子って・・・。」

「だって馬鹿だろ？でも馬鹿じゃ王は務まらない。馬鹿が上に立つとまたリンドルのような国が出来上がるぞ。そしたら加護付きがまた失われる。私はそれが嫌だ。だから、荒療治をして目覚めても

らった。リーヴェ。」

(二つ目……。一体どこに入っていくんだ。見てることちが胸やけしそうだ。)

「はい。」

「こき使ってやれ。あの国には北部の代償と私を王宮に呼び付けた代償を払ってもらおう約束だ。あとエセルとパウロを虐めたからな。それとランド、クリフォードに言って王妃の故郷のシングルドから植物の種と果実の木、植物の苗を早急にこっちに運び込んでもらうよう確約を取っている。ほぼ同時くらいにやって来るから受け入れを急がせるよ。」

聞いてガタン、と立ち上がる。

「早く言って下さいよ。どれほどの量なんですか？」

「え〜？ とりあえず500ギル(1ギル≒約1トン)位？」

「ア・ナ・タ・も当然手伝っていただけなんですよ、ね？ 愛し子様。」

踵を返して、彼の襟首をひっ捕まえた。

処理できる訳ないじゃないですか！

「代償は？」

(……って！ このっ……このっ！)

「あと二つ買ってあげますよ。私の奢りでね。」

「ん〜……。」

引きずりながら。皆はハラハラして見ているようだが、知った事ではない。

「ゾーイをつけましょう。それともゾーイのお酒がいいですか？」

「やった！ やるやる！ パウロはくれなかったんだよねえ、お酒。」

「そうと決まれば、ほら行くよ、と彼は私を追い越して歩いて行った。」

神よ。貴女は愛し子をどう育てたんですか・・・。

16 「お前が王だ。諦めよ。」(後書き)

愛し子、喰い気に負ける。

来たばかりの詠星です。

まだこの世界に来てすぐの頃、というか、来たその瞬間か……。
五体欠けることなく無事この世界に降り立った詠星に精霊王たちは
安堵して、父であるガイアスにその報告に出向いていた頃。

「……つぐ、……いった……。」

伸びをしてバキバキツと骨が鳴ってから、瞳を見開いたモノ。
漆黒の瞳は空を見上げ、首をコキツと鳴らして起き上がる。

「どこだ、ここ？」

齋木 詠星。見知らぬ草原にて、御目覚めの瞬間でした。

大体さ、右も左も解らない人間を置いてみんなしていなくなる
って、あり？

文句はありますよ、私だって、と言わんばかりに詠星はユファを見
る。

お前、勝手に起き出しといて、ゆるよなあ。

ユファは貢物である果物をゴロゴロと詠星の前に転がした。

勝手に……。って。

目覚めぬはずだったのだ。我らが返ってくるくらいまではな。仮
死状態で来た詠星を戻ってから皆で蘇生させ、その時に再構築する
陣を敷くつもりだったのだから。

エンヤがそう言って焼いた方がうまい果物をその指先の炎で焼いて
いる。

要するに、あれだ。この世界の成分が身体に力を与えてしまっ
たことだろうか？やはりガイアスの子は只者ではないという事さ。

仮死状態であるにも拘らず、いや仮死状態だったからこそ急激に

吸収して覚醒してしまつたんだらう。こちらとしても初めての事だからな。済まなかつたな、詠星。

アルファの言葉に続きアークがそう言うと、彼に免じて許してしまふ。アークは精霊王の中では一番気が長いというか穏やかだ。それは、まさに大地のように包みこむように。

再構築が済んで、お腹が空いたという詠星の為に、皆が持ってきたそれぞれの食べ物を囲んで話していた。話は詠星がやって来たばかりの時のことだ。

そう、詠星が小さな妖精を捕まえて虐める前までの話。

(虐めてないってば！)

右も左も解らない場所で詠星は目覚めた。

まだ頭がはつきりしない感じで数回頭を振ってから、何故か寝転がっていたのでうんつと腹筋に力を込めて起き上がると、目の前には森の景色が広がっていた。

かなり深い森らしく、木々の景色は切れ間なく、鳥らしき鳴き声やガサガサと何やら動く音も聞こえた。

(どこ？どこ。)

確か自分は酒を飲んで朝帰りの途中で……。

タクシーで……公園で話して……。朝……。

と記憶を巡らせていると、急に眼の前に飛び出してきたものがあった。

あの時は冷静だった、というか叫び声を上げたくてもびっくりしすぎて余裕がなかったただけなのだが……。

それは詠星の5mほど前にある大きな木の後ろの草むらから飛び出してきたのだが、びっくりしたのはその容貌だった。

(ド・ピンクです。)

イノシシが……。

というか果たしてその動物が詠星の知っているイノシシであったか
どうかは解らないのだが、容貌はそっくりだった。
まあ敢えて言うなら、牙が長すぎた感はあるが。

グヒッ　ブヒッ　とか意味不明の声を上げつつ飛び出してきたそれ
は、真っ直ぐ詠星に向かって走って来ていた。

見れば手負いらしく、所々血が出ている。

(ヤバイ！)

手負いの動物が危険な事位都会育ちの詠星だって知っている。しか
もどうやらこれは相当デカイ方に入る大きさだ。

くるっと周囲を見回して、詠星は伸ばしていた足を折りたたみ、体
育座りのようにしてからお尻を地面から持ち上げる。そしてぐっと
足の筋肉のばねを利用してそのまま上に飛び上がった。

(っつて、ゲ！)

イノシシもどきは走り去ったが、上がった詠星が問題だった。

(な・・何ですか、ここ。)

頭上に枝があつたのを認めたので飛び上がって捉まる気でいたのだ
つたが上がりすぎた。

いや上がり過ぎたというレベルではなかった。

辛うじて迫って来た枝は避けたが、その上の枝にはぶつかったし、
それを折っても勢いは止まらず更に上の枝を折りながら詠星は結局
木を飛び出してしまったのだ。

(・・・！)

その時見えた遠くの景色に、ここが自分の知るところではないと確
信した。・・・まではよかったが、勢いは無くなれば後は下降する
だけである。

(・・・ですよね・・・)

落ちる身体を止められる訳もなく、じゃあどうするか？

(捉まるしかないだろ！)

今度は足で小さな枝を折りながら下降し、枝の大きさを識別しつつ
掴まれそうな枝ぶりを視線で探す。落下の勢い+詠星の体重・・・

ここの重力がいかばかりかは知らないが、大きな枝ぶりの方がいいに越したことはない。

(届け！)

真下に現れた枝に手を伸ばしてしっかりと腕を巻き付ける。

(・・・っ！・・・)

ギシツと下に引つ張られる勢いに負けて腕が解けそうになるのを何とか堪えると、代わりにバサバサと他の枝が撓り、そして腕が擦れた。ブーランブラン・・・と何度か身体は揺れて止まった。

大きくため息をついて、詠星は枝に身体を引つ張り上げるとその枝に座った。その直後、

「どっち言った？」

「あつちだ、枝が折れている。傷を負ってるぞ、そう遠くには逃れていない！」

ガザガザと草むらをかき分けて3、4人の人が現れてさっきのイノシシ戻りを負っているらしかった。

(狩人・・・さんですかね？)

その割に銃は持っていない様子だった。

縛るためのロープを肩にひっかけている者、槍みたいなものを持っている者様々だったが、誰一人詠星が乗っている自分たち頭上の枝を見上げなかったのは助かった。

帽子みたいなものに、肩にはロープ。足元はかなり足にフィットしたブーツみたいなものを履いていて、パンツには膝当ての様なサポーターみたいなものがはまっている。

その声の上を見るんじゃないか、バレるんじゃないか、とハラハラしながら下を見ていると、3人は立ち止まって目印であろうもの木々に刻み、話しながら歩いて行った

「どうしてこうなった？」

思わず呟いてしまったところで、返事をくれる誰がいるわけでもない。

青い空、緑の大地、そして可愛らしい屋根が続く街並。

はあく……何度目になるか解らない大きなため息をついた詠星だった。

その後、襟もとに入り込んだフィンを捕まえたのだ。

そういやフィン、どうしたわけ？

あいつか？テス、フィンは？

いますよ、呼びますか？

うん、と詠星が肯くと、テスが何やら空気を探ってぱっと手を広げると、そこにはフィンがそうそうたるメンバーを前に縮みあがっていた。

フィン！

名を呼ぶと、フィンは羽を震わせて振り返る。そしてその視界に詠星を捉えると、にっこりと笑った。

御子様。

その節はありがとう、フィン。

閑話 1 (後書き)

冒頭のちよつと前・・・でした。

遭遇した時の様子です。

今日付けで、本当の意味でやっと家から縁が切れた。

「良かったのか？よく両親が納得してくれたな。」

同僚はそう言って気を使ったが、エセルは周りが驚くほどすっきりした顔をしていた。

「厄介払いが出来て、ほっとした事でしょう。いいんですよ、これで近衛を辞する事も出来ます。」

除隊届を出してきた、と言えば眉を寄せた。

「本当にか？」

「ええ。貴族ではなくなった私は近衛にいること出来ないでしょう？残った私の価値は“加護付き”だけです。」

「神殿に行くのか？・・・まあお前は最初からそつちを希望してはいたが・・・。」

貴族だから、筆頭4家の人間だからと言うだけで、近衛に配属された時は心底嫌だった。何より兄と共に働くと言う事が。

仕事で動いている時に会う度に視線を感じて冷や汗が出た。

最初は何を言われるかとそわそわし、後からは、“そんなに嫌なら見なきゃいいだろ！”とキレていた。

荷物を纏め、部署を後にして王城を振り返る。

元々近衛などお飾りだ。実践など積んだ事のない者の集まりで、一体何を守ると言うのか。最初っから、神殿部隊に志願を出していたのだ。

家で浮いていた私を救ってくださったランバード神官長の盾となる事を心底望んで騎士になったのだ。

あんな理のなんたるかすら理解していない皇子を守るためじゃない。時々手合わせに来てくれるミハイル隊長の元に行くことをどれほど願ったか。

神殿部隊は、文字通り神殿と神官を守ることを第一に掲げるもので、その配属も神殿に任される。所属の国以外には配置替えはないが、神殿のある地方に行くことはある。

別に中央に未練などない。

「エセル。」

その声が誰のものであるかなど、振り返らずとも解る。

小さい頃はただ怯えた。突きささるほどの冷たい視線に。

今は、怖くはない。鬱陶しいだけだ。

「何か御用でしょうか？宰相閣下。」

振り返り、顔を見る事もなく頭を下げる。

肩から零れる髪を伸ばす私に、「鬱陶しい、男なら切れ！」とハサミを投げつけた事もあった。

加護付きは往々にして髪を伸ばす。

それは髪に霊力が宿ると言われているからだ。真偽のほどは定かではないが、過去の加護付きがみな髪を伸ばしていた事実があるから。

「籍を抜いた、と聞いたが。」

「それが何か？」

「・・・家には戻らぬつもりか？」

“家”

“家族”

“あれ”が？

「居場所のないところを“家”とは呼びませんよ、宰相閣下。」
貴方が・・・その場所を失くしたくせに。」

怒りが沸くと、制御できなくなる。

瞳の色が濃くなり、風が知らず知らずエセルの髪を揺らす。加護精霊がエセルの怒りに感応しているからだ。

すっと頭を上げてま正面から兄であったマークスを見る。

「そんな事を言うものじゃない。」
その言葉にかつとなる。

「貴方に言われたくはありませんね。良かったじゃないですか。家でも職場でも気に入らない顔を見ずに済むんですから。せいぜい北部の犠牲の上で踏ん返り返っていればいいでしょう？ 神官長や加護付きたちの言葉を無視した事を後から後悔しても遅いですよ。」
心の中に、かつてないほど真つ黒な感情が湧いてきた時、ハツとした。

“怒りに囚われてはいけませんよ”と言ったランバード神官長の言葉を思い出した。

「エセル……。」

「失礼いたします。」

早々に切り上げてその場を去った。

その後、無事神殿部隊に拾われて、着任早々北部へと急いだ。リンドルとの国境、北部へは転移の魔法陣を使っていくはずだったが、向こうの神殿が破壊されていて通じなかった。

仕方なしに、精霊術を使って先発隊という形で第一部隊が先に入ることになった。

他の加護付きは知らないが、行く前から私には解っていた。おそらく、壊滅的であろうことは。

先に殺されたテスの加護付きの悲鳴と精霊の消滅。その後続いた悪夢はその事を私に覚悟させるに十分だった。

地獄だった。これが戦場だと言うには余りにも悲惨だった。

ただただ一方的な殺戮と強奪。

家という家は焼き払われ、壊され、神殿に至っても同じ有様な上、神官たちはその着ているものは白であったことなど解らないほどの切り刻まれようだった。

ザンバラに斬られた髪に、潰された顔。手足の切り落とされた者や、女性の神官に至ってはもつと悲惨だった。戦場ではままあるという掠奪や強姦。曝されたままの身体にあるその痕跡には、腹の底から怒りが沸いた。

無理だと思った。

おそらくそこにいる誰もがそうであつたと思う。

「残党を狩るぞ。．．．一人も漏らすな。たとえそれが命乞いをするようにもまだ若い兵であつたとしても、けして生かすな。許してはならん。その者たちに止むに止まれぬ事情があつたにせよ、許されることではない。その者たちに家族があつたとして、ではこの者たちにも家族はあつたのだ。一方的にこのような目に合わなければならぬ理由はない。．．．許せぬ者だけが続け。俺は本性に戻る。」
言つてミハイル隊長の身体は抑えられないとでもいうように膨れ上がったかと思うと、次の瞬間には目の前に獣人としての戦闘態勢である本性に立ち返つたミハイル隊長がいた。
他の獣人も同じように獣態に戻り、とても追い付けないほどの速さで敵を狩りだしていた。

何人切つたか。怒りで目からは涙が止まらなかつた。

感情が迸つて神経が砥ぎ澄まされていた。

そして私には仲間を殺された精霊の感情も乗つかつていた。同じテスの眷属である精霊の悲しみが自分の怒りに還元されていた。

その様子は、まるで感情のない操り人形のようにだつたと同僚になつた男は言つていた。あとから聞いたことだが、加護付きの誰もがそうであつたらしかつた。

中央に積み上げられた敵の遺体は、火の加護付きの炎によって焚きあげられた。普通の火ではないため、隅々まで、灰になるまでしっかりと焚きあげられた遺体は、灰になって風に散るようになつて消えてなくなつた。

その後、神殿から手配された新しい神官たちや周囲の街人たちによつて、街の復興作業は始まつたのだ。第二部隊も到着した頃、第一

部隊は撤退することになって王都に帰ってきた。

しばらくはざわざわとした自分の身体の中から湧き上がってくるざわめきを消すことに終始した。自分の興奮とは違う、精霊によるものだから長くかかったが、それも実りの季節の頃には収まった。テス神の加護付きである私は、やはり実りの季節が一番体調がいい。気分も落ち着いていたその時、急に気が逸る気がして裏庭にある小さな森に足を踏み入れたのだ。

「誰だ？」

大きな木の下に立ち、幹に手をついたままで見上げている人影を発見した。

子供か？　と思うくらいに小さいその人影が振り返った時、ざわつと鳥肌が立った。

漆黒の髪と瞳。自分の方よりも低い身長からこちらを見上げる彼は、子供であると断言できない雰囲気があり、何より瞳が聡明だが読めない色を放っていた。

「神殿隊、か？」

と呟いた声は小さかったが、その物言いも子供とは思えなかった。

「どこから入った。」

「え？普通に。」

肩をすくめて言う彼に小馬鹿にされている気がした。

「結界があつたはずだ。ここは関係者以外立ち入り禁止のはずだが。」

「そう？　まあ関係者？」

何故疑問形なんだ。

“怪しい。”　そう思ったエセルを誰が責められよう。元々エセルが言ったように神殿には結界が張っており、それもランバートが張った強力なものだ。普通の人間であれば、入ってこれないはずで、大抵用がある人間は門番にその旨を伝え、身分証を見せてから初めて

入所できるのである。

それを誰に気取られるでもなく、神殿の、それも裏庭にまで侵入しているとなれば、怪しいことこの上ない。

ただ、相手が悪かったのだ。いや、エセルのタイミングが悪かったのか。

隊長は王宮へ出かけていて不在。ランバードも不在。

今現在この神殿の最高責任者はエセルであった。

身元の判らない侵入者を案内するとしたら、一か所しかない。

「ここ・・・殺風景だねえ。窓すらない。」

部屋、という名の牢に通された侵入者はその中央に置かれた椅子に腰かけて、解っているのかいないのか、そんな事を言って天井を仰ぎみる。

「ランバードは？」

「今ご不在だ。」

「・・・へえ、そう。」

部屋には簡易のベッドもある、それ以外は椅子とテーブル、そしてトイレである。

“牢”とは言ってもちゃんとトイレは別室であるし、ベッドの寝具だつて取り替えてある。椅子とテーブルは確かにただの木製で装飾などはないが、それでも普通の家庭にあるクラスであった。掃除だつてちゃんとしてある。見ようと思えば、ちよつと安い宿屋の部屋のように見えない事もない、くらいには整えてあつた。

「名は？」

「人の名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが筋じゃないかな？」

（むかつ。）

「お前、いくつ位だ？まだ子供だろう？」

「ん？微妙。」

（・・・・・・）

「どうやって侵入した？」

「だから、普通に。ってゆーか、ランバードの結界が自分に効く訳ないよ。」

「神官長の事にやけに詳しいようだが、知り合いか？」

「“知りあい”かどーかは……。でも“顔みしり”ではないよ。今回が初めて会うし。」

(やっぱり怪しい。)

と、睨む視線を強くした頃、侵入者は立ち上がってエセルへと言い放った。

「お腹が空いた。お菓子ください。」

何の遠慮もなく、怖がっている訳でもなく、見知らぬ場所で見知らぬ人間、それも明らかに自分の尋問しているであろう人間に向かってそれを言うという行為にエセルは侮られていると感じた。まあ普通はそうだろう。馬鹿にしているように聞こえなくもない。

「怪しい奴に喰わせるものなどない！」

そうエセルが強ク言い放った時だった。

初めて侵入者の表情が変わった。

「……。いい、ランバードが戻った。彼から貰う。」

「……。なっ、……。！」

次の瞬間、エセルは茫然と部屋の中に立ち尽くしてしまった。

「ケチ！」

そう言い放って侵入者は、消えたのだ。

……。きえ、た？ 消えたただと？

何の術の発動もなく、呪文を唱えるでもなかった。魔法陣などもちらんなく、侵入者は、ふっとかき消したかのように消えたのだ。自分の目の前で。

「……。う、そだろう？ そんなわけ……。そんな……。」

立ち尽くすエセルの元に、部下が駆け寄ってきた。

「神官長が戻られました。今、表門にいらっしやいます。」

……。あいつは何と言った？

「ランバードが戻った。彼から貰う。」

確かにそう言った。

何時知った？ どうやって知った？

ランバードは今帰って来たのだ。門にいるという事はまだ馬車の中だ。一番の先触れでも“今”なのだ。それなのに、何故？何時？どうやって？

エセルはかっと瞳を見開いた。

「神官長を保護せよ。侵入者は黒眼黒髪の少年。年の頃は10歳、変な術を使うため、惑わされるな。・急げ！」

そう兵に言付けてその場から走り出したエセルの事を、このとき誰が責められよう。

門に足止めを喰っていたランバードの元にエセルが駆け付けた時には、その居所は知れていた。

よりによって隊長の部屋だった。

この建物の中で一番上等な部屋だ。

「何かあったのですか？」

ランバードは何時になくそわそわと落ち着かない様子で聞いてきた。

「神官長。申し訳ございません。侵入者がありまして。今神殿に入られるの……神官長！」

エセルの言葉途中で、ランバードは振り切るように警備隊の建物に入っていく。

「待つて下さい！何者が判らない状態では危険です。」

前に立ち、押し留めるエセルにランバードは真剣な瞳で言った。

「私の結界が機能しなかったのでしょうか？その方は、裏庭にいたんですね？そして……おそらくは漆黒の髪と瞳でしょうか？違いますか、エセル。」

何故？

「そのとおりです。が……知り……お知り合いですか？」

一応丁寧語に改める。

「いえ、お会いするのは初めてですよ。おそらく、この世の誰もそ
の方の事を知っている者はいないと思います。」

「この世の誰も？」

「では、何故？」

エセルや皆の疑問の視線にランバードは居住まいを正してから口を
開いた。その言葉に皆は愕然とした。

固まってしまった皆を置いて廊下を進むランバードを我に返ったエ
セルが押し留めた。

そして本当かどうかは会って判断するから、と先に入室することを
承諾させ、ランバードを置いて隊長室まで走った。

走って、ノックなしにいきなり開けた。

彼は涼しい顔をして窓辺に立っていた。

何と声を掛けていいものか・・・言葉を考えあぐねながら足を勧め
ようとした時だった。

【とまれ】

聞いた事もない言葉で、自分の足がまるで床に縫いとめられたかの
ように動かなくなった。

そして

「で？」

と返された。その視線は“何かわかったか？”と言っていた。“自
分に付いて何か判ったのか？”と。

「先ほどの言葉は？私は一体・・・なぜ拘束が解けないのですか？」
その言葉に彼が答えることはなく、不意に髪を撫で上げる様な風が
吹いた。その風は確実に彼の方から吹いて来ていて、しかし窓など
はあいておらず・・・。

彼の瞳が僅かに動いた。エセルの方ではなく、その後ろ、扉を見た。

「誰か来たね。」

「神官長です。」

答えた時、扉が開き、ランバードが部屋の中に進み入って来た。

どうするか、と思っていると、そのランバードの身体が礼をしたまま動かなくなつてエセルはつきり自分が受けている拘束をランバードも、と思いこみつい文句が口から出た。それを

「控えなさい。」

ランバードの声に消された。

そしてランバードは傳いて話し出す。

「愛し子様。お初に……いえ、私の代で御会いできるとは光栄に存じます。ウィル・セレン・ランバード、第326代中央神殿神官長でございます。」

「うん、最初に貴方に会うようになると言われたんだよ……父に。」

“母の如き慈愛のセレン・道を示す雄々しきウィル” 受け止める覚悟はあるか？

“父に“とする”と吐き出された言葉。

“愛し子”の“父”

それは、この世界の最高神……“ガイアス神”

それはランバードのことかと神官長を見れば、ランバードは静かに彼の前3メル(1メル=50センチくらい)ほど前に膝をついて腕を胸の前で交差させて彼を見上げている。ランバードは拘束されてはいないらしい。彼はそれまでの無表情が嘘のように、にっこりと魅了するような笑顔をして自分の胸の前に両手を合わせる。するとその手が眩しいほどに光を放ち一瞬目を閉じて開けると、彼の細い白い手が開かれその中、いや手の上に浮いているような形で赤いものが光を放っていた。

彼はそれを指で摘み、一歩二歩とランバードの近くへ寄ると赤いものをランバードの額に押しつけた。一瞬ランバードの身体が震えたようにざわめいたが、彼は気にした様子もなく依然そのままの姿勢

で口を開いた。

「ガイアスの代弁者 パウロ・ウィル・セレン・ランバード”あなたに父の祝福と恐ろしき枷を。愛し子なる我の手によって授けよう。」

ズズツ・・・と音が聞こえ、その赤いものはランバードの額に埋まっていた。するとランバードの額に赤い文様が浮かび上がる。それは鳶が絡まるような文様で、そして彼が身体を屈め額に唇で触れると肌に溶け込むように消えていった。

「神殿守護第一部隊副隊長 エセル・ソード。」

彼の声が威圧感を持って自分の名を呼ぶと思わず立ち上がる。ランバードが振り返った。

「また後日お披露目はあるかと思うけど・・・彼は今この時より、名を“パウロ・ウィル・セレン・ランバード”と名乗ることになる。あなたには証人になってもらおう。これ決定事項だから。拒否なし、質問なしでね。」

その後、別室でクリスの件があり、その話の何もかもがないはずの彼が知りえないことである事からもランバードの話を信じるしかないという結論に至った。

それからずつとからかわれる様に弄られている。

「お前、少し変わったか？・・・柔らかくなった。」

隊長のミハイルに言われ、首を傾げる。

「いや、いい。それも計算の内だろう・・・ああ付いて行きたかったが仕方がない。」

ミハイルはそう言って空を仰いだ。

先日、彼は旅立った。

どこへ行くのか、どのルートで行くのか。何一つ教えてくれないまま、というか本人も決めてないようだったが“世界を見てみたい”という言葉通り、おそらく世界を一回りする気なのだろう。

それがどれほどの時間がかかるのか、何があるのか解らないが、必要であればきつと精霊を通して連絡があるはずだし、きつと騒動が持ち上がるのでこの国にいるかくらいは解るだろう。

「新婚の人間が何言ってるんですか。」

皆が憧れたランバードの手中の珠を手に入れておきながらそんな事を言うミハイルを横目で睨む。

しかも零の取り持ちで、だ。何時の間にそんな事になっていたのか。「ああ感謝している。・・・まあ俺より“零様”命の様だがな。俺も零と争う気は毛頭ないから。」

二人して地面に座ったまま空を見上げる。

我らの愛し子様。

どうか世界を壊さない程度に、暴れまわって来て下さいね。

我らはここで、あなた様の帰りをお待ちしております。

届くのか解らない思いは、風に溶けて空へ流れる。

サージエスは今のところ平和です。

閑話 2 (後書き)

エセル君は意外と硬派であるという話。

17 「折らせてもらおうか。」

困ったら呼べよ、と言いながら彼は光の中に消えた。

「あれが愛し子、か。」

思わず呟いた声に、ランドが答えた。

「喰えない方ですね。飄々として、でも痛いところを突いて来る。考えていないようで、目まぐるしくあの小さな頭の中は計算されているようです。・・・私たちに気安いようで、でも一線をけして越えないし越えさせない。あの食欲もさることながら、やはり神の領域なのでしょね。読めません。・・・気が付きましたか？あの方は全属性をお持ちでした。精霊と契約をなさっているのではなく、精霊が自ら傳えているのです。」

流石、神の愛し子様ですね、と。

「・・・ってゆーか、強さが半端ねえ。」

言いながらテントは横に座り込んだ。消える前まで鍛錬という名のしごきを受けていたのだ。

「振りじゃなくか？」

「馬鹿言え！・・・足震えてんだぞ。剣を持ちあげる力も残ってねえ。」

愛し・・・いや零から加護を付けてもらった剣は、隻腕であるテントにも使いやすいよう、軽量が軽くなっているらしい。しかし、その切れ味と威力はそれ以上になっているようで、テントはそりゃあもう喜んでいた。

「力使って・・・。」

精霊の・・・と言いかけると、

「使ってらっしゃらなかつたですよ。気配も感じませんでした。ですから、あれはあの方の本来の技なのでしょうね。・・・恐ろしいくらいの確に弱点を突いてこられます。それに、あの相手の力を流して掴ませない体術は、戦いにくかつたようですね、テント。」

ずっと一緒に見ていたランドが断言した。

「うん・・あれ、俺苦手だわ。強く出れば出ただけ、かわされた時のこっちのダメージがでかい。・・ほんと、計り知れないよなあ。」

テントは次はもっと出来る様になってたいなあ。・・とため息をついて空を見上げて本格的に寝転んだ。

時の牢獄の裏、こんもりとした森の中をてくてく歩いていた。
「さて・・どこに行くかな？」

この森を真つすぐ行けば、この大陸で一番大きな国に出る。森の端に川が流れていてそれを境にこっち側がコンドルト、向こうは“ライオネル”王国。

【ライオネル・・ってゆうーと、元は獣人の国だな？】
魂がいきなり出現して、その形態を獣から人型に変える。その上、真つ黒もふもふの尻尾は出したまま。手に取るように考えている事が解る。

【コ〜ン〜・・・】
引っ込んでなさいよ、と続けるつもりだった言葉は、しかし発せられることなく掌に吸い込まれた。

その手の持ち主までもが、のりのりで出てきているのである。

【よいではないか。我らは常に3人一緒だろう？】
魄もしつかり人型に変体済みで、私の口を塞いでいた手をどけると頬に擦り寄ってくる。人型になってもこの世界の人間に大きさを合わせてあるから、デカいんですけど！　しやすいからって抱えあげないで！　腕にちょこんと座らせないでよ！　まるで子供扱いじゃないかっ！

私、19なんですけど・・・。そんなひよいひよい持ち上げられる

ほど軽くないつもりなんですが・・・。

【軽いぞ？ むしろ地球にいた時より軽い。】
両脇に手を差し込んで、人の身体をぶらぶらと高い高いの姿勢のまま振っている魂が、首を傾げた。

【え？ うっそ？】

【詠星もこの世界に合わせて身体が変体しているのではないのか？
なにしろ神子ゆえな。】

私を揺らして遊んでいる魂の腕から私を奪い取るようにして魄は言い、また曲げた腕に乗せると歩き出した。

こうしていると、小さな頃を思い出す。

周りの大人や人が怖くて、透けて見える心が怖くて、いつも一人で境内で遊んでいた。

龍神を祀ってあるうちの敷地から少し奥へ行くと、小さな、本当に小さな祠が二つあった。

それはまるで、うちの裏を守っているかのように外を向いて建っていて、中には狛犬が納められていた。

『爺様、あれは何？』

もうその頃は祖父の後ろばかりを付いて回っていた私に、祖父は掃除をしながら教えてくれた。

『ここはな、むかあし国境だったんだ。国境と言うのはな、人の出入りがあるように物や気の出入りもある。それで、悪い気が入ってこぬように、街道の入り口に見張り番を置いたんだ。それがこの方たちだよ。』

『“この方たち”？』

『いくなれば、厄災が入ってこぬように見張っているのだよ。昔は村に、今は街に。』

番犬・・・なんだ。と納得をした。

その後から、何故だかそこを掃除しなくてはいけない気がして来て、毎日箒を持ってその祠までえっちらおっちらと小さな丘を越えて掃除をしに出かけた。雨が降る日も風の日も。

そんな時だった。珍しく雪が降った日の事だった。年明け2月とかなら降る事もあるが年内に降るのは珍しい日、すごく寒い中、私はいつも通り掃除をしていたのだ。マフラーをしていても鼻の頭は真っ赤になり、手袋をしていても指先はかじかんでいた。それでもいつもやっているように雑巾代わりに使っていたタオルを水で濡らし狒犬様を拭き上げようと振り返った時だった。

「幼子よ、その志は感心だが、風邪を引くぞ。」

声が出てきよるきよると見回すと、愕然とした。

「いない、いや“ない”のだ。狒犬が。狒犬の像が。」

「え？あ．．．え？」

石で掘られた像は、簡単に運べるほど軽くはないはずだし、何より大きかった。それに何時も来た時は必ず手を合わせるのだが、その時は確かに鎮座していたのだ。

「こつちだこつち。なにボケつとしてる。」

さつきとはまた少し違う声が出て、台座の後ろからひょいと顔が覗いた。

「．．．．．っ！」

自分が声を出さなかったのを後から褒めたくらい、びっくりした。人が、いた。何時も誰一人いないからびっくりしたのではなく、その人が．．．人の耳が、いや．．．尻尾．．．。

「み．．．ミミ．．．耳．．．。」

「“ミ”？ああ耳か？これだよ、よく聞こえるんだ。」

とびくびくと頭の上で動くあり得ない形状のモノ。今なら“違うわ！”と突っ込むところだが、その頃の私にそのスキルはなく。

「あと”尻尾”か？．．．どうだ？温かかろう？」

真上から降ってくるような声が出たと思ったら、自分の身体に巻きついた白いもの。確かに．．．。

「．．．．．あつたかい．．．でも、あの．．．あの．．．。」

ふさふさと豊かな毛を揺らして自分を包みこんでくれたそれは確かに暖かくて幸せな気分にはなったのだが、いかんせん、ありえない

ものだ。

『我らが何者か、だろう？』

コクンと肯いて見上げると、こっちもさっきの人と同じく頭に尖った耳があり、さっきの人は黒、こっちは白だった。

『アレだ。お前が毎日拜んで掃除して綺麗にしてくれるものだ。』
言われて指さされた方を見ると、もぬけの殻の台座があつた。

“まさか！”と思つたさ。いくら幼くてもさ。そりゃ、変質者かなとか、流行りのコスプレかとか……。でも、

『“お前”なら“見える”だろう？ 真実の姿が。・・・斎木 詠星。』

そう言われて、ビクツとなった。私と祖父の秘密をこの人たちが知つている、と。

ぱつと離れて、二人を凝視した。

その頃は心の声だけじゃなく、他の人には視えないものまで見えるようになり始めた頃だったから。

二人からは、いつも狛犬様を拜む時に感じる温かいものと、怖いものが立ち上つていて、何より、本体が透けて“視えていた”。多分、その時は“視せて”くれていたんだろう。

『狛・犬様？』

私の小さな声に、また二人は近づいて来てその長い尻尾で包んでくれた。

『魂だ。』

『魄だ。』

『我らの真名をお前に奉げよう。今この時よりお前が我らの主となる。お前がこの世を去るその時まで、我らはお前と共にあり、お前を守つていこう。』

後から聞いた話では、二人の声が朗々と響いた中で、私は気を失つたらしい。

「魂、魄。ごめんね。二人までこっちに引つ張ってきちゃって・・・。」
きゅつと魄の肩に添えていた手を頭に回して抱きしめる。
歩いていた足を止め、二人はこっちを見た。“何だ、それは。”と
言う顔をして。

「だって・・・向こうでは立派に神様していた二人には守るべき街
や人や社があったのに。」
私に引きずられて世界を渡ってしまった。

「そんなことか・・・。それならば、お前の家の龍神に頼んできた。
戻れるかどうかは解らんが、当分頼むとな。」

「それに！俺たちの目の届かないところでお前に何かあったらど
うすんだ・・・。それこそ心配でおちおち社で昼寝も出来やしない。」

魂の言葉は少し乱暴で、でも温かい。何時だって二人はこうして私
を包んでくれている。

川を魄に抱えられたまま飛び越えると、森の中が騒がしい。

(子供?)

・・・のような声が聞こえる。それが遊んでいるというよりは・・・。

御子様！助けて！

風の精霊の声がして、わずかな風に背中を撫でられる。それを合図
に、魄の腕を飛び降りて私は走り出した。

「手助けは極力しないのではなかったか？」

横を滑る様に飛んできた魄の言葉に、

「命が掛ってるなら別だよ。相手は軍人でも何でもない一般人の子
供、だし！」

“だし！”のところ、とりあえずガード強化の術を掛けた腕を突

き出し、目の前に転んでいた小さな命を拾う。

(ウサギ！ウサギだよ、この耳…ああ…) (頼ずりしたい、と顔が蕩けそうになったが精霊の声で相手を振り返った。)

御子様！危ないっ！あの爪には毒がごございます。

(な…何ですとぉ？…毒って…生き物の爪が毒ってっ！)

とりあえず距離を取って後ろへ飛んだ後、腕の中の子供を見下ろす。

「名は？」

「カーティス…誰？」

泣きながらだつたが答えるカーティスに、

「他に誰がいる？一人じゃなかつたろ？声は複数した。」

少なくともあと3人はいるはずだ、というと、カーティスは更に後ろを振り返った。

(木？…ああ上か。)

木の上と同じ年頃らしい子供が3人上がってガタガタ震えている。

腕の中のカーティスを見る。

(守ろうとしたのか。まだこんな小さいのに。)

自分だつて怖いだろうに…と思っていると、カーティスは頬の涙をグイッと拭いて耳をぴくぴくさせた。

「だって…だって僕しか術を使えないから…。」

拭いても拭いても涙は零れてくる。よほど怖かつたんだろう。“偉いね！”という意味を込めて頭を撫で、その木の上にカーティスを登らせる。

「絶対、降りるな。」

言つてその木全体に結界を張った。もし万が一子供たちが慣れて思はず下りたとしても結界からは出られないから危なくはない。

「さて…怖いよ、その牙。」

と目の前の魔獣に声を掛けるが、返事は当然返ってこない。

あたりまえだが、獣人と魔獣は全くの別物である。

遙か昔は、同じと考えられて人によって獣人が危害を加えられた事もあるようだが、まず一番の違いは先程の事カーティスだ。

話を通じることだ。獣人は“人”と付いているくらいだから、文字や言葉を持っている。文化も。それこそこの世界では獣人の方が人間より古い歴史を持っている。魔獣は文化も知性も持ち合わせてはない。彼らはただ狩るだけだ、腹を満たすために。目の前にいるのが人であろうと動物であろうと、そんなものは関係ないのである。

「折らせてもらおうか。」

【肉体強化】

【範囲結界・10m】

【魂、魄 あれを足止めして!】

姿を消したまま、二人は魔獣の足元を術によって固定する。

それを確認して、魔獣に向かって走り出す。

己の身体が動かない事をどう感じているのか、激した魔獣の口が私に喰らいつこうと牙を剥いた。その瞬間を狙って正拳を牙へ向けて突き出す。

強烈な光を放ち拳が牙に当たった途端、ビキビキと音を立て牙にひびが入った。しかし折れるまでには至らない。

私どもをお使いください。

精霊が傍に飛んでくる。

いや、それは出来ない。

ちらりと後ろに視線を投げかけてそう言うと、拳を打ち込んで飛び上がって宙を舞っていた身体を着地させて態勢を整える。

あれの弱点は？

額の中央。目の間でございます。

聞いて走り出す。そして飾りだと思って腰に下げていた剣を取りだした。これはミハがキューピッド役をした私に礼だと言ってくれたものだが、まさか使う事になるとは思ってたなかった。

技の割に筋力がない私の見抜いてか、それは軽く持てながらも、切れ味は鋭かった。

魂魄に術を解かせ、動けるようになった脚で魔獣は私を押しつぶそうとも思ったのか、大きく前足を振り上げる。それを下に潜ってかわし、その長い体毛を掴んで飛び上がる。つまり背に乗った。

【詠星！】

纏わりつく、初めて感じる気。

・・・！

（なんだか知らないが、気持ち悪いな。）

早いとこ片づけてしまおう。背を頭に向かって走り、そのまま顔に向かって飛び降りた。

【一点強化】

剣先だけに力を集中させ一気に眉間に突きたてる。つか辺りまで深々と刺さった剣にそのまま力を注ぎこむ。大きな身体で打ち込まれた剣は針の様であっても、流石に弱点に打ち込まれては痺れるだろう。そのまま膝をつくように倒れ込む身体に追い打ちをかける。

（拳が駄目なら足で行くさ。）

飛び上がって先ほど入れたひび目掛けて蹴りを繰り返した。ひびが広がったところへ回し蹴り。

“ガキ・・・ン”

大きな音がして片方の牙が折れた。

17 「折らせてもらおうか。」（後書き）

一 国目・獣人の国「ラオイネル」でございます。

18 「頭のいい暴れん坊」

『 その者 高き志と強き力にて 神の剣を取り

ネル山の麓に 国を拓きたり

神から遣わされた剣を取りたるもの

名を ライ と呼ぶ

ライを王として開かれたる その国を

ライオネル と呼ぶ

〔ライオネル創世記〕

』

オネル王国

ライ

「へえ・・・その剣って神殿に飾ってあるんだ？」

「飾って“んじゃねーよ、祀ってあるんだよ。”

「ああ、祀ってね・・・。見た事あるの？」

「あるに決まってるじゃん。毎年建国祭の日だけ見せてもらえるんだぜ。」

4人の少年と歩きながら麓の街に来た。

「兄ちゃんさあ、それどーすんの？」

タヌキみたいな耳をした少年が言う。

「売る。売れないかな？」

「売れるに決まってんじゃない！すっげえ高いんだぜ？マーグルの牙つて。」

（マーグルつてゆーのか・・・。）

4つ足の熊の巨大化した感じで、口の下歯が2本だけこの牙になっていた。それを2本とも折って、ついでに毒だと言っていた爪も剥がして持って来ている。

（不気味だよ・・・。）

街に入って街人の視線を受けつつ歩いているのだが、引きずっているモノがモノだけに、ね。

牙と爪をロープで括って引きずっているのだ。不気味だよ、奇妙だね。

「じゃあ、カーティスの家に行った方がいいよ！こいつん家ギルドやってるし。」

（ギルド。）

何か聞いたことあるな・・・確か、むかあしやったオンラインゲーム、冒険モノ、怪物退治、勇者・・・ギルド・・・

「冒険者ギルド？」

「ううん、傭兵ギルド。でもそーゆーのはどこのギルドでも商品として買い取るから大丈夫だよ。こっち！」

分かれている道の右の方を指差して、先に見える赤い家だと教えてくれた。

じゃあな、と他の子供と別れてカーティスに付いてそこへ行くと、受付のお姉さんにびっくりされた。

通された部屋は、旅人が泊まるには標準的な部屋なのだと教えられた。“もつと上等な部屋がいいか？”と聞かれたのだが、食事は当然付くというので、後は寝られるベッドと風呂さえあればいいと伝えると、ここに通されたのだ。もつとランクを下げれば風呂なしの部屋で半額だというが、さすがに風呂には入りたい。

（日本人だもん。風呂文化の国民だよ。綺麗好きなんだよ。）

『すごいな、これは。君が一人で倒したのか？』

『そつだよ！兄ちゃんすつげえ強かつたんだ！あつとゆるまだつたんだ！』

私が答える前に代わりに興奮気味のカーティスが答えてくれたので、ただ立っている、そのカーティスの頭をゴチンと大きな拳が殴った。

私の目の前に立つ彼の父親だった。

『何でお前が偉そうなんだ！大体森へ行く時は子供ばかりでは行かないようにといつもつ。』

説教が始まると、カーティスはうへえと言った顔をして下を向いた。どの世界でも、子供はそんなものだ。

『カーティスはみんなの前に立ちはだかつて戦っていましたよ。敵う敵わないは別として、その心意気だけは買ってやってもいいと思います。』

一方的に怒られるカーティスが可哀想でそうつい口になると、調子に乗ったカーティスは逆に余計怒られてしまったが。

気を使つて高値で取引してくれたのかと聞いてみたが、これが相場だというので、貰つて来たお金は袋一杯の金貨。やはり爪もお金になるものだったらしい。しかし、あの爪は抜けたりはしないのでマールが今回みたいに倒された時か爪とぎの時に欠けた欠片しか手に入らないものらしく、出回る量が極端に少なく牙同様高値らしかった。

（毒つきじゃあ、なかなか取れないよね、そりゃ。）

ちなみにこの世界、‘ルビー’なるお金の単位で、１ルビー＝銅貨＝

1千円くらいみたい。で、10ルビー＝銀貨＝1万円 100ルビー＝金貨＝10万円 この貨幣がまた500円硬貨くらいの大きさでかさばる。じゃあそれより小さな単位での買い物かというと、色つきの石みたいな（本当に石じゃないよ、割れるし。）赤貨、青貨、黄貨がある。それがそれぞれ1円10円100円みたいに使えるらしい。これがまた・・

（可愛いんだよ〜！ オハジキみたいで。）
ガラスのような質感んだけど半透明で綺麗。こっちは100硬貨くらいの大きさ。

【不可視・防音結界・半径3メートル。侵入者向け防御結界作動】

結界を発動させ、とりあえずかさばる金貨と銀貨の袋をよっこらしよってな感じで亜空間に放りこんだ。これが私が手ぶらで旅が出来る理由。まあいわゆる便利ポケット。解りやすく言うならば、皆さんおなじみドラ○もんの四次元ポケット。

活用させていただいておりますよ。ありがとうございます藤○不○先生。私は基本真つ暗で音無しでないと眠れないのだ。神殿では場所が場所だけに騒ぐ人間はいなかったけど、ここは下がギルドだし他の泊り客もいる。薄くはないのあるうが壁越しや廊下を歩く他の人間の足音でも眠れなくなる故の結界だ。

後は、まあ泥棒対策。だつてあんな荷物持ってきたから、それも下で引き取ってもらった訳だしその時金貨を受け取ったのだからしつかりバツチリ誰かに見られてるとも限らない。人を信頼したいのは山々だが、この世界ではいまだ海には海賊がいて、山には山賊がいる。それに、ここはライオネル。大陸一傭兵や剣士なんかが集まってきたちやう国だから。

ここライオネルが、ヒト発生の地だといわれている。ヒトの伝説では。

ライという男がネル山の麓に開いた国、ラオイネル。

(…でも違っただよな。ほんと、神話とか伝説とかっていいように書き換えられちゃうもんだねえ。)

バフツと布団を被って、ゴロゴロと身体の位置を定めるべく転がったのち、いい感じに収まった。

でもきつと日本の神話だつて大して変わらないくらい、捏造も入ってる。

ねえユファ。

何だい、詠星。

名を呼んだだけで、すうーっと目の前に現れてくれる。

ここの王つて、あなたの加護付きでしょう？・・・どんな人？私が窓の方を見て寝転がっているため、彼は出窓のスペースにすとんと腰を下ろした。

そーだねえ……。一応“ライ以降初の剣王”と呼ばれてるよ。

とにかくデカイ、強い、態度も性格も腕も、ね。

わっっちゃっ！最悪。脳味噌筋肉タイプ？

ミ八くらい砕けていればいいけど。

うーん・・・でも付けてるのは静かで毒舌な朝日の精なただけど。

(うーん、それって逆効果ではありませんか？)

ユファの話では、人の話も聞かない強引な踏ん返り返った人ではなく、どっちかというの家臣には好かれていられるらしく、能力さえあれば貴族とか家柄だとか関係なく要職に付けるらしい。そして勝手に自分一人で動きまわる困った人物である、と。

(なるほど……。吉宗タイプ。)

頭のいい暴れん坊は手に負えないよね。周りの気苦労が忍ばれるよ。

片刃を潰してある剣というのは珍しい、と言いながら先ほどからその剣を見せて貰っているのだが、この剣を振り回しているのが目の前の少年だというのも興味深い。

「これはどこで？」

「サージェス。そこで知り合いに造ってもらった。」

少年は朝御飯をパクつきながら、また新しいパンに手を伸ばしている。もう5つ目だ。

(どこに入ってるんだ・・・?)

細い身体からは想像できないほど、よく食べる。顔立ちは綺麗でどちらかという中性的ではあるが美系タイプだろう。薄茶の髪に青い瞳。獣人ではなく人間だ。手足が長く、均整がとれている。獣人は人間よりもまた少し大きいから、はっきりしたことは言えないが10代初め、あたりか？

「“知りあい”？」

うん、と彼は肯いてよく知る人物の名を上げた。

「俺はミハイルとは幼馴染だ。あいつ元気にしてたか？」

「へえ。うん、元気だよ。嫁様貰って蜜月真っ只中さ。」

「嫁？獣人か？」

「ううん、人間。パ・・・ランバード神官長の娘さんで、神殿で働いてるすっごいナイスなお胸の美女。」

と彼は手で大きな丘を胸の前で作ってにっこり笑った。笑うと可愛いな。

でもそうか、ミハイルは結婚したのか。

「彼はまだ神殿部隊に？」

「そう、隊長様だよ。」

答える彼に、

「その“隊長様”とどうやって知り合いに？」

誘導尋問みたいで怪しいことこの上ないが、彼は素直に話してくれた。

「私は神殿にいたから。ランバード神官長にお世話になってたから。」

で、世界を見てみたいから旅に出ると行ったら、ミハが“護身用に持っていていけ”ってくれた。」

ランバード神官長に世話になっていた、という事は孤児か？彼が多くの孤児や事情がある子どもを引き取って自分の養子にしているのは、大陸の誰もが知っていることだ。何の見返りも求めない博愛。彼は生まれついでての善人であり、聖職者だと。

「世界を見たいとはよく言ったもんだ、偉いな若いのに。ほれ、うちの奥さん手製の特製弁当さ。出掛けるんだろ？」

ギルド長であるカークがそう言ってテーブルの上にデカイ弁当を置いた。

(何人前だ？)

「ありがとう。カーティスは？」

「学校だ。そっぴやまだ学校へ行っている位の歳だろう？お前さんは。」

「私はランバード神官長に教えて貰っていたから。・・・剣、返してもらっていい？出かけるんだ。」

返した剣を腰にさした鞘に納めて、彼は立ち上がった。

報告をして顔を見ると、嫌な顔になっていた。

「駄目ですよ。」

そう言うと、まだなにも言っていないだろう？と返される。解ってるんですよ、どれほどの付き合いだと思ってるんだ。

「今日はこの山を片づけて貰わないと、明日から仕事が回りません。」

執務室の机の上に出来上がった書類の山の一つをトントンと指先で叩きながら言うと、これ見よがしに大きいため息をつく。まったくこの人は・・・。

金の光を放つたてがみの様な髪に、銀の瞳。

平均的な獣人よりもまた少し大きな体躯。

生まれながらの王みたいな顔をして、全く落ち着きのない。

「解ってるよ。やる、やるけど、少し休憩！・・・で？」

(・・・“で？”っじゃない！)

「至って普通だと思いましたが？まあ確かに歳の割に落ち付いてますし静かな瞳をしてはいましたが、それに一人でマーグルを倒したというには華奢な感じがしましたね。」

牙と爪の大きさから考えても、倒したマーグルはかなりの大きさであつたと思われる。

またそれだけの大金を手にしたにしては泊まっている部屋は一般的な部屋で・・・まあランバード神官長が育てたのであれば、神殿に従って質素であるのは解るが。

「“ミハ”ってミハイルか？風神の。」

それをミハって呼ばせてるのか？大した可愛がり方だな、そう言われ気が付いた。そうだな珍しい。そっぴや一緒に鍛錬にも参加していたとも言っていたな。だとすればあの片刃の剣を使いこなす程度には扱かれたという訳か。

(何にせよ、興味深い。)

隣の国に王が立ち、そこに大掛かりな人員で国上げて入りこんでいるのがサージェスのアッシュフォード皇子。

最初は傍観どころか無視していたくせに、とは思うが、その様が余りにも違ふとこのことで皆驚いている。何がどうなつたら、ここまで心を入れ替えることになつたのかと聞いた者がいたそうだ。ある意味、その者は勇者だと思うが。相手は一国の皇子だというのに。またそれを微笑んで許したアッシュフォードの事を聞いた時むびっくりしたが。以前であれば高圧的に文句を言っていただろうに。

「愛し子様に、諭されました。私は何一つ解ってなかった馬鹿者だという事を。このままでは国が減ぶと。それは全て私のせいである。・・・己の足りない部分、不甲斐ない性格や精神を指摘され目が覚めた思いです。今回は全くの私の一存で押し掛けた訳ですが、王に王たる精神や態度を勉強させてもらおうと思っっているんです。」

そう答えたという。

「愛し子、か。」

神殿からそう言った話は聞いている。詳しくは本人から緘口令がし
いてあつて話せないらしいが、自分が現れたという事自体は、話し
てもいいと。別に隠す事でも何でもないし、私は世界が見たいから、
と。

世界を・・・見て、どうするんだ。

「男かな女かな？」

「は？」

「だから愛し子だよ。娘なら、やっぱり美人かね？」

「・・・馬鹿か、お前は。それしか頭にないのかよ。仕事しろ！」

あいつの女癖をどうにかしてほしいくらいだよ、愛し子様。

18 「頭のいい暴れん坊」(後書き)

まだ名すら出てこない王様ですが……。

金の体毛にユファの加護付きの白銀の瞳です。名前は……決めて
てないです。頑張ります。

獣人の街だと聞いていたけど、意外と人間も多くいた。

「獣人と結婚する女性は多いです。何といても獣人は優しいですからね。獣人の方としても結婚して生まれて来た子は獣人です。世界で獣人の比率は人間ほど多くはないですから。」
「そうなのだ。獣人の異性と結婚して生まれて来た子は必ず獣人らしい。」

それなら獣人の数が多くなるはずであるのだが何故人間の方が多いのかというところ、獣人の子は2人しか生まれないのだという。ひと組の夫婦に最大で2人だけ。しかも獣人の特性である身体能力から、傭兵や軍隊に入るのが多いらしく、当然戦闘で負傷したり死亡する数が人間よりも多い。

（それじゃ、増えないよ。）

迫害されて殺されてきた歴史も過去にはあるが、今はない。ただやはり怖がられる事は今でも多いらしい。デカイし強いし。

人は違うものを忌避する。自分たちより強く大きく逞しい獣人を。だからこそ、その数を増やさない方がいいというガイアスの判断だった。その上、獣人は人間よりも寿命が長い。この世界で人間は120〜130年くらいが平均の寿命であるのだが、獣人は200を軽く超える。過去には人間の倍以上の時間生きた獣人もいたらしい。平均では200前後。

（いやはや・・・平均寿命が80歳代で長生きだとか言ってた日本では考えられません・・・）

ギルドの受付嬢は簡単に街の説明をしてくれながら、ガイドブックをくれた。

「気を付けてくださいね。サージエスから来たんでしょう？ここはあちらほど治安は良くないから。」

ウサギ耳の彼女は、実はカーティスの叔母らしい。正しくは父親の

いとこなんだとか。

「わかりました。ありがとうございます。夕方には戻るようにしますので、夕飯はこちらでいただきます。」

「いってらっしゃい。」

サージエスにいた時にも感じていたが、ここでは更に感じる。

(まるで小人です。せつかく大きくなったのに……。)

更に周りが大きいなんて……。何で最初にこの国を選んだんだ。

私は馬鹿だ……。

(……!)

その気配は解らないとも思っているのか、結構大胆に後ろから付けて来ていた。

(ふう……ん。)

昨夜、寝入った頃に狙ったようにやってきた気配。

随分と扉の前や窓の外からの侵入を試みていたようだったけど。

(売られた喧嘩、よね?)

複数、とは言っても3、4人だが。

そっぴや店の中のレストランにもいたな。

(いくらかなあ?)

いきなり切りかかってくるとか殺すとかそう言った感じの危険は感じないのだが……。

(買ったちゃうよあゝ知らないよあ?)

いい気分ではなかったんだよね。こそこそってやな感じだし。

(引きずり出してやる。)

私は小物の店の角をいきなり曲がった。

あんな子供の見張りだなんて・・・と目の前の対象を見ながら思った。

レストランのテーブルで、大皿乗っかっている“朝から食べるにはさすがにどうなんだ、それ”と言いたくなるほどの量をパクパクと休みなく働く手が口に運んでいるのを見ながら、後数人配置されている仲間に目配せをする。

街へ観光へ出かけると言っていた。先に一人二人が出て、通りからさりげなく後を付ける手段を取る。

『全然駄目。何か術が掛ってる。』

昨夜窓から侵入して持ち物検査でもしちやえば早々に任務は完了だと息巻いた仲間が、その肩を落として帰って来た時のセリフだ。

魔術師としてはかなり上位にランクされる彼がそう言うのだから、実は一人ではなくあの子供にも仲間がいるのかもしれない。というのも、仲間の言う事を信じるならば、あの子供からはそう魔力は感じないらしいからだ。

『馬鹿じゃねーか？くれぐれも言いつけは守ってくれよ。でなきゃ俺たち全員の首が飛ぶんだぞ。』

“首が飛ぶ”とは、その言葉通り“首”の上からが無くなるという意味であり、けして仕事を失くすという事ではない。なぜならこの仕事を頼んできた人物が　だからだ。その際きつちり、

『けして、無礼を働いてはならない。相手に指一本触れてはならない。気取られてはならない。』

それを嚴重に守るように言われた。守らなければ“首を飛ばすぞ”と。

俺たちにとっては、その人物は尊敬する人物である前に恐怖の対象であったから言いつけは絶対だ。それを再度皆で確認して、見張りというよりはむしろ見守りという現状だった。

街に出てから、子供は商店などを除き見つつ、足をゆったりと動かしながら見聞しているといった感じで歩いている。初めて見るモ

ノに目を輝かせている辺り、本当に見た目通りの子供の様だ。が、「いないぞ！」

小物屋の角をいきなり曲がったのに驚いて、つい追ってしまった仲間が叫んだ。

その言葉に皆でその角を曲がって見ると、向こうの通りに出られるよう抜け道になっていてその通りには人っ子ひとりいなかった。

昼間の繁華街の通りである。人さらいが出るにしたってもうちょっと暗くなってからかもっと違う道を選ぶよ、というくらい明るい道だ。

(では、どこに?)

【迷彩解除】

聞きなれない言葉が聞こえ振り返ると、通りの入り口、つまり俺たちが雪崩れ込んできた入口に立つ一人の人物。

薄茶の髪は長く背の真ん中あたりで遊んでいるのをそのままに、青い瞳は空の色だ。近くで見るのはこれが初めてだった。

建物の壁に寄りかかって組んでいた足を戻して、胸の前で組み合わせていた腕も下ろす。そうすると、細く長い手足がはっきりする。抜けるように白い肌に、びっくりするくらい整った顔立ちだった。その小さな顔の中で、理性的な光を放つ瞳がしっかり俺に向けられている。

「あなた方は誰ですか？」

「何故あとをつけてます？」

「誰の命令ですか？」

「答えなければ、どうする？」

すでに見張っているのは見破られているらしいのでそう言ってみると、子供はうーんと考えてから、俺たちの顔を皆見回してからぎよつとするような事を言った。

「彼を貰って依頼主の元へ。」

真っ直ぐに一人の少年を見つめてそう言った。

(只者ではない。)

暢気そうな穏やかな顔をしてはいてもその瞳の光り方が険呑だ。
“怒ってます”と顔に書いてある。

【範囲結界・幅3m 奥行き20m 高さ5m 発動】

「閉じ込められたぞ！出られねえ。」

魔術師の仲間がそう言っ、まるで透明な何かを叩くように空間ががちがちと剣で小突く。そこには景色は見えているのに壁でもあるかのようだ。

「何をした？」

「結界を。答えてくれれば出して差し上げますよ。」

その言い方がむかつとしたが、俺よりも先にキレた奴が飛び出してゆく。

待て！・・・と叫びたが、時すでに遅し。奴は地面に沈んでいた。

「・・・ころ・・・。」

「・・・してませんよ。みね打ちして気絶してるだけです。まるでなつてないですね。受け身も取れないんですか？」

何で殺すだなんて無駄な事を・・・と子供、いや彼は言った。

「何でこいつなんだ？」

と彼が選んだ仲間の一人を指さして聞く。

「彼がこの中で一番弱いし、足手まといなのにも関わらず入り込んでいるという事は、彼が何らかの繋がりのある人物に捻じ込まれたんでしょ？」

ずばりと言いくらい事を事も無げに言っ、彼は仲間を見る。

「言われて悔しいですか？ですが、誰が見たって一目瞭然ですよ。この中では君が穴です。君さえ倒せば突破する穴が開く。一人前みたいな事をほざいているようですが周りは百戦錬磨、所詮井の中の蛙だと己を知りなさい。・・・ディレス。」

「お前、刺客か！」

ディレスを守るように飛び出して言った仲間をひよいひよいと交わしながら彼は答えた。息すら切れてない。

「・・・ではないですよ。大体その子を如何こうしたって何の役に立つんです？この国は世襲制ではないでしょう？実力主義だと聞きましたか？その子の父親が、たとえその子がそう言ったからってそれを汲み取るとは思えませんか？・・・だからこそ、こんな手段に出たんでしょう？ ねえディレス・カルトカール。」

最後の仲間が思いきり蹴られて壁にぶつかってずるずると落ちてゆく。

「宰相カルトカールの一人息子。父に似ず武の方は向きがないようですね。足が震えてますよ、怖いですか？」

長い剣を、先ほどレストランで客に見せていた片刃の剣先を彼の喉元に差し延べて、彼はそう言う。

「・・・っ！」

あっという間だった、次々と仲間は沈んでいった。

彼は一切剣に手を付けず、するりと交わしながら蹴ったり殴ったりしつつ仲間を沈めていった。魔術師の仲間などは、術をぶつけていたがそれをそのまま返されて吹っ飛んだ。

彼が剣に手を掛けたのは今が最初だ。そして切る気は、ないらしい。それは解る。いや最初から、彼に殺気はなかった。

「これ、借りますよ？」

と彼は俺の襟章に触れる。と、仲間の身体が光ったと思ったら、その全員が消えた。

「っなっ！」

「送りましたよ、ええ・・・と、兵舎、ですか？黒い建物の、庭に黄色い花が咲く・・・デスト寄宿舎？」

ああ確かにそこは皆が寝泊まりしている寮だった。ほっと肩の力を抜いて、又はつとする。

「どうやって！」

「その襟章をトレースして、さすがに行った事ない処へは勝手に飛ばせませんか。一回行けば何時でも行けるんですがね。貴方は立场上、彼と共にいないと“首”になるでしょう？ケイソン隊長。

さて、デイレス、代償を払って貰おうか？」

戦場でも震えた事のない身体がブルリと震えた。

右腕以外縛つてますから動けませんよ、と言いながら目の前で胸やけするような甘味を平らげてゆく彼を見ていた。

そうされなくても俺は逃げる気はないが、それは俺にではなくデイレスに言っているようだった。デイレスは肩に入れていた力を抜いた。

「しませんよ。もう煮るなり焼くなりしてください。」

デイレスはそう言っ自分のカップに口を付けた。

「しないよ、そんな美味しくない様な事。それよりコレコレ、美味いよ、ほら！」

と彼はフォークで刺したケーキの一部をデイレスの口に無理やり突っ込む。

“ね？”と言いながら微笑む彼は、さつきから食べ続けてもう4皿目だ。

「“代償”って・・・まさか・・・。」

「うん？支払い。だってデイレス、お金持ちだよな？ゾーイもう一杯いい？」

結構な代金を支払って店を出ると、彼は大きく伸びをした。“ああ美味かった！”と顔に書いてある。

やけっぱちでもなく投げやりでもなく、デイレスはすっかり憑き

物が落ちたような気分でいる様だった。何時も会う度に緊張して強張っていた表情が丸くなっている、がそれは・・・。

「君がね、肩に力が入ってしまうのは解らなくもない、けどね・・・おいで。」

そう言つて彼はデイレスと俺の肩に手を乗せ、と・・・、（うわわわわ・・・！）

急に視界が光り出して、身体が上に引つ張られるような感じがして腹の中身がせりあがってくる感覚。俺の嫌いな転移！

がっくりと地面に膝をついて周りを見れば、そこは王城を遠くに望む丘の上だった。今までいたところからゆうに半日はかかる行程を一気に飛んだ？しかも二人の人間を連れて？詠唱なしで？

（出鱈目だ。）

「うんそれよく言われるよ。まあいいじゃない、これが私だし・・・座つてデイレス、ケイソン。」

「君の父親はね、子供の時から“出来る子”だったんだ。親が気味悪がるほどに、ね。それで結構淋しい思いもした。でもそれ乗り越える力をくれる友人に恵まれて、包んでくれる女性も見つけた。」

語られるのは本人しか知りえない様な詳細な話。

それを何故知っているのか、と突っ込みたくても初めて聞く宰相の子供の頃の哀しい境遇について聞き耳を立ててしまふ。

親に忌避され、施設に預けられてしまった事、その事で虐められた事があったこと。学校に入った時も心優しい貴族の援助があつたものだったが、それをネタにいびられた事。それでもそこで友人を得て、彼は変わつていった事。

「ただ優秀だというだけで？」

デイレスの言葉に彼は首を横に振った。

「違うよ。彼は・・・。」

「それはっ！」

悲惨な過去は知らなくても、彼が“特別”である理由は知っている。俺は思わず話に割り込んでいた。

「ケイソン・フォワーズ。彼は知って受け止めなくてはいけない。守ってやる時期は過ぎたんだよ。彼を成長させるためには話してやった方がいい。解っているだろう？それを誰も出来ないというなら、私がしようというのだ。」

その言葉で黙ってしまった俺をデイレスが穴があくほど見つめた。

「有名な話で、そして誰もが口を噤んだ話です。王自らの緘口令で誰ひとり口にすることはできません。」

「そう、だから私が話そう。私はこの国の人間ではないからね。王の決定に左右されない。……デイークは加護付きだった。それも今はこの世にいない“ガイアス神の加護付き”だったよ。」

19 「お金持ちだよね？」
(後書き)

なかなか進みません・・・。

“ヒトはライオネルから生まれた”
それは、全部が間違いではない伝説だ。

しかしライオネルから生まれたのは“人”ではなく、“知能の高い獣”だった。

世界を創ったガイアスは世界を愛でた。その命全てを愛していた。その中でも、大きな獣に襲われながらも一生懸命に命を繋ぐ小さな獣を愛していた。

それがカルトカール、つまりはカルトカールの祖先の獣であった。肉食の獣に命を狙われながらも、仲間の為に木の実を集めて回るその小さな獣をガイアスは愛でた。その力が注がれるほどに。

やがて注がれた力によって知能を得た獣はコミュニティーを作るようになった。外敵から身を守る術を考え、仲間全体を守りながらも彼は孤独だった。

だって彼は一人だったから。仲間はまだ“匹”だったからだ。そこで彼は人ならざるガイアスに頼んだ。

『皆も同じにしてほしい。』と。
それが始まり。

それが獣人の始まりとなった。
心優しい彼はどんどん仲間を増やしていった。そしてそれは自分たちと同じ獣によらず、全ての獣に向けられた。

その獣が“ライ”。
この国の原初の王。

力が強い、のではなく心が強い王だった。
ただ一人、ガイアスの加護を受けた、知能の高い獣。

ガイアスの加護はほかの精霊王の加護と違い、代々受け継がれた。
(他の精霊王の加護はその人物一代限り。)つまりカルトカールの

子孫は代々ガイアスの加護を受け続けた。デイレスの父、ディークも当然。

ガイアスの加護の内容は、“力”ではなく“知”だった。カルトカール家が宰相の地位に付いたり、学者や神官を多く輩出しているのはそういう意味もある。

悟りを開いているかのような子供だったディークも例外なく賢く聡い子供だった。実の両親が避けてしまうほどに。それでも学校で友人を得、仕事をし、家族を得た。愛しい女性に自分の子が宿った時などの喜びようは今でも友人たちの酒の肴になるほどだ。

「でもね、マリーベルはあまり身体が強くないだろう？ 元々子が望めるほど強くなかったんだ。でも彼女は産む事を強行した。周りが、あんなに喜んだディークさえも“今回は諦めよう”と諭したが彼女は逃げた。墮ろされるのを恐れて、友人を頼り家族の手の届かない場所に。」

そう、この国の王の元へ。夫の友人だった王に縋った。産まれるまで匿って欲しい、と。

王は承諾した。但し居場所は教える、無茶はしない、ディークと話し合つと約束させて。城に勤める皆の知る所となった逃亡劇は、そのまま皆に見守られることになった。その出産まで。

「自分より母親を選んだ父親を怨むかい？」

そう聞くと、複雑そうな顔をしながらも彼は首を横に振った。

「日頃の父親を考えた時そんなことは夢にも思わないかもしれないが、彼は何時も叫んでいた。“自分をそのまま愛してほしい”と。

自分を見てくれない両親に対して。子が親の愛情を求めるのに理由なんかない。だって親なんだから。子なんだから。当たり前前に与えられるはずだったものを奪われた人間の気持ちは誰にも解らない。

それを与えてくれる唯一の人だったんだ、マリーベルは。彼には誰にも代えられない存在だった彼女が、自分のせいで死んでしまうと、彼は半狂乱だったよ、君が産まれる時。」

君が産まれるとき・・・空が紅く染まり出した朝方早く、静寂を切

り裂く君の産声の横でマリールベルの命が消えようとしていたんだ。そう言つと、彼は息を飲んだ。何時も能天気で陽だまりの様な母親が・・・と信じられない気持なのだろう。

「ごめんなさいね」とマリールベルは言った。“貴方を残してゆく事を許してね”とディークに。彼女は知っていた。ディークが望んでいたものを。だからこそ産んであげたかった。

“許さない”とディークは言った。“僕を残してゆくのは許さない”とマリールベルに。

“死ぬる時も一緒だ”と誓つたのにと。

“死ぬる時は一緒だ”と誓つただろうと。そしてディークは捨てたんだよ、君とマリールベルを引き留める為に、愛する者を自分の手に取り戻すために・・・加護を。」

「・・・え？」

ディークはその場にいた皆の目の前で、神に叫んだ。

『我の加護をもつてこの二人を攫って行くな。我の全てを奪って行くな。加護を返す！地位も名誉も金を要らぬ。すべてを返す。だから、だから・・・！』

ディレスの頬には涙が流れていた。

父親の叫びが聞こえてくるようだった。

子供の目から見ても照れるほどに仲が良い両親にそのような過去があつたなどと、想像もしなかった。

「ガイアスはその叫びを聞き入れた。加護を取り上げる代わりに、マリールベルの命を戻した。引きずられていた君の命もね。但し、相手は神だ。代償失くして益は得られない。・・・ディークの右目はその時失われた。」

“代償失くして・・・彼はそう言った。”

神は代償を支払わせる。　けして無償では助けない。　それはこの世界の理だ。

沢山の恩恵を与えられて生活をしている人々に、忘れさせない為の

モノ。神がいる事を。精霊たちがいる事を。この世界は自分たちの為だけのものではない事を。

「・・・その結果將軍職を辞し、カルトカール宰相閣下として、王近くに勤めることになったのです。元々“知”の部分の強い方でしたので、問題なく。但し加護を失い、瞳の色は加護を示す白銀から青色へ。そして王は人々が面白おかしくこの話を広めることを嫌われました。それでその場にいた者、事情を知る者すべてに誓約書を書かせ緘口令を布かれました。『一切の口外無用。守れぬ者には死を。我の手によって必ず与える』と。」

ポツンとケイソンは言い、これも当て嵌まりますかね、と笑った。
「デイクがお前に“好きな道を進みなさい”と言ったのは、何もお前に期待していないからではなく、見捨てた訳でもなく・・・好きに生きさせたかったからだ。お前に武将としての才がなかった時デイクは喜んだんだよ。少なくとも戦で死ぬ事はない、と。軍部に聞かれてもしたら叩かれようが、デイクはお前を愛している。ただ、下手なんだよ、自分が愛情を注がれて育ってない為にどう表現したらいいのか解らないんだ。それをお前に解れというのも以前ならば無理だろうが、今なら汲み取れるだろう？お前は恵まれているんだ、そして愛されている。」

泣いている頬をペシペシと叩く。
(しっかりしやがれ。)と気持ちを込めて。

ガイアスの加護はガイアスに返された。今世界にガイアスの加護を持つ者はいない。ガイアスはもう人に加護を与えることはない。

もうガイアスは独りではないからだ。精霊王たちがいて、そして私がいる。けしてガイアスを独りにはしないから。

世界でたった独りで獣を愛でていた大昔とは違うから。

「好きに生きてらいいんだ。お前は“武”が立たなくとも“知”は立つ。加護を失っても尚カルトカールの血は落ちてはいない。・・・
・なんて話を私にさせたんだ、代償を払って貰わないとな。」

「は？」

二人のぽけつとした顔を見てにやりと笑った。
「ケイソン、また飛ぶぞ。今度は墜ちるかもな。」

ガタリ・・・と音がして振り返ると、ケイソン隊長が転がっていた。

「あーあ、やっぱ駄目だったな。大丈夫か？ディレス。」

「はい、私は平気です。彼は特別駄目らしいんですよ。」

「そんなんでよく隊長が務まるな。・・・大丈夫なのか街の警邏は。」

いきなり現れた自分の息子に、ディークが叫んだ。

「ディレス！一体・・・彼は？いや、ケイソンは？」

「ケイソンは気絶だ、飛んだからな。ディレスは大丈夫だと今言っただろ？・・・ディーク・カルトカール宰相閣下。代償を払って貰おうか？」

（おそらく笑った、というか微笑んだ、のだろうな。）

話していた時とは少しだけ表情が動いた。それを眺めながらデスクに肘をついたまま様子を覗っていた。

茶の髪に青い瞳。この世界ではありふれた色だ。

細い体躯に長い手足。年齢的には10代半ばか、人間だからもう少し上、くらいか。異様に肌が白い。

「“代償”？・・・君は一体何を・・・。」

「私に監視を付けたろう？まあこいつらだが・・・。残念だったな、レストランから知っていた。態とらしく人まで使って話しかけさせてご苦労な事だ。怪しいと踏んだか面白いと踏んだか知らんが・・・こっちはせつかくの街見学を邪魔されて立腹中だ。ディレスにおやつを奢ってもらったから、少しはましになったが。」

「少し、ですか？ あれで。」

横でディレスが呆れたような表情をしている。

「甘味は脳を活性化させるんだ。お前はもう少し採った方がいいぞ。筋肉馬鹿では仕事は務まらない。」

（おや？）

ディレスの表情が以前と違う事に気が付く。以前は何かに押しつぶされそうな顔をしていたのに、今はどうだ。全くそれがないばかりか晴れやかな表情だ。どこかひきつった感じだった笑顔が普通に笑えている。

肩の力が抜けたというのが一番合っているか。

「ディレス、こちらへ。君はどうやってここに、いや何故ここに？」父親の様子がおかしい事に気が付いたディレスは、父親が何を疑っているのか解ったようにその侵入者の前に立つ。

「父上、彼は怪しい者ではありません！」

（いや怪しいだろう？十分に。）

「質問に答えようか？ ここに来た手段だが、“飛んで”来た。二人を巻きこんでな。何故来たかは、さっき言った。」

「“代償”ですか？一体……。」

「……お前の全てを代わりに語ったからだ。こいつが受け止め、成長するために必要な試練として。お前たちは過保護すぎる。子はそれほどか弱い者ではない。」

「全て？ まさか……。」

「お前が妻と子を助けるために、最大の加護を失くした事だ。世界唯一の加護をな。お前はその事を知ればこの子が自分を責めるとでも思ったのだろうか、知る事はこの子の糧となる。それほどまでに愛してくれていると思う事がこの子の力となる。間違えるな。守るばかりでは意味がない。親バカはいいが馬鹿親になるな。」

「父上。俺・私は、貴方と同じような文官になります。なるよう努力します。それで全てを報いる事が出来るとは思っていませんが、

それでも。」

「デイレス。」

感動の親子、はいいが……。

「“代償”とは、なんだ？」

問いかけに侵入者は初めて俺を見た。

神々しい、青。

「良く食べるな。」

何人分になるのか、平らげた皿は次々と侍女が運んでいくので解らないが。

侵入者……零と名乗ったその人物は、甘いものばかりを一息食べると、フォークを置いた。

「ごちそうさまでした。」

食べたそれらの代金を全てデイクに付ける、というのが代償らしい。確かに王宮お抱えの職人の手によるものだから、大した金額にはなるがそれでも安い代償ではないか。

「零。お前は何者だ？ あんな転移術など聞いた事もない。それに父が緘口令を敷いた21年前の詳細を何故お前が知っている。その頃生きてはいないだろう？」

複雑そうな顔をしつつも美味しそうにゾーイを飲んでいる零に言う
と、

「そうだね。でも知っている。皆は語れないとケイソンが言うから私が話した。私はどこにも属さない、旅人だからね。」

先程より砕けた口調ながら、その存在感は変わらない。

「ではその旅人が無礼だろう？王に対するその口調は！」

堪り兼ねたように、部屋付きの騎士が今にも剣を抜きそうな勢いで言う。

「お前たちが王に敬意を払うのは、“お前たちの王”だからだろうか？“私の”ではない。私は人によって態度を変えたりはしない。自分より小さく、幼く弱そうに見える、から私に対して強く出るお前

たちとは違う。貴族だとか、人だとか獣人だとか、そんなモノは私には関係ない。王も民衆も男も女も、私にとっては皆同じだ。親の威を借りて威張るのはよした方がいいよ、ロジャー・ウィルソン。お前がその地位にいるのは、実力ではなく親の力だと知っているか？ 私から見ればケイソンの方がよっぽど強い。その飾りの剣で私に傷一つ負わせることなど出来ない。」

（煽ってやがる。）

真っ赤な顔をしてロジャーが剣を抜いた。

叫びかけたデイークを一睨みで黙らせる。

ここは王の間だ。本来ならば抜刀はご法度。重い罪を受けることになる。

「その剣は何のために抜いた？王の為か？自分のプライドの為か？すつと音もなく零が立ち上がる。その時、ちらりと俺を見た。

その瞳が“いいのか？”と囁いているような気がした。何が“いいのか？”なのか、俺には解り、そして零も解っていると感じた。くつと口の端だけで零は笑いすーつとその瞳を細めると、腰の下げた剣を抜く。

「では私は、お前のその小さなプライドの為に傷つけられた者たちの為に剣を抜こう。」

あつという間だった。最初は剣がかち合い、力負けするのではないか、と思ったが、それも振りだったらしく零は剣を流してロジャーの剣を交わすと、そのまま懐に入り込んでいきなり膝蹴りを喰らわせた。

沈み込んだロジャーの身体をドンと突き飛ばし尻餅をつかせると、剣を肩に担いだ。

「お前が馬鹿にする下級騎士にも劣る。」
バツサリとまた煽る。

ロジャーは歯ぎしりをしながら立ち上がり、猛然と剣を振り回した。それをひよひよいと交わして、瞬間剣が合わさった時にはもう口

ジャーの剣は宙を舞っていた。

「……っあ！……な……。」

大人と子供くらいの差がある身長差を物ともしないで、零はロジャーをその珍しい剣で壁際まで追いつめた。そして“ガスッ！”という音で、零の剣はロジャーの顔のすぐ横の壁に突き刺さり、ロジャーはまるで貼り付けの猫のようになっていた。

「遅いし軽い。鍛錬が足らん。所詮飾りの兵だ、といわれる訳はこれか？ 税金の無駄遣いだろう。ダグラス。」

「そう言うな。箔の為にも飾りはいる。対国相手にはな。」

剣をしまいながらこちらを向いて歩いて来る零の背後に襲いかかる影があった。

叫びそうになる声を殺した時、流れる様な所作でその影を交わした零は、そのままその腕を掴んで、思いっきり投げた。

「卑怯だ！」

投げられたロジャーはそう叫んで上体だけ起き上がった。

「戦場に卑怯などない。そんなところが甘いんだ。他の剣士たちが戦場で命を削っている頃、女の尻ばかりを追いかけているからそんなんだ。金と親の力で女に言う事をきかせるのは卑怯なことではないのか？」

「……。」

ぐうっとロジャーは黙り込んだ。

と、呪が飛んだ。

零に目掛けて放たれたそれは、殺傷能力の高いものだった。

「それで終わりか？ 私にそれが通用するとも思っただか？ クラウド。」

呪は零にかかるどころか、零の結界に弾かれた。きらきらと七色の結界が見える。

(…….)

零が指をくいっと曲げると、物陰から宮廷魔術師のクラウドがまるで引っ張られる様に引きずり出された。

「馬鹿な弟ほど可愛いか？ 兄弟そろって本当に馬鹿だな。」

「そんな、わたしの・・・。」

二人が宙に浮いてゆく。零の視線に添って宙に浮かんで吊るされている。

「お前の術か？ まあまあだな。しかし私には通用しないよ。どんな術でもね、誰の術でも、だ。相手の力量すら測れない馬鹿な部下はいらないだろう？ ダグラス。」

「まあそう虐めてくれるな。コレでもいるんだよ。今から鍛え上げようと思っていたんだ。もう少しはましになるだろう？ 零。」

“零”と呼ぶ名に力を込める。

「・・・無駄だって。まあいいや。壁の修理代はロジャーの給料から差し引いてね。」

こっちもかわされた。

20 「いや怪しいだろう?十分」(後書き)

ファーストネームだけ。ダグラスくんです。

21 「高くつくぞ。」

「何故この国に来た？」

ライ王が拓いた国、ライオネル。

獣人の国として大陸一の広さと強さを誇る国。

その王の執務室で皿に盛ってあるケーキを平らげたあと、出て行くとしたら……。

「何故？」って……森を歩いていたらたまたま子供の叫び声が聞こえて……魔獣を倒したら“売れば？”って付いて来たんだよ。元々はコンドルト側の森にいたんだ。」

ダグラスに聞かれ、そう答えた。コンドルトで街見学をしていたんだ、と。(嘘じゃないよね？したから。まあその前に色々あったし、後にも色々あったけど。)

その色々の部分を話すと面倒なことになるし……面倒事はいやだよね。

……と思ってたんだけど！ 無駄でした……結果的には。

「見学“だけ”ではないよな？……ロイズ、入れ。」

その言葉と共に入ってきた人物によつて、ぶち壊しでした。

最初、呼ばれた事に心当たりがないという風な顔をして入ってきた人物は、こつちを見るなりビシーッと背筋が伸び、最敬礼か！と突っ込みたくなるほどに緊張を隠しもせず、よりもよつて名前ではなく、

「愛し子様！ またお会いできて光栄です。」

と、これまたどこのお伽話だ、という様に片膝を床について頭を下げた。

「ロイズウ……“零”だと言つたろ？言つたよな？ その名で呼ぶなと言つたよな？」

「はっ！はい、そうでした、申し訳ありません、零様。」

(遅いよ……台無しだよ。私は水戸○門みたいに人に混ざって旅

したかったのに。それともワザとか、ワザとなのか？)

がつくりと力が抜けて机に項垂れる私に可笑しそうな含み笑いと、驚愕の声が届く。

「本当ですか？」

「零が愛し子？」

「え？あ・・・ええ？」

の驚愕の声の出所はディークとディレス、それにケイオス。そして含み笑いは喰えない王様。喧嘩を売ったに等しい二人に至っては、もうただ震えている。

(別にこれ以上何かする訳でなし、黙って出て行こうとしていたのに。)

「ダグ！ 知っててやったろう？」

「偶然だったんだ。ロイズがコンドルト入りをしていたのは、ただ友人を助けたいからだだったし、今回もたまたま帰国したから、もしかしたら何か知っているかと聞いてみた。」

(それは精霊を通じて、という事か・・・。)

精霊ならば、そりゃ話すだろう。コンドルトで会った“零”なる人物が自分たちの王の兄弟であると、愛し子であると。証拠にロイズの精霊はニコニコしてまた会えた喜びだけを前面に出しているし、ダグラスに付いているのは恭しく頭を下げている。

・・・ミラ、頭を上げよ。せつかくお前が黙っていてくれたものを台無しにしてすまないな。お前の相棒は全く喰えない奴だよ。

精霊語でそう言えば、ダグラス付きの精霊が困った顔で頭を上げる。そして一步前で進み出て、私の手を取るとその甲に口づけた。

御子様。どうかお怒りになりませんよう。この者は悪気があった訳ではなく、ただ興味があつたのだと思います。けして御子様を悪いようには・・・。

毒舌の精霊を付けた、とユファは言っていたがなかなかの美形だし、態度は花マルだ。

うん、解ってるよ。怒ってないから安心して。それに悪い様にさ

れたら暴れるまでだ。お前たちには迷惑だろうがね。まあそういう事もあるまい？この国は今安定しているし。

「ミラと話しているのか？ミラは何と？」

と言うダグラスに、

「お前が悪い奴ではないから怒るな、と心配しているよ。全く、ミラにまで頭を下げさせて・・・お前は何を望んでいる？ダグラス。」
威圧感を上げてそう聞くと、ディレスやロジャーはふらつく。

「その前に、ロジャーとクラウドには躰が必要だな・・・我に喧嘩を売ったろう？高くつくぞ。」

くるりと二人を振り返ると、もうすでに気絶寸前と言った顔をしていた。

敵う筈のない戦いをしている。身体はその翌日どころかその瞬間からギシギシと悲鳴を上げているというのに、やめられない。

「ダン！そこだ・・・遅い！」

ガシャ・・・ン。

剣が宙を舞って地面に落ちる。

相手は息一つ切らしてないどころか上がってもいない。汗など一つも掻いてない。

遙かに小さな身体をしているにも拘らず、その存在感は他を圧倒する。

（愛し子。）

3日前、王の執務室に現れたその人物をそう紹介された時は、皆我が目を疑った。

“神の愛し子が現れた”と言う話は聞いていたが、もっと、こう・・・
・敵ついでというか、人離れをしている者と思っていた。

(確かに人離れはしているが・・・強すぎる。)

しかもこれでも術など一切使っていないと言う。

一度術師が術で訓練を、と言ったらしいが、却下されたらしい。理由が、

『加減が難しいから、死んでもいいか？ 最悪、お前だけでは済まないかもだが・・・。』

と真顔で返されたと言う。

それが本当かどうかは解らないが、防御や転移などは平気らしい。いざ攻撃、というとき精霊王たち相手にしかしたことがないから、人間相手にどれほど影響があるか解らないと言う。

獣人は精霊付きが多い。それは最初に愛された種族だからというので、彼が訓練という名のシゴキをしていると、兵士の中で加護付きのやつらは、まず最初に彼に深く首を垂れる、しかも膝付きで彼らに付いている精霊の影響で、彼の本来の姿が垣間見えると言う。

「漆黒の髪と瞳だと言うのは本当ですか？」

もう立っていられなくて、木の下に座り込んでいる俺は、横にやってきた零様にそう聞いた。

「ああ・・・あっちゃあ・・・まずいのがやってきた。」

彼の視線を手繰ると、神官が慌てた様子でこちらへ走って来ていた。

ライオネル神殿の神官 トマス・バンガルド。

獣人にしては小さめな彼は、小さい頃の怪我が元で、片足が少し動きが悪い。ひよこひよことした独特の小走りで零様の元までやってくると、地面に土下座する勢いでその場にひれ伏した。

その場にいた兵士たちは何事かと周りを遠巻きにするように見つめている。

「最初に、我が国にお越しだとは・・・。」

「・・・ダグか・・・。」

あいつめ・・・と肩を竦める。どうやら神殿に使いを出したのは王らしい。

「はい、今朝報告を受けまして……。遅くなり申し訳ございません。」

「いい。元々街にいるはずだったのが予定が狂ったせいだな。ユファにもミラにも頼まれてしまったから、仕方あるまい。迷惑を掛けるな。」

立つように促す零様に、神官はやつと膝を伸ばす。

「いと……。」

「“零”だ。言ったらろう？」

「はい、零様。あの……クラウドの事ですが……。」

「ならん。あれの罪はロジャーより重い。」

「ですが、あのままでは……。」

魔術部隊のクラウドが弟とともに罪を受けて神殿預かりになっているのは、皆知っている。弟のロジャーはこの訓練にも参加していてそこにいるがクラウドは一切神殿に入ったつきり出てこない状態だった。話を聞いて皆の中からロジャーが進み出てくる。

「零様、兄が何か？……いえ、あの……。」

近衛の隊長である俺の前で話しかけたのがいけないかと思ったのか、一歩下がるロジャーに、

「いい。兄弟なのだ、気にもなるう。零様？」

俺もそう促すと、零様はロジャーを冷たい瞳で見ながら言った。

「知ってどうなるものでもないと思うがな。神殿に預けられているクラウドは、我が造った結界の中にいる。その中で罰を与えている。」

ただそれだけを言うと、トマス神官を見る。

「それを重すぎる、と文句を言いに来たか？ お前はそれがどういう事が解っていつているのか？ 同級生を助けたい気持ちは解らないでもないがだからと言ってあ奴を特別扱いはせん。我には人は等しく平等であり、あ奴が別段特別な訳でもない。精霊付きでもないしな。」

突き放した言い方に、トマス神官は喰い下がる。

「ですが、解っておりますが……。あいつのしたことは許されることではない事は……。ですが、あのままではっ……。！」

「兄がどうしたのです？」

叫んだロジャーに零様が向き直る。

「お前の罪は罪として人として裁かれればよい。しかしお前の兄は魔術師だ。ただ人ではない。家柄も才能も考慮に入れられる事はない。魔術師として裁かれる。お前は知らなかったか？ 魔術師が罪を犯した時、どれほどの責め苦を負うのか？ 知っていたか？

魔術師の罪の裁きは人より重い、ほぼ正常で戻ってくる奴などおらん。そしてその存在は抹消されるし、転生も叶わん。死した後も罪が消えることはない。これは魔術師が誕生した昔から一貫して変わらぬ事だ。つまりは父が決めたことだ。それを我が変える事は出来ん。大方その姿を見かねた父親にでも泣きつかれたのだから？ ……ロジャー、神殿へ行け。兄を見て己の罪の深さを思い知るがいい。トマス。」

「はい。」

目の前に立つ己よりも背の高い神官に、零様は向き直る。

静かな瞳の輝きだった。

ただそつと諭すような。

「人の痛みを己の痛みとして受け止めるお前は正しい神官だろう。

が、ならば彼らではなく、彼らに被害を受けた者たちに寄り添え。

泣きつく場所もなく訴える手段もなく、泣き寝入りするしかなかった彼らこそ、寄り添うべき相手だろう？ 間違うな、見えるモノだけが全てだと思つな。お前は神官だ。お前もまたただ人に非ず。

父たちは常に見ている。お前たちを、皆を守るために、そして罰する為に。忘れるな、神の加護はけして優しいものではないという事を。恵みが安らぎが、そして困難が災害が、全てが神の意志であり加護であると知れ。お前たちの為に世界や神が“ある”のではない。」

項垂れて帰るトマス神官の後姿を見送って俺はそつと呟いてみた。

「やめて、しまうつてことは・・・？」

「“ない”。トマスはそれほど弱くない。」

「クラウドは？」

「見に行けばよかるう？ダン。お前の下だろう？魔術部隊は。但し楽しいものじゃないぞ。・・・その魔術師たちよ、お前たちも見ておけ。そしてお前たちの力は決して己の為に使うべきものではないと知れ。誓約の言葉に嘘偽りはなく、正しく罰せられる事を知れ。己の力に酔い、己の利益の為に力を行使した末路は例外なくそうであると覚悟しろ。それだけの力を得ている事を恐れる。お前たちは常に精霊に見張られている事を知れ。彼らは嘘偽りを嫌う。誤魔化される事も逃げられる事もないと知れ。」

零様がそう言った途端、魔術師たちが消えた。

神殿へ送った、と零様は言っつてその場から消えた。

人と違つ、特別な力を持った、いや持たされた者には、それなりの枷が付いて回る。

神官然り、加護付き然り。そして加護付きではない魔術師も同じこと。

加護付きとは違い、力はそれほど大きくもないが、それでも一般人とは違う。特別な力である事は違いない。それを行使する上で必ず神殿において誓約を誓うことが義務付けられている。

- 一つ 私は、この力を正しく行使するものなり。
- 一つ 私は私利私欲の為にこの力は行使しないものなり。
- 一つ 私はこの力を皆の幸せの為に使うものなり。
- 一つ もしこの誓いと破りし時は、神の名のもとに罰を受けるも

のなり。

一つ その罰とは、己の力によって不幸になった者たちのその不幸を全て己が背負う事なり。

これらを私と神の名において守ってゆく事を神と世界に誓う。

「名が光るだろう？署名した時。あれで神に認識される。まあたとえ神殿で誓わない者がいたとしても、その存在は神の知るところになるのだがな。」

力を使った時点で・・・と言うと、扉を開けて入ってきた零が言葉を添えた。

「違う。生まれた時点、だ。力を持つ者が生まれると世界が知らせる。何故か解るか？」

（あ！ それ俺のゾーイなんだが・・・。）

デスクの上のゾーイをグーツと飲み干した零は、おかわり、と侍女にカップを差し出した。

（いいけどさ・・・まだ飲んでなかったんだけどなあ。）

困ったというか微笑ましい、といった感じで零と俺を見ていた侍女が返事をしてゾーイを入れる為に部屋の隅にある簡易の水場へと入っていった。

「いや。」

「精霊が好むからだ。あの子たちは力を好む。人間には視えないし感じないだろうが、力には色と香りがあるんだ。力の弱い精霊や生まれたばかりの精霊たちは己の好きな香りに寄って行ってしまふ。」

加護付きと違うのはその点だ。加護付きは精霊王たちが選りすぐりの力のある精霊を選んで付けるが、魔術師たちに寄ってゆくのはそれにも入らない力の弱い子たちだ。彼らは加護付きの精霊たちのように加護付きの人間の善行によって成長する事もなくただ漂っているだけで大した力もないが、それでも精霊だ、力を間違った方に使えば彼らは傷つき穢れてゆく。」

つまりは死ぬんだ、と零は言う。可愛い我が子が死んでゆくのを

精霊王たちが許すと思うか？ と。

だからこそ“枷”だと。

普通に暮らして皆の為に使いさえすれば、何一つ変わる事なく死ぬまで暮らせるが、一旦タガが外れるとそれは己の首を絞める力へと変化する。

「・・・レーヴェに会ったろう？愛し子様。」

「何だ、気になるの？可愛い甥っ子だもんね。」

また急に調子が変わる。どうやら愛し子モードと普段モードで言葉が違う様に、少し表情というか感じが違う。

普段モードは限りなく人に近い。

（無表情だがな。）

「かわいいかあ？あんま歳変わんない甥っ子なんぞ、兄弟と一緒にだ。」

そう言うと、真ん丸に瞳を見開いた。

そうすると、途端に幼く見えるし、綺麗な瞳がよく見える。

零は執務室に入ってくる時だけは漆黒の本来の髪と瞳に戻るようになった。扉を潜りながら変ってゆくのは、最近の俺の密かな楽しみだ。

茶が漆黒に、青が黒曜石に。

「お前、幾つだ？」

（あ・・・嫌な予感がするぞ。）

「26だが。ちなみにレーヴェはあれでも24だぞ。うちは姉と俺がかなり離れているんだ。」

「にじゅう・・・6？ 24？・・・てか、それで独身って・・・かなり遊んでんだな、ダグ。」

ガタンと付いていた肘が落ちた。

「ちつがあゝう！ モテ過ぎで決めランねえだけだ！」

21 「高くつくぞ。」（後書き）

零がどんどん自由人に……。書きながら話が出来上がってゆくので、先が自分で読めません。

22 「何でこつなる！」

姉の子だとダグラスは言い、

「零。」

「ん？」

「お前も加護を与えることは出来るのか？」

（来た！）

聞かれると思ったんだよなあ。ほんと勘がいいなこの人。

「リーヴェに、か？ お前ホント解つてて聞くから性質が悪い。・

・与えたが？」

言うなり、ダグラスが机につぶつ潰した。

（何で？）

ヤキモチ、ではないかと。

は？

ミラの言葉に呆気にとられる。

だってユファの加護を貰っているから、私の加護などいらねいだろ
うし、加護は元々一つしかもらえないモノだ。

一人の人物が複数の精霊の加護を貰うという事は、ない。それが理
だ。

いえ、そうではなく・・・こ奴は、どうも御子様に興味があるら
しく・・・。

言い難そうな感じでミラは言い、ダグラスを覗う。

（興味・・・って・・・まあ変つてる存在らしいから興味を持って
見られるのは、もう慣れたけど？）

・・・そう、ですか。

何ですか、その残念そうな子を見る目は。

ミラさん？ちよいと？

「零。」

「ん？」

「“零”。」

「ダグラス、無駄だ。言霊は私には通用しない。何かあるのなら、ちゃんと話せ。私を縛る事は許さない。」

ソファに座って、執務デスクに両肘をついているダグラスを見上げる。

「うん、わるい・・・ごめん、なさい・・・でも、うん・・・。」

(ウガア〜 イライラする!)

「はつきりしろ、王なら!」

「何でこうなる!」

与えられた居室で、等身大の鏡の前で、零は叫び声を上げていた。

「似合うな。」

「・・・じゃない!」

キツツという感じで今にも髪をぐしゃぐしゃにしそうな勢いの零の手を取って扉へと向かう。

「時間だ。よろしく頼むぞ。」

「仕方ない。が、口調をかえる事まではしない。私は“おほほ”とか“ですわねえ”などと話しているのは自分で気持ち悪い。」

「いい。そのまま。名は・・・。」

「“テリアス”。いい名だろ?」

“テリアス”・・・“謎”という意味を持つ言葉。そしてもう一つは“至宝”。確かに神の愛し子は“至宝”だ。

にやりと言った言葉がぴったりの笑みを浮かべて零は俺の掌に載せた手をするりと抜き、どうするのかと見ていると俺の曲げさせた肘に腕を絡めた。

“この方が歩きやすい”と言って。

廊下に出ると、近衛隊長のダンと副官のルーカスが立っていた。一礼を済まして顔を上げる二人は零を見て固まる。

「言っな。何も言っなよ二人とも。私が一番思っている事なんだ。」
先を制するように零が無表情のままそう言っつと、

「な、にを、ですか？」

やっとそれだけを口から滑り落としたダンが聞く。

「似合わん。・・・女装することになるうとは・・・これではお願いではなく、罰ゲームだ。」

横でスカートの裾を持ちあげていた侍女のマジがふつと微笑んだのが解った。

「いえ！・・・いえ、あのとても美しいと思えますが。見間違えました。」

ダンとルーカスが口々に言うのを、零はきりきりと眉を吊り上げて制する。

「言っな、蹴るぞ。」

一見黒一色に見えるドレスは、その実全体に銀糸で刺しゅうを施してありふわりと広がるデザインではなく身体に添うようなタイトなデザインで仕上がっている。片足は腿の辺りまで切れ込みが入り、歩きたびに真っ白い肌が目に痛いほどに眩しい。恐ろしいほどに尖ったヒールは高さかどれほどなのか、180代の零が190は超えているようだった。

「歩きにくくはないか？」

「大丈夫だ。久しぶりだからな、ちょっとコツを思い出すのに苦労したが。」

「は？」

「いや、それよりもお前は意中の人物はいないのか？王たるもの・・・。」

と説教が始まりそんな雰囲気だった。

「とはいえ、世襲制ではないからな。そうそう煩くも言われんし、

どうしても後継ぎがいるという事もあるまい。」

「・・・まあ、そうだが・・・。お前の子ならそれ相当に強そうなんだがな。」

胸辺りぎりぎりまで出ているデザインに、胸元には銀の鎖で宝石が施されたネックレス。細く美しい鎖骨が曝されている。肩も半分出ていてそれは背中までつながっていてそこも大きく切れ込んでいた。長い黒髪は緩く態と散らしたようにして纏め上げてあり、今日は黒いままだ。しかし瞳は白銀。これは俺とドレスに合わせてくれたのだろう。

「生んでくれるのか？」

つい悪戯心でそう言ってみると、

「子供は好きだが・・・大体生めるのか？ 人とは違うんだぞ。」意識しているのかどうなのか、零はそう零した。

それはごく小さな声で、本人は意識せずに出た言葉。もちろん周囲の人間には聞こえないよう遮断したが。

改めて零を見た。

その肌、その腰を・・・。美しい瞳や髪は。その柔らかそうな膨らみは・・・。

（女か？）

「何だ？じろじろ見て気持ち悪い。」

いつもの調子に戻って零が俺に視線を向ける。

（悟られてはならない。ミラ）

心の声に蓋をする。

「緊張はしておらんか？」

全然関係ない事を言って広間の扉の前に立った。

（愛し子は女。零は、女性。）

「うっわあ・・・壮観だな。」

と言った零の言葉がどういう意味なのか聞いてみると、

「絢爛豪華。これでもかっ！て着飾った女と鼻が曲がりそうなほど

の香水の匂い。獣人は鼻がいいはずだろう？大丈夫なのか？」
だど。何とも色気のない言葉ではあるが、同意してしまう。俺が何時も思ってる事だからだ。

「皆誰かの目に留まることを期待しているんだ。来てるのは社交界にデビューしたての子供とか相手探しの男女ばかりだからな。これに晒されて標的にされてる俺たちの身にもなってみる。辟易する。」
俺がそう言うのと後ろに付き従うダンやルーカスも肯いている。

「ふくん・・・あ！でもルーカスは相手が決まってるだろ？」

「・・・は？」

3人の声が重なったが、微妙に意味合いが違った。

「あれ？言っちゃだめだったか？・・・ああ、悪い！・・・でもいいじゃん、認めてやれよ、ダン。」

それじゃ言ってるも同じだ。そこまで言われちゃ、相手がダンの姉だと解ってしまう。軽く零を睨む。

「きさまっ！」

「いや、あの隊長、え〜と・・・」

救いを求める様な表情に零が割って入る。

「ダン、死はいつも隣にある。それは誰にだって訪れるもので避けられないものだ。そしてそれはいつ訪れるかヒトには解らない。お前たちが約200年という生を長いと感じているのか短いと思ってるのかは知らないが、確実にやってくる別れの時に、後悔だけは残してはならない。ああすればよかった、とかこうしたらよかった、とか。その時思っても遅いんだよ。だったらマリアの好きにさせてやれ。」

ダンの姉マリアは、2年前夫を亡くした。結婚して半年だった。理由は隣のコンドルトの内戦だった。彼の両親がコンドルトに旅行へ行って取り残されてしまった為に救出に行ったのだ。その結果、皆死亡した。近衛ではないが、兵士だった夫の死に、マリアはシヨックを受け塞ぎこんだ。

それをずっと慰めていたのはルーカスだった。ダンたちとルーカス

は幼馴染で小さい頃よりの知り合いだ。その関わりの2年間で二人の間に愛情が芽生えたとしたって不思議ではない。

しかし、ダンは今もう兵などの仕事に付いている男に大切な姉を嫁がせるのを反対していた。また同じように悲しむ姉を見たくなかったのだ。だから2人は言い出せず今まで来ている。

「れ……。」

言いかけた名を飲み込むダンに、俺も言葉を添える。

「亡くなった両親の分も自分が姉を守っていかなければ、と思うお前の気持ちは解る。だったら、マリアが望むようにしてやれ。マリアは好きだ。あれに子を持つ喜びを与えてやれ。」

マリアは貴族の子息子女を教育する学園で教師をしている。

「王……。」

「お前が必要でないと云っているのではない。勘違いするなよ？ ルーカスにとつてお前は大切な友人であり同僚であり、信頼できる上司だ。マリアにとつては愛すべき弟で頼りになる弟であり兄であり、と言った存在なんだ。2人とも、お前に賛成してほしいんだよ。待っているのが嫌な訳ではない、認められないのが悲しいだけだ。それでも待てるのはお互いに愛し合っているからだし、2人にとつてお前が大切だからだよ。」

穏やかな、優しいといえる声で零はいい、ダンを見上げる。

「私は……反対している訳では……。ただ……。」

「“淋しい”んだろう？自分が独り取り残される気がして。」

馬

鹿だなあ。」

と言った零の表情は美しかったが、ちよつと寒気がした。何をする気なのかと思いきや、

「取り残されなければいいだけだ。ほれ！ 行け！！」

呆気に取られている俺たちの目の前で、ダンの背を思いつきり押し、獲物を待つ婦女子の獣の中に放りこんだ。にっこりと笑いながら。

（（鬼！！））

「お嬢様方、ダン・ナツシユクロウは意外と甘えたがりだ。よろし

く頼むよぉ〜！」
そんな言葉まで添えて。

ダンを餌食に、零の腰を捉えて中央へと進む。
俺たちの登場で静まり返った会場の中、少しずつざわめきが広がっていった。

（誰だ？）

（初めてだろう？王が同伴など・・・。）

（あの黒髪。見事な・・・。）

（王とお揃いですな。瞳が。）

ざわつく中、始まりの一言を俺が告げる。それは決まりだから仕方ない。

「皆よく集まった。今夜はゆるりと寛いでくれ。」
言って初めに開始の合図として踊らなければならぬ。それは零にも言っていた。踊れるか？と聞くと、マジと目の前で踊らされた。一度見ればおそらく出来るというから踊って見せたのだが、実際どうなのかは“本番までのお楽しみだ”とはぐらかされて見えていない。

「お手前拝見、だ。」

俺が言つと、

「とくとご覧あれ。」

零はそう返して俺が差し出した掌に添えた。

流れる様な音楽の中、零の背に手を添えてゆっくりと一步を出す。それに零はぴったりと添って来て、添えている手に縋るような感じはなく、それよりもぎゅっと握っていないと逆に手を離れて消えてしまうような感じさえあった。

「ダゲ？」

救いあげる様な瞳は、嘘でも今は俺と同じ色。回転に合わせて髪がふわりと広がる。花の香りがする。

「何か付けているのか？」

「いや、元々香水の類は好かん。」

足を出す度に、切れ込みの入った服からは零の白い足が曝される。それに会場の男たちの視線が釘付けになっているのが解る。

ああ。

「わかった。」

俺の声と零の声が重なった。

踊りながら気配を窺がっていると、零がふつと握った手に力を込めて俺を見、視線で促してくるから顔を近づけた。

「わたしに……。」

「いや、お前は俺の後ろに引っ込んでいる。」

「お前、王だろう？前線に立ってどうする。」

「俺にはいつもの事だ。」

顔を近づけて話していると何時の間にか音楽が消え、先ほどとは違うざわめきが広がっていた。

足を止めて周囲を見ると、ぐるりと囲まれている。

(5,6人か。様子見だな。)

そう判断して零へ腕を伸ばしてその細い首を捉えて抱きよせる。後ろへ庇う事は囲まれている為余計に危険だからだ。抱き込んでしまえばその方がいい。

【結界発動・半径50ドーム状に。内側へ40。……魂 魄】

解らない言葉を発する零の目の前の空間に二つの光るものが出現した。

「ダグラスを守れ。」

「……ツテリ……」

零と言いかけたのを飲み込んでやっとそれだけを口に出すと、くるりと振り返ってにっこり笑う。

「ご要望は？」

「この中で一番事情を知っていそうな奴を独り。あとはいらん。」
俺の言葉に刺客たちの表情が変わった。

真っ黒い方が、俺の横に立つ。

「お前は？」

「んっ…守護獣ってどこ？この世界で言うならな。俺は魂。あつちで零の後ろに立っているのは魄。俺ら是对の獣だ。」

「守らなくてもいい。」

「うん、まあ俺たちもそう思うがな、ほれ、見ろよ。零ったら嬉しそうだろ？邪魔すんなよ。後から怒られるぞ。」

肩を竦めて言う魂に、その尻尾と耳のせいか親しみを感じる。

「さあ、かかっておいで？ 誰から来る？」

そう言っで一歩前に出ると、子供に馬鹿にされたと思ったのか一人が斬りかかってきた。それを交わして空中に手を翳す。すると部屋に置いてきた刀がしっかりと握られた。鞘から外すと嬉しそうに輝いている。

どうも私が扱うと意識というか生命というか、が生まれるらしくこの子も意識を持っているようだ。
だから……。

「緑青丸。よろしくたのむよ。」

22 「何で」になる!」（後書き）

バレちゃいましたよ。

23 「生命の芽」

かかってこいといった女は、まだ俺たちの胸のあたりまでしかない身長で、でも何故か威風堂々として仁王立ちしている。大人の男たち、しかも手に剣を持つ俺たちの前に、己の身長ほどある剣をどこからか取り出した。

黒髪に銀の瞳。

一人が斬りかかっていったのを何なく交わし・・・

(え?)

両サイドから女に向けて、というか王目掛けて放たれた術に女が当たりに行った、ように見えた。会場のざわめきの中“馬鹿が”と呟いた仲間の声と、それを否定するような彼女の声。

「こんなものか？ では私の方からいくぞ。」

ぶつかり合った術で靄が掛っていたようになっていた中から女の声が聞こえ、急に圧力が増した。隣で魔術師の仲間が膝をつく。

「・・・つく、」

「なあにが“く”だ。お前今笑つたろう？ 子供風情が大人に敵う訳がないと、笑つたな？ 思い上がるな。」

右にいた魔術師の圧力が増したらしく、彼はすでに床に潰されるように伸びている。

術を発動している今がチャンスだと思つた仲間が斬りかかってゆく。それを己の剣をすつと横一線に引いて・・・消えた。彼は、消えた。

「ど・・・。」

「飛ばしたわ。それとも？ 真つ二つに切られた遺体が転がっているのが趣味か？ 今頃森の中だ。きつといい餌だろう？」

(魔獣のか?)

ここに至つてようやく俺たちは自分たちが相手をしているのがただの人間でも見た目通りの子供でもない事に気が付いた。が、

「遅い。そもそもお前たち程度でダグがやられると思っていたのか？ 完全な捨て駒だと気が付かないお前たちは愚かだな。」

初動から気配を読まれていたらしく結界が二重に張られていて城どころか会場からすら出られない。

(何時？そんな気配は……)

「我は詠唱などいらぬからな。……さて・皆を森に送ってやつてもいいが……。」

と言いながら、女はぐるりと俺たちを見回した。

「さっきのがエーリツヒ。お前がグイン、ドール、ハインツ。」

一人一人を指さしながら名を読み上げてゆく。そして名を呼ばれた者は次々に消えた。

「次にロバート。お前にはプレゼントがあるよ。」

「え？」

声を出した瞬間、キーンと音がして、自分が透明な箱に入っているのが解った。2メル四方の箱の中に。

叩けど体当たりをせども壊れない結界の箱。

「ダグ、お開きだ。それと宰相を呼べ。ダンとルーカス。魔術部隊のクレアスも。我は一足先に執務室へ飛ぶ。ロバート、そしてヒース、付き合っつて貰うぞ。」

俺は箱に入ったまま、ヒースは何時の間にそうなっていたのか鳶の様なものが全身に巻き付いた恰好のまま、転移させられた。 > p b e <

王の執務室としては、実用重視でかなり簡素な方だろう部屋に女は座り足を組んでいる。

「お前は何者だ？」

ヒースが言いながら身体を振る。少しでも緩まないかとしているのだろうか。

「無駄だ。それはただの鳶ではないからな。お前の感情や行動を読んで蠢く。あまり反抗すると締め上げるよ。」

纏めていた髪をさらりと落とした女はすらりとした足を投げ出すよ

うにしてヒールを脱いだ。

「いったい。全くこれは高くつくぞ、ダグめ。」
足をぶらぶらさせながらいう女。

「王の女か？娼婦か？王妃候補か？」

「・・・自分が何様だと思ってる？ ただの捕虜だろう？ああ違うか？ 助けも来ないなら捕虜にはなりえないな。なあロバート。」
ヒースの上から目線な言葉にそう返して、女は俺をじっと見る。

（知っている？ 何を？ 秘密を、か？ 何故？ 俺以外は・・・。）

「答えてやろう、皆が来たらな。それまで黙ってる、煩いから。」
それから、本当に全く何を言わなくなった女は、ヒースの口すら術で封じた。そうしておいて、何やら部屋の中のクローゼットをこそごそしているかと思ったら“これでいいや”と言って服を取り出しまた知らない言葉を呟くと、次の瞬間にはその服を着用していた。

「・・・テリアス、それ俺の服だな。お前勝手にサイズ縮めたる？」

「大丈夫だ。脱いだら元に戻る。ドレスきついんだよ。」

「似合っていましたのに。」

「クレアス。飛ばすよ？」

「あの足の横に入っていたアレ、何ですか？」

「ああ、スリットってゆーんだ。あれが深く入る時は基本下着は付けないんだよ？見えたらダサイだろ？」

「“ダサイ” って？」

「ああ格好悪いってこと。せつかくのドレスに下着の線が出るし。」

「じゃあさつき・・・。」

「履いてなかったよ。・・・ってダグ、顔怖いなあ。っーかスケベだな。」

「スっ・・・お前！・・・まあ、いい。それに関して色々後から話すとして、だ。こいつらは？」

目の前で散々関係ない、緊張感のない話をしていた面々7名はやつとこちらを注目する。

顔は知っている。

国王ダグラス。宰相ディーク。近衛隊隊長ダンと副長ルーカス。魔術部隊隊長クレアスと、おそらく副長のモニカ。そして・・・俺たちを捕えた、女だ。

「何でモニカ？」

「は・・・初めてお目にかかる私の名を・・・光栄です。」
まるで王にするように膝をついて深く頭を下げる副長。

(?)

王の前で、王以外の者にそこまでの礼を取るといふ事が解せない。

「モニカ、立つて。せつかくの綺麗な膝が押しつけたらもったいないよ。」

手を取って立たせる女に、副長は真つ赤になってポーンとしている。

「天然か？ 女ったらしめ。」

「タラシてない。でもモニカ、綺麗な赤毛だね。よく似合ってる。」
髪を撫でながら女はそう言つて副長をソファにエスコート。自分より小さな女にエスコートされていながらも副長は夢の世界から帰つてこないような表情をしていた。

「変な雰囲気を作るな！ で！」

と王は女の肩を掴んで引き寄せて己の懐へ入れてしまう。

(やはり王のお気に入りか?)

「山向こうからのお客様だよ。こつちがロバート。王宮魔術師。

こいつはヒース。ヒース・デ・クルージア。現クルージア王の第3皇子さ。歳は17、母親は第2夫人のアン。元先代王妃付きの侍女だね。今回の襲撃はね、次期王の第1皇子の差し金んだけど実は裏情報があつてね。それを全部知ってるのがこいつ、ロバート。ね？ ロバート。」

女がそう言つと、皆“やつぱり”といった表情でこちらを見た。王には加護が付いている、その精霊が教えていたのだらう。だがしか

し女には加護は付いてないのに、なぜ解った？しかも名前まで。

「裏事情とは？」

近衛隊長が王に聞く。

「俺は知らんぞ。他国の事情など。そもそもクルージアなど相手にもならん。」

王はそう言うと肩を竦めて腕の中の女を見る。

女は元々表情が出にくいのかえてしてそう作っているのか、無表情のまま俺を見た。

「帰れないよ貴方、ロバート。」

「つな・・・。」

そんなはずは、ない。

そういう約束だった。

「“約束”は守る気がある人たちだけのものであって、守る気がない奴にとっては、騙せるいいネタだよ。尤もお前のお家再興は第1皇子のアレンがするといっても出来ないよ。」

(何故？・・・何故知っている。どうして出来ない。)

「お前は何も知らないのだね・・・ああ聞かなかったのか。父親に反発ばかりした挙句に大切な事を聞きそびれたのだね。グラン家の当主はいい人だというのに。何不自由なくお前を育ててくれたらう？」

「こっちは？」

魔術隊隊長が皇子を指して聞く。

「ああ、こいつはね、物事の表面しか見ないから間違いを犯したんだ。で、アレンが激怒して国から出した。二度と戻れないよ。」

「何を言ってる！」

ヒースが噛みついたが、それをゴツンと王が殴って黙らせる。

「アレンがか？ あ奴は意外と気の長い方だぞ？ あれが怒るとなれば相当の事をしないと。」

「“した”んだよ、相当な事を。アレンの妃候補の腹を蹴った。」

「「は？」」「「は？」」

宰相とダンとルーカスの声が重なった。

「その娘の腹には、子がいたんだよ、“アレン”の。つまりは次の世継ぎだ。・・・流れたよ、可哀想に。しかもこの先リーリイは子を望めなくなった。それを知ったアレンが怒ってこいつを死なせるつもりで今回の嘘ネタを吹き込んで出したんだ。」

嘘ネタ、とはこのライオネルが建国祭の後にクルージアに攻めて来るというものだった。理由は国土拡大。俺もそう聞いた。ただヒースと違うのはそれが“ウソ”だと知っていたことだ。ライオネルの王宮にヒースを送り込んだら、俺の任務は終了で、すぐさま街外れにいる仲間と合流して自国へ帰る手筈になっていた。

「だってあの女は・・・兄以外の・・・。」

「そこが馬鹿だと言っているんだ。それをお前に吹き込んだのは同じ妃候補のラム家のラインだろう？　ラム家は取り潰しになったぞ、当主は投獄。ラインは死刑だ。お前が殺されなかったのはただ単に王子だったからだ。馬鹿でも王の子だからな。・・・“私と王子は愛し合っておりまして、あの女が割り込んできた上に、恋人がいますのよ？　その男の子を身籠っていると専らの噂ですわ。ああヒース様、私、いかがいたしたらよろしいのでしょうか？　・・・だる？」

声までそっくりに言い回して、女はヒースへ言った。

「今頃はアレンとリーリイの婚儀が行われている。子がなせなくともアレンはリーリイを選んだ。王も頷いた。誰一人反対しておる者はいない。お前、よく知らなかったらう？　ラインは最もアレンが嫌っていた女だった事を。家柄上無視できずに候補に入ってはいたが、アレンはあれと話したことすらないぞ、無視していたからな。それよりもリーリイとは学生時代からの付き合いで、その上アレンが迫りまくってやっと落とした女だったんだ。逃げられないように、わざわざ子まで仕込んだというのに、お前が殺した。」

ヒースは茫然とその話を聞いていた。“嘘だ！”と叫ぶには内部事情を知り過ぎているし、死刑までは俺も知っている事だから、おそ

らく嘘ではない。

「子を産めないという事でリーリイは辞そうとしたが、アレンが脅して止めた。」

“ お前が私の元を去るといふのなら、私は王にはならない。幸いしたには弟が一人いるからな。” ってな。ベタぼれだな。それで家臣や王や王妃に説得されてリーリイは結婚に踏み切ったんだ。アレンとリーリイの子ならば、きっと賢い子だったろうにな。」

と話す女の言葉に、ヒースは反応せず、ただ“一人、ひとり”と呟いている。そう、アレン皇子の言葉だ。“下に弟が一人”と。本当であれば、“二人”だ。アレンとヒースの間にもう一人、神官をしているエロール皇子がいる。

それをあえて“一人”という言葉を使ったのだから、本当にヒースを帰らせる気はないのだ。死んでもいいと思っっているのだ。

お？・・・ああ解った。いいのか？へえ・・・。

「誰と話している？」

（何で精霊語を？この女は精霊なのか？）

王の問いかけに女は答えた。

「父だ。リーリイの元へ行ってもいいと。」

どういふ事なんだろう。父とは？

「・・・という事は、治されるのですか？」

モニカという副長が言うのにコクンと肯く。

「治してもいいと。リーリイは魂の格が高いから。ちょっと行ってくる。ダグ、その二人塔の最上階に隔離してて。結界張ってある。」
言葉を残し、女は消えた。

（消えた・・・だと？ 魔法陣などなかった。）

俺たち2人は驚愕で声も出なかった。そんな俺たちを引っ張って立たせながら近衛隊長が言う。

「もつと驚くぞ、あの方の正体を知ったら。自分たちが誰に向かって弓を引いたのか恐れ多いぞ。」

厳肅な式の中、急に神官が黙りこみ空中を見つめた。

ざわざわと参列した貴族や家族たちが騒ぎだした時だった。目が開けていられないほどの光がそこに射し、思わずリーリイを抱きしめて座り込んだ先、光に包まれる様にして立っていた光る人影。

「誰・・・だ！」

兵が慌てて駆け出してくるのに、神官が手を振って制する。その上、母上も。

「控えなさい！来てはいけません。」

そう言つて神官ともども壇上から降りると、私たちをも引つ張つて下ろし、その場に膝をつくように促した。

(何が？一体・・・。)

「愛し子様、眩しすぎてお姿が見えません。」

神官がそう言つて、皆びっくりしてその眩しい光を見つめた。

神の愛し子が現れた、という話は聞いている。世界を見る為に旅立つた。その事を神官に問い合わせた時、彼は言ったのだ。

『愛し子様は、“覚悟して待つように”とおっしゃっていらつしやいました。怖い方ではありませんよ。見た目に惑わされると痛い目を見ますが。』と笑つてというか苦笑して言っていた。

「ああ、悪い・・・これでいいか？」

光が収まるというより吸収される様に緩くなり、愛し子が現れた。見た目は少年？ いや少女？ 性別が解りにくいのかそれとも“ない”のか解らないが、人間に照らし合わせると10代の子供みたいに見えた。

この世に二つとない漆黒の瞳は、それ自体が光っている様に惹きこまれる。同じく漆黒の髪を靡かせて愛し子は立っていた。

「まさか来ていただけるとは・・・。精霊の言葉を聞き、驚きました。

「母上がそう言つて涙ぐむと、愛し子はさらりと笑つた。」

「ルーシイ、お前が毎日祈つていたのは知つてゐる。聞こえたからな。雨が降ろうが風が強かろうがやってきたな。しかし身体の調子が悪い時はやめておけ。主治医の言う事は聞くものだよ。・・・お前の願いを叶えよう。父に代わつて我がな。・・・リーリイ。」

泣いてゐる母上に注がれてゐた視線がリーリイへと向けられる。その無表情は、しかしとても温かく感じた。それをリーリイも感じていたのか、小さく返事をして立ちあがる。

「辛かつたな。よく耐えたな。偉かつたよ。」

そう言いながらリーリイの頭に触れた。その手から金の粒子が流れ落ちてゐる。リーリイはその言葉に泣きだした。気丈にはいてもやはりかなり堪えているんだ。

「アレン。」

「はい。」

「リーリイを生涯守り通すと誓うか？ 例え困難な時も病める時も健やかな時も、お前は感謝の気持ちをお忘れず、彼女だけを見つめていられるか？」

「はい、勿論。」

そのつもりだ。出会つた時から。

「では、もしそれに反したと我がみなした時、お前は再び宝を失う事になるか？」

それでもいいかと。

「はい！ 私にはリーリイ以外考えられません。たとえこの先王になれなくとも、市井に下る事になろうとも、彼女だけを守つていくと決めてゐるのです。」

そう大きな声ではつきりときつぱりと宣言する。それは愛し子だけでなく、これから先不埒な事を言い出しかねない貴族たちに対しての牽制でもあつた。

「良い。ではリーリイ。お前に再び生命の芽を与えよう。それが王

妃の願いであり、お前の願いでもあろう？」

ハツと息を飲む。“生命の芽”とは？

横を見るとリーリイはお腹を擦っていた。

キーン・・・と空気が張り詰めた。愛し子とリーリイの二人だけが光に包まれ、その光は温かく涙が零れる感情を起させる。

どれほどの時間だったのか・・・もしかしたらすぐの事だったのだろうか、皆夢見心地のような顔つきをしていた。

「王、王妃、アレン。皆もよく聞け。生命の芽はリーリイの腹に芽吹いた。この先リーリイは何人かの子を成す。心配せずとも男女ともに生まれる。リーリイを害するな。我はいつも見ている事を忘れるな。精霊は我に通ずる。・・・王妃に感謝せよ。」

最後の言葉は小さな声で私たち2人にもみ聞こえた。

「母上！・・・は・・・はう・・・。」

涙が止まらない。

そんな私にリーリイが寄り添ってくれる。その細い指で涙を拭ってくれる。

「愛し子様。ありがとうございます！もうこれで・・・。」

「それ以上は言うなよ、ルーシイ。お前にはまだ仕事が残っている。リーリイが生む子をしかと育てるのだ。ただ甘やかすな、我儘と甘えを間違えさせるな。国は民の為にあるとしかと教育しろ。この中にも心得違いをしている者がいる様だが、国はお前たちの為にあるのではなく、お前たちの為に民があるのではなく、民があつて国は出来るのだ。民を大切にせぬ者に家族は、国は守れんことを心に留め置け。王族と貴族の役割をしかと果たせ。民が泣く時、国が滅びる。」

けして大きな声ではないと思うが、それは神殿の隅々にまで響いた。思わずひれ伏すくらいに威圧感のある声だった。

「エロール。これへ。」

真つ直ぐに弟を見て、愛し子は手招きをした。

「ダンテ神官。エロールに瞑想の時間を増やして。彼はもっと大き

な力を得られる。貴方が導いて。殻を破れずに苦しんでいる。」
ダンテははいといいエロールを見る。

「では私がやった修業でよろしいですか？」

「うん。それがいい。・・・で、これを与えて。尽きるまで一つづつ。」

と若木の枝を神官に手渡した。

「エロール。半信半疑だったろうがダンテがやった修行はね、本当の事だ。ダンテが植えた枝は育つて大きな木になり、この国に結界を張って守っている。それをお前が今度はするんだ。ダンテが導いてくれる。疑いを挟めば“声”は聞こえない。しっかりやれ。」

「はい！」

“じゃな、また来る。”

そう残して来た時と同じように眩しい光と共に消えた。

23 「生命の芽」(後書き)

せっかくの女装があったという間でした・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9915x/>

彼方の地から

2011年12月13日09時28分発行